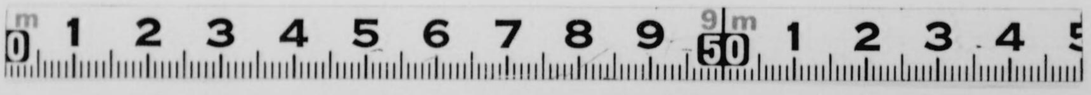
379
12



379-12

國

譯禪宗叢書

第四卷

正
9.1.27
內交

國譯禪宗叢書第四卷凡例

一、本叢書第四卷に收むる所は、圜悟心要(二卷)、禪門寶訓(二卷)、緇門寶藏集(三卷)、三部七卷なり。圜悟心要は佛果圜悟禪師が門下、居士、士大夫等への垂示を蒐輯したるものにして、宗門の要旨を窺ふに最も便なり。此書既に南北朝の頃、盛に叢林の間に行はれ、今猶熾んに流布せり。禪門寶訓は、禪宗の渡來と共に我邦に流傳し、既に鎌倉時代に於て印行せられ、德川時代に到るまで數版を重ねたり。緇門寶藏集は、佛頂國師の撰述にして、參禪者の日常服膺して、辨道の指針となす之に過ぎたるはなし。

一、以上三部の書中、圜悟心要、禪門寶訓は支那古德の撰述にして、緇門寶藏集は我邦の撰述なり。圜悟心要は、大慧普覺禪師の

書と相似て、然も其機鋒の嶮峻は大慧の書に過ぎ、禪門寶訓は叢林學徒修養書中の白眉として、古來修禪の徒、本書に依りて古の益を受けたるもの尠からず。若し夫れ緇門寶藏集に到りては、丁寧親切、兒を愍みて醜を忘るゝの思あり。

一、以上三部の書、今次國譯に際しては、圜悟心要は德川朝の版本を底本となし、古版に據りて之を校合せり。緇門寶訓は延寶の版本に據り、緇門寶藏集は、寛文十三年の版本に據りて之を校合せり。

大正八年十一月

編者誌す

國譯禪宗叢書　第四卷

目次

國譯佛果圜悟眞覺禪師心要解題……一——二
國譯佛果圜悟眞覺禪師心要……一——二〇九
佛果圜悟眞覺禪師心要原文……一——一一六
國譯禪門寶訓集解題……一——二
國譯禪門寶訓集……一——一四四
禪門寶訓集原文……一——六一

目次

國譯緇門寶藏集解題……一――二
國譯緇門寶藏集……一――七八
緇門寶藏集原文……一――四八

國譯佛果圜悟眞覺禪師心要

解題

圜悟心要上下二卷は、克勤佛果禪師の垂示にして、禪師が機に觸れ緣に應じて、門下、居士、士大夫等に示されたる語要を、門人子文の編輯せしものなり。

此書夙に我邦に流傳し、後醍醐帝の嘉曆三年初めて印行せられ、次で曆應の初め又重刻せられたり。

嘉曆本の卷末識語に曰く、

道證大師、鏤佛果老人心要焉、其用心之勤、見於後序、但彼後序、偏述南北參禪與座禪之異、匪遑縷羅此書之蘊、故云以至見機而作、今察以至兩字正思欲贊許禪定等、何故、治生產業猶□、出入諸禪自在世無礙哉、蓋曹溪斥坐禪、所以顯其性、圜悟勸座禪、所以治其病、所謂禹稷顏回同道者耶、時嘉曆戊辰寒食之日。

以つて本書の我が叢林に傳來の久しきを知るに足るべし。

傳を按ずるに、禪師名は克勤、彭州駱氏の子、世々儒を業とす。師兒たりし時、偶々妙寂寺に游び、

比丘尼　如淨謹跋

佛書を見て三復し、舊物を獲たるが如し。曰く、「予は殆ど過去の沙門なり」と。卽ち出家を志し、自省に依つて祝髮し、文照に從つて講說を聽き、敏行に從つて楞嚴を受く。尋で玉泉の皓に謁し、又金鑾の信、大潙の茁、黃龍の心、東林の度に依る、皆以つて法器となす。晦堂曰く、「他日隆濟の一派、子に依りて興らん」と。最後に新州に至り、五祖法演に參じ、盡く其の奧旨を領ず。是に至つて崇寧中、鄭里に還り親を省す。翰林の郭知章、法を六祖寺に開かんことを請ふ、卽ち寺を昭覺と更む。政和の頃、寺事を謝し、峽を出でゝ南游す、時に張無盡、荆南に在り、師之れに謁して華嚴を談ず、無盡居士、信敬して之れを拜禮し、留つて碧巖に住し、復た道林に徙る。樞密の鄧公子常、奏して紫服師號を賜ひ、詔して金龍の蔣山に住せしめ、又勅して天寧萬壽に住せしむ。常に召見して褒寵甚だ渥し。建炎の初め又鎭江の金山に遷る。適々高宗駕して揚州に幸し、入對して號を圜悟禪師と賜ふ。次で江西の雲居に徙り、之を久しうして還つて昭覺を領す。紹興五年八月微恙を示し、書して衆に別れ、筆を投じて逝く。火化して昭覺寺の側に塔す、敕して眞覺禪師と謚す。

國譯佛果圜悟眞覺禪師心要卷上

嗣法㊐子文編㊑

㊀華藏明首座に示す（江寧府天寧に住す）

祖師の直示、豈に如許の㊁蹊徑あらんや、只だ向上の人の聊か擧著するを聞いて、剔起して便ち行くことを貴ぶ。明眼に㊂覷來れば、早く是れ鈍置。古者の道く、「一隅を擧ぐるに三隅を以て反せざらんものに吾れ與せざる也」と。箇々須らく是れ㊃擧一明三㊄目機銖兩、轉㊅轆々地、㊆疎通㊇俊快にして、始めて提持と稱すべし。豈に見ずや、㊈良遂、㊉麻谷に見ゆ、第一番に見て、谷、便ち㊋方丈に入りて門を閉卻す、渠れ疑著す。第二次に至るに及んで、谷、㊌驟步

㊀華藏明首座に示す。江寧府天寧に住す。

㊁蹊徑。徑路、小路なり。

㊂覷。見る。

㊃擧一明三。一を擧げて三を明らかにす。

㊄目機銖兩。目機は目力、銖兩は微細。

㊅轆轆地。轆轆は車輪の轉ずるさま。

㊆疎通。疎は疎放、通は通達。

㊇俊快。俊は俊才、快は快利。

㊈良遂。麻谷の法嗣。

㊉麻谷。麻谷寶徹。

㊋方丈。住持の居室。

㊌驟步。驟は馬の速く走る。

㊀佛果圜悟眞覺禪師。は五祖法演禪師の法嗣にして、成都昭覺寺に住し、克勤といふ。彭州駱氏の子也、偶々妙寂寺に遊びて、佛書を見、三復悵然として舊物を獲るが如く、遂に沙門となる。張無盡は當時の居士なり、師を禮して碧巖に留居せしむ、有名なる碧巖の評は玆に成る。復道林寺に徙る。樞密鄧子常、世宗に奏して、紫衣及び佛果の號を賜ひ、詔して金陵蔣山に住せしめ、天寧、萬壽に補任し、建炎の初め、又金山に遷る。聖駕臨幸して、入對顏る旨に叶ふ。圜悟は遂に雲居より成都の昭覺を領じ、紹興五年八月己酉、微恙を示し、趺坐書偈して逝く。實に南宋高宗の治世にして、塔を昭覺に立て、謚して眞覺禪師といふ。（會元）

㊁子文。會元十九に依れば、台州洪福子文禪師にして、圜悟佛果の法嗣なり。

㊂華藏明。有楚明禪師、姓は李氏嘉州の人、圜悟の嗣か。但し華藏密印といふあれど、これは安民といひ、民者の語、下に出づれば、恐らくこの人にあらず、有楚禪師ならん。

㊃蹊徑。徑路、小路なり。

して菜園裏に去る、渠れ便ち㊂瞥地、乃ち谷に謂うて曰く、「和尙、良遂を謾ずること莫れ、若し來りて和尙に見えずんば、泊んど㋑十二本經論に一生を㋺賺過せられん」と。看よ、渠れ恁地にして妨げず省力あることを。既に歸りて、徒に謂うて曰く、「諸人の知る處、良遂捴て知る、良遂の知る處、諸人知らず」と。信に知りぬ、渠の知處、風を通せざる有ることを。諸人卒に未だ㋩薦得せずんば、謂つ可し、眞の師子兒、他家の種草たらんと要せば、直に須らく更に他に一頭地を出して始めて得べしと。

㋩達磨、梁に游び魏に入り、㋥落草、人を尋ぬ。㋭少林に向つて冷坐九年、深雪の中、一個を覓め得たり。最後に至りて、箇の何をか得たると問ふに及んで、卻つて只だ禮三拜して、位に依つて立つ。遂に得髓の言あり。株を守り、兎を待つの流をして、競つて無言禮拜して、位に依るを以て、得髓の深致と爲さしむるに至る。殊に知らず、㋬劍去りて久しきことを。爾、方に舟を刻む、豈に曾て夢にだも、祖師を見んや。若し是れ本色眞正の道流ならば、須らく情を超え見を離れ、別に生涯あるべし。終に死水裏に向つて活計を作さず、方に他家の基業を承紹し得て、箇の裏に到りて直に須らく從上來の事あるを知るべし。所謂善く㋻柳下惠を學び終に其の迹を師とせず、是の故に古人道く、「一句合頭の語、萬劫の㋼繫驢橛」と。鹹なるかな。

㋽破有法王、世間に出現して衆生の欲に隨つて、種々に說法す、將に知るべし、所說、皆方便たることを。只だ執を破り、疑を破り、解路我見を破らんが爲なり、並に許多の惡覺惡見なくんば、佛、亦必ず出現せず、況んや種々の法を說くをや。

古人、㋾得旨の後、深山苧次、石室に向つて、折脚鐺子に飯を養て喫し、十年二十年、大いに人生を忘れ、永く塵寰を謝す。今時は敢て此くの如きを望まず、但只だ名を韜み迹を晦まし、本分を守りて、箇の㋿骨律錐

㋑戲。伺ひ視るなり。
㋺擧一明三。一隅を擧ぐるの義なり。
㋩目機銖兩。一目便ち銖兩を定むるの義なり、機銖兩共に重さ也。十黍を絲、十絲を銖、十銖を錙、二十四銖を兩となす。
㋥轆轆。圓轉なり。
㋭疎通。また疏通に作る、達するなり。
㋮俊快。疾なり、眞なり、智千人に過ぐ。
㋯良遂。泰州良遂禪師。(傳燈第九)
㋰麻谷。馬大師法嗣、蒲州麻谷山寶徹禪師。(傳燈九)
㋱方丈。維摩居士の居室、一丈四方なりし故事に基きて、寺院住持の正寢に名けたり。
㋲驟。疾速なり。
㋳瞥。過目なり、瞥然は即ち忽然了悟の義なり。
㋴十二本。即ち十二部經なり。

一契經、二重頌、三授記、四諷誦、五無問自說、六因緣、七譬喩、八本事、九本生、十方廣、十一未曾有、十二論議。即ち是なり。
㋵驢。音は閭、實ならざる也、人をだますなり。
㋶橛。進なり。
㋷達磨。菩提達磨は、圓覺大師と說ぎらる、南天竺香子王の第三子、般若多羅に嗣法し、支那、嵩山少林寺に慧可を得、遂に去ると。或は玆に入寂すと、未だ確かならず。
㋸落草。方語、正路に在らず、又小說に賊のなかまを落草と云ふ。
㋹少林。唐の佛陀、嵩山に奉勅して少林寺を建つと。河南府嵩山にあり、中岳は嵩山、東は大室、西を少室といへり。
㋺劍去りて舟を刻む。楚人江を涉り、劍を水中に墜す、遽かに其の舟を刻して曰く、是れ吾が劍の墜つる所なりと、舟を止めて其の刻む所より水に入つて之を求む、舟は進み劍は動かず、依りて劍を得る能はず云云(呂氏春秋)。大道の旋處を閑卻して、徒に言句葛藤を追求するを評する語とす。
㋻柳下惠。柳下惠、暗夜郭子の門に至り宿す、女子あり、即ち共に室す。天寒なり、その女子の凍死せんことを恐れて、下惠懷中に抱き坐して徹宵遂に亂を爲さずと。柳下惠は魯の大夫にして、惠はその諡なり。
㋼繫驢橛。此語は、會元五、船子德誠禪師の章に出でたる語にして、驢馬を繫ぐ木橛なり。一、束縛せられて自由のきかぬと、文字言句に固執して撥轉の作略を闕くに喩ふ。二、役

の老衲と作りて、自ら所契所證を以て、己が力量に隨つて受用し、舊業を消遣し、宿習を融通し、或は餘力あらば、推して以て人に及ぼし、㋒般若の緣を結び、自己の脚跟を鍊磨して、純熟せしめば、譬へば閑荒草裏に、一箇半箇を撥剔するが如し。同じく有ることを知りて、共に生死を脫し、轉じて未來を益して、以て佛祖の深恩に報ず、抑も已むを得ず、霜露果熟して推して將に出世せしむれば、緣に應じ順適して人天を開拓す。終に心を有求に操らず、何に況んや、貴勢を依倚して、流俗阿師の擧止を作し、凡を欺き、聖を罔にし、利を苟め名を圖りて㋓無間の業を作さんや。縱ひ機緣無くんば、只だ恁くして世を度るとも亦業果なし、眞の出塵の㋔羅漢なり。

僧、㋕天皇に問ふ、「如何なるか是れ戒定慧。」皇云く、「我が這裏、恁の閑家具なし」と。又㋖德山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「佛は是れ西天の老比丘」と。又㋗石頭に問ふ、「如何なるか是れ道。」答へて云く、「木頭」と。「如何なるか是れ禪。」云く、㋘「磉墩」と。僧、㋙雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の譚。」答へて云く、㋚「餬餅」と。又㋛趙州に問ふ、「如何

に立たぬ、つまらぬ者、掌量するに足らざる者といふ意。
㋒破有法王。法華、藥草喩品偈文に出づ。
㋐得旨。無業國師廣錄の語、禪宗の宗旨を嗣ぐこと。
㋔骨律、骨立音同じ。
㋒般若。智慧と譯す、法界の事理を照して、能く一切の眞性に通達する靈智をいふ。
㋓無間業。阿鼻を此に無間と譯し、地獄の一なり。業は生死輪廻の所業なり。
㋔羅漢。泥に投じて自ら溺る故に凡夫と曰ふ、此の門を透得するを出塵の羅漢となす。(四十二章經)
㋕天皇。石頭希遷法嗣、天皇道悟禪師。(傳燈十四)
㋖德山。龍潭信法嗣、郢州德山宣鑑禪師、劍南の人なり。(傳燈十五)

なるか是れ祖師西來意。」云く、「庭前の栢樹子。」又㋘清平に問ふ、「如何なるか是れ有漏。」答へて云く、「笊籬」と。又無漏を問ふ、答へて云く、「木杓」と。㋙三角に問ふ、「如何なるか是れ三寶。」答へて云く、「禾粟豆」と。是れ皆前世本分の宗師、脚、實地を蹋み、本分垂慈の語なり。若し他の語に隨へば、卽ち㋚辜負することゝ成らん、若し他の語に隨はずんば、又且く如何んが㋛領略せん。㋜金剛の正眼を具して、卽ち落處を知らば㋝除非す。

此の門は㋞瞥脫にして契證す、卻つて是れ素より未だ曾て人の㋟壞持を經ず。拍盲百不知にして、一旦利根の種性を以て、㋠孟八郎にして便ち透りて、直下に承當す。用ひんと要せば便ち用ひ、行ぜんと要せば卽ち行ず、そこばく般の㋡心行なし。純熟して頓に放著して、所在便ち休歇安樂を得、終日、飽飽々地なり。妨げず、眞正なることを。最も整理し難きは、是れ㋢半前落後、光影を瞻視することを認得して、聽聞聲に隨はず、寂湛の性を守りて、便ち至寶と爲して懷いて胸中に在り、終日、照々靈々、雜知雜解ありて、自ら我も亦見處あり。曾て宗師の印證を得たりと擔負して、惟れ只だ我見を增長し、便ち古今を雌黃し、佛祖を印證し、一切を輕毀す。

㋙石頭。青原行思法嗣。(傳燈十四)
㋚磉墩。礎なり、磉に作るは非なり。
㋛雲門。韶州雲門山文偃禪師。
㋜餬餅。亦胡餅に作る、轉名に胡餅は胡麻を以て作るとなす、俗にいふ、どらやきもち、あんころもちの類なり。
㋝趙州。南泉普願法嗣、趙州觀音院從諗禪師。(傳燈十)
㋞清平。青原下四世、鎭州清平山令遵禪師、黐機學に嗣ぐ。(傳燈十五)
㋟三角。潭州三角山總印禪師、南岳讓に嗣ぐ。(傳燈七)
㋠辜負。旨にそむくことなり。
㋡領略。領受なり、略取なり。
㋢金剛。金中最剛の意、堅と利の二義あり、堅は萬物を破し得ざるが故に、利は能く萬物を擊破するを以てなり。
㋣除非。只の字の義なり、小說

問著すれば卽ち伎倆を作し、黏じて一堆と作す。殊に知らず、㋺末上便ち錯りて㋩定盤星子を認むることを。渠が與めに方便を作して、黏を解き縛を去るに至るに及んで、便ち謂ふ、「人を移換し人を捩轉して、恁麼の心行を作す」と。此くのごとくならば、何の救ふ處か有らん。是れ驀地に自解して非を知るをば除く、卻つて將ち來りて須らく放得下すべし。善智識と爲して此等に遇著せば、須らく是れ大手脚ために烹鍊して、一箇半箇を救ひ得て徹することを得せしむべし。妨げず邪を飜して正と成すことを、卻つて是れ箇の沒量の大人なり。何が故ぞ、只だ病多くして藥性を諳ずるが爲なり。

得底人、心機泯絶し、照體已に忘じて渾て領覽なし、只だ閑々地を守りて㋥諸天花を捧ぐるに路なく、魔外潛に覷ふも見えず、深々海底に行く、㋭漏盡き意解して所作平常なり。㋬三家村裏に似て以て異なることなし、直下に懷を放ち、養ひて恁麼の處に到るとも、亦未だ肯て住在せず、纎毫有るも便ち泰山の如きを覺ゆ。人を礙塞するに似ることを、便卽ち㋮擺撥すべし、淳ら是れ理地なりと雖も、亦取るべき無し。若し取著せば卽ち是れ見刺なり。所以に道く、「道無心にして人に合ふ、人無心にして道に合ふ。」と、豈に肯て自ら我は是れ得底の人なりと衒はんや、他を原ぬるに、深く人の知らんことを欲せば、喚んで㋯絶學無爲、古と儔を爲す、眞道人なりと作す。

德山一日齋晚し、老子鉢を持し方丈より下り來る、雪峯云く、「鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに、托鉢して何れの處に向つてか去る。」山低頭して遂に回る。巖頭聞いて云く、「大小德山未だ末後の句を會せざる在り。」德山謂く、「汝老僧を肯はざるや。」巖頭遂に密に其の意を啓す。山次の日、㋱陞座、尋常と迥に殊なり、巖頭掌を㋲拊つて大衆に謂つて曰く、「且喜すらくは、老漢末後の句を會することを。」と、然も是くの如くなりと雖も、只だ三年を得べし。此れ箇の㋳公案㋴叢林解會するもの極めて多し。然も的確にして透得する者有ること少し。有は眞に此の句有りと以謂へり、有は父子唱和す、實に此の句なしと以謂へり、有は此の句須らく密かに傳授すべく以謂へり。免れず、只だ是れ話會して機路を增長することを。本分を去ること甚だ遠し。所以に道く、㋷「醍醐の上味は、世の爲に珍たるも、此等

㋺末上。上に或は只除是に、或は只除非に作る。就ち是れ只是非を除くの義、なんの、かの、なしにたゞと云ふなり。
㋻便。過目なり。
㋼黏。壞持。破壞護持の義なり。
㋽孟八郎。孟浪は不着實の意、孟八郎は孟浪氏第八郎の義也、俗に「よこがみやぶり」なり。
㋾心行。意趣向する所なり。
㋿半前落後。前村に着かず後店に着かず、おきにもつかず、いそにも着かずの意なり。
㌀末上。最初の義なり。
㌁定盤星。秤の無駄目を云ふ。盤は秤の皿、星は秤桿の量目なり、定は一定して動かざる意にて、定盤星は秤目の第一星、卽ち秤の起點となるべき星なり、此の星は物體の輕重に關係せざる星にて、盤の上に何物をも載せずして紐を執り、分銅を此の星點に置けば、

秤は平らかなり。此の語に二義あり、一は惡しき意、動きのとれぬ著想を示す、二は善き意、輕重の爲に動かざる格外超出の一點星を示す。
㌂諸天捧花。牛頭山融禪師未だ四祖に値はざる以前、牛頭山に居す、百鳥感じて花を啣む、四祖に見えて後、百鳥復た花を啣まず云云。（禪林類聚）
㌃漏盡。法華序品に曰く、諸漏已に盡きて復た煩惱なし云云。
㌄三家村裏。三家の墅、小村店なり。
㌅擺撥。擺開撥剔の義なり。
㌆絶學。絶學無爲の閑道人、妄想を除かず眞をも求めず云々と證道歌に見えたり。
㌇陞座。說法の爲め高廣座に陞ること。
㌈拊。拍つなり。
㌉公案。佛祖の機緣、之を目し

の人に遇へば醍つて毒藥と成る」と。

他、活句に參じて、死句に參せず、活句下に薦得せば永劫忘れず、死句下に薦得すれば自救不了なり。若し祖佛の輿めに師たらんと要せば、須らく活句を明取すべし。㋕韶陽一句を出す、利刀の剪卻するが如し。臨濟、亦云く、㋓「吹毛用ひ了りて急に還た磨すべし」と。此れ豈に㋖陰界中の事ならんや。亦世智辯聰の及ぶ所に非ず、直に是れ深く淵源に徹し、從前の他に依りて解を作す。明昧逆順を打落す、金剛、正印、印定を以て、金剛王寶劍を麾いで、本分の手段を用ふ。所以に道く、「殺人、須らく是れ殺人刀なるべし。活人、須らく是れ活人劍なるべし。既に人を殺得せば須らく人を活得すべし、既に人を活得せば須らく人を殺得すべし」と。若し只だ孤單ならば、則ち偏墮す。㋒垂手の際、卻つて方便を看て、鋒を傷り手を犯さしむる勿れ。著々出身の路あり、八面玲瓏、他を照破す。方に輿めに及を下して、亦須らく緊密にして始めて得べし。稍寬緩なれば、卽ち七に落ち八に落つ。只だ自己等閑に、尙ほ毫髮許りをも留めざれ。設ひ有るも亦斬つて三段と作さん。何に況んや、此の宗門從上の牙爪、其の中の

㋕韶陽。卽ち雲門なり。
㋓吹毛。毛を把りて吹いて劍上に在れば、卽ち毛忽ち斷じ了る也。臨濟傳法頌に曰く、「吹毛用了急須磨」と。
㋖陰界中。五陰界中なり。
㋒垂手。師家が公案を以て、學人を接得するは、菩薩、手を垂れて、衆生を救ふの道なて公案と云ふ。公は公官なり、案は公文書を載するの案机なり。佛祖の機緣、さながら公官の案文の如く、公平無私、天下に通じて錯らざるに似たるよりいふ。官公は公符を以て、天下に行じて、天穆地平民安寧。佛教は、公案を具して、天穆地平民安をなす。

人に遇ふては、纔に拈出す。若し機に投ずれば、則ち共に用ふ、機に投せずんば則ち刻卻す、是を以て要と爲す。了せざる底の事なし、切に力めて之を行ふに在り。

華藏明首座、錦官、夾山、鍾阜より余に從つて游ぶこと十餘年、其の情理、勝解悉く拈去す。此の門に入り來りて、照用機智、解路打㋙摒せざるなし。惟だ向上の一著、室中に百鍛千煉す。このごろ出でて㋚民老を佐く、以て朝夕違去すと謂へり。筆語を得んと欲す、因つて數章を條列して以て之を付す。

㋛張宣撫相公に寄す

疇昔、知を此の道に受くること、極めて深くして、且つ久し、豈に言句を假りて通ず可けんや。然も格外に宗を超ゆること大達大觀の操持する所に在り、千變萬化と雖も掌握の中を出でず。㋜世法佛法、曾て以て異なし。唯だ日用照了の㋝鏡心、像迹、初めより鑒を遺れず、廼ち大定なり。是の故に維摩、飯を㋟香積に取り、座を㋠燈王に借る。㋡妙喜世界を搏ること、陶家の輪の如し。㋢須彌を芥子の中に納れ、劫火を腹內に吸ふこと、由ほ

㋙摒。除に同じ、打字俗話なり。打馬、打水の語あり。
㋚民老。圜悟法嗣、瑞康府華藏密印安民禪師。
㋛張宣撫。張浚字は德遠、高宗の時、果官して右僕射兼知樞密院事となり、孝宗魏國公に封じ、忠獻と謚す。
㋜世法佛法。法は如々不動にして、時と處によつて變化あらずと雖も、その運用は千變萬化、世俗にありては世法となり、佛中にあつては佛法となる。
㋝鏡心。鏡中なり。
㋟香積。維摩經香積佛品に出づる佛なり。
㋠燈王。燈明王佛にして、維摩經不思議品に出づ。
㋡妙喜。維摩經阿閦佛品に出づ。
㋢須彌云々。維摩經不思議品に

覆掌を反すがごとし。蓋し中既に虛にして靈、寂にして照なり。此の外の事物、出沒轉旋、他の力を假らず、所謂不可思議を證すること、咸く卽ち㋐方寸の片田地のみ。矧んや功を建て業を立し、德を蘊み誠を操り、左右原に逢ひ、金剛寶劍を秉り、殺活の杖子を拈ず。指揮の際、皆此の妙なり、之を言表意外に期せんとを望む、千萬里と雖も、猶ほ目擊のごとき耳。

又

古よりの聖賢、過量傑出を以て大根器を植うるが如し、獨り此の大因緣を證して、悲願力を以て、萬有同體至淵至奧の一段の事を發揮し直指す。階梯を立せず、頓超して獨り得、空劫已前より湛然として動かず、群靈の根脚を印定す。古今に亙り思慮を絕し、聖凡を出で知見を越ゆ。初より動搖せず、淨倮々活の㋑鱗々見在、一切の有情無情㋒圓具せざる莫し。是の故に釋迦初生に、卽ち天地を指して大いに哮吼し、當頭に拈出す。次に明星を以てし、末後に拈花す。只だ此の正眼を具する底の領略を貴ぶ、爾りしより㋓四七二三密傳す。有ることを知らざる者は、多少の妙用神機有りと以謂へり。只だ波に隨ひ、流を逐ふことを言ふて、初より其の根本を究め

㋐方寸。列子仲尼篇に出づ。「吾見二子之心一、奚方寸之地虛矣哉、聖人也」となり。
㋑鱗々。魚の尾を掉ふ貌。
㋒圓。圓と同じ。
㋓四七二三。西天二十八祖、東土六祖なり。
㋔刺。刺着なり。
㋕李駙馬。谷隱聰禪師法嗣、都尉李導嘉居士なり。駙字は駙馬都尉にして、漢武帝の時におけるなり。
㋖大機大用。佛祖の機と顯はし、上求菩提に熱心、殺活自在なるを大機といひ、佛祖の機によつて、下化衆生に巧明にして、用所巧を極むるを大用といふ。昔、潙山和尚、仰山と問答す。潙山曰く、「百丈再參黃檗、因緣此二章密意志如何。」仰曰く、「此是顯二大機大用。」潙云く、「馬祖八十四人善

す、若し其の至趣を鞠むるに、一㋗箭をも消せず。昔㋘李駙馬、石門に見ゆ、門謂つて曰く、「此れ大丈夫の事なり、將相の能く爲す所に非ず」と。李、卽便ち領ず、頷を以て自ら陳ぶ、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手心頭に著くに便ち拌す、直に無上菩提に趣いて、一切是非管することを莫れ。」と、蓋し上智利根天機已に具す、唯だ確實にして透徹に務む、受用の時に當りて、㋙大機を握り大用を發す、機に先だつて動き物を絕して轉す。㋚巖頭の云く、「物を卻くを上と爲し、物を逐ふを下と爲す」と。若し戰を論ぜば、箇々の力轉處に在り、若し能く物の上に於て轉得疾なれば則ち一切下風に立在す。並に自らの掌握に歸して、擒縱卷舒、悉く點化すべし。居常、自ら處するに泰然安靜なり、纖末を方寸に掛けず、動いて機に應じ、自ら璫璣を秉り、回轉變通大自在を得たり。萬㋛彙萬緣、皆刄を迎へて解く、竹を破る勢の如く、風に從つて靡かずと云ふこと莫し。所以に㋜立處既に眞なれば、用の時力有り、況んや英雄を總領し、貔虎の士を驅り、巨寇を攘ひ、萬姓を撫で、㋝社稷を安じ、㋞中興の業を佐くること、皆只だ此の一著子に仗る。上頭の㋟關鍵を撥轉して、萬世不拔の功、古佛と同見、同聞、同

智識、幾人得二大機一、幾人得二大用一。仰曰く、「百丈得二大機一、黃檗得二大用一、餘者盡是唱導之師云々」と。
㋚巖頭。聯燈二十一、巖頭の章を參照せよ。
㋛彙。類なり。
㋜立所眞。臨濟錄に曰く、「隨所作主、立所皆眞」と。
㋝社稷。國家といふに同じ。
㋞中興の業。宋の建炎三年、金人、都を陷れ、徽欽二帝五國城に幸す。徽宗の第九子高宗、臨安に卽位し、張浚、遂に金を敗ると、是れ中興といふ所なり。
㋟關鍵。戶鑰なり。
㋠四祖。道信大醫禪師、曾槃鑒智の法を嗣ぐ、東土第四祖なり。
㋡永嘉。永嘉眞覺大師なり。道證歌を作る。
㋢無位眞人。臨濟錄に出づる

知、同用す。㋑四祖云く、「心に非ずば佛を問はず。」德山の云く、「佛は只だ是れ箇の無事の人」と。㋺永嘉の云く、「當處を離れず、常に湛然たり、覓めて卽ち知る、君が見る可からざることを、㋻無位の眞人、常に面門より出入す」と云ふ、皆此の㋼蘊なり。

今樞密大丞相、已に之を言外に領じ、聲前に透出す、而も山野剩語、切々敗缺を納る。猥りに釣慈の照さるゝことを蒙る、此を以て遂に㋽老農、㋾老圃、㋿老馬の智を忘れて、芹を獻ず。

圓首座に示す

得道の士は、立處既に孤危峭絕にして、一法と對を作さず、行く時、纖毫をも動せず、豈に止だ林に入りて草を動せず、水に入りて波を動せざるのみならん。蓋し中、已に虛寂にして、外、照功を絕す。㌀翛然自得して無心に徹證す、萬機頓に赴くと雖も、豈に能く其の神を撓り其の慮を干さんや。平時只だ閑々地を守りて、癡の如く兀に似て、事物に臨むに至るに及んで、初より伎倆を作さず。剸割せんと準擬すれば、風旋り電轉す、機に當らずと云ふことなし、豈に素より守る所あるに非ざらんや。是の故に

語。吾人の本覺の佛性をいふ。
㋑蘊。積なり、藏なり。
㋺老農。論語子路に曰く、稼子の曰く、「吾不ㇾ如ニ老農一」と、農は耕田の人也。
㋻老圃。同上、「吾不ㇾ如ニ老圃一」と、圃とは種菜の事なり。
㋼老馬。韓子說林に曰く、桓公孤竹を伐つ、春往冬反し、迷惑して道を失す、管仲曰く、「老馬之知可ㇾ用也、乃放ニ老馬一而隨ㇾ之遂得ㇾ道」と。
㋽翛然。所累なき貌。
㋾功夫。工夫とも書す、もと匠工の技を施すに、累りに心力を勞して造營するに名づく、公案を究辯すること、思考すること、思惟する意に轉じて用ひらる。
㋿赤骨鬣。鳩羅初生して未だ羽毛を生ぜざるなり。
㌀厭墮。厭倦怠墮なり。
㌁謳和。詳しくは謳和俱舍羅と

古德の道は人の射を學んで、久々にして方に中るが如し。悟れば則ち刹那に履踐す。㋑功夫は須らく長遠に資るべし、鵠鳩兒の出生下し來りて、㋺赤骨鬣地に養ひ來り、餧ひ去りて日久しく時深くして、羽毛既に就り、便ち高く飛び遠く擧ることを解するが如し。所以に悟明透徹して政に調伏せんことを要す。只だ諸塵の境界の如し、常流は中に於て窒礙せらる、得底の人の分上に到りては虛通せずと云ふこと無し、全く是れ自家の大解脫の門なり。終日作爲すれども、未だ曾て作爲せず、了に欣厭なし、亦倦怠なし、一切を度し盡すも、而も能所なし、況んや㋻厭墮を生ぜんをや。苟し性質偏枯せば、尤も當に能くせざる所を增益して、放つて圓通ならしめて、㋼謳和を以て、攝化開權、俯仰應接して高低遠邇をして、略ぼ差悞なからしむべし。㋽常不輕の行を行じ、㋾忍辱仙人を學び、先佛の軌儀に遵ひて、㋿三十七品の助道法を成就し、㌀四攝行を堅固にし、大用現前に到りては、喧寂一致なり。水に下る船の如し、篙棹を勞せず、混融含攝して、㌁普賢の行願を圓證す、乃ち出世世間の大善智識なり。古德の云く、「三家村裏須らく自箇の叢林なるべし」と。蓋し叢林なき處には、有志の士と雖も、

いひ、譯して方便といふ。下化の爲の手段なり。
㋽常不輕。常不輕菩薩は、法華常不輕品に出づる佛にして、常に比丘、比丘尼を禮拜し、又悉くを禮拜して曰く、「我深敬ニ汝等一、所以者何、汝等皆行ニ菩薩一、當ㇾ得ニ作佛一」とて、讀經を專にせず、但禮拜を行ずるのみ、故に常中不輕菩薩といへり。
㋾忍辱仙人。大毘婆娑論に出づ。佛往古仙人として、忍辱を行じ山中にありしに、波羅那王晉利一日、此山中を遊行す、其侍女王の眠れるに乘じ、仙人の處に行き法を聞く。王覺めて女を見ず、尋れて仙の傍に得たり、大に怒りて此仙を刺害せんとす、時に仙自ら誓つて曰く、「吾若し嗔無ければ卽ち平復せん。」と、果して後、身體復して元の如くな

亦自便を喜ぶ、恁麼に到りて尤も宜しく執守すべし、唯だ强勉倦まざるを以て、之を終るに在り。喧靜に至りても亦復た爾り、喧處には周旋應變中に虛寂なり、靜處には能く靜縛を被らず、則ち至る所に隨つて、處々皆我が活業なり、唯だ中虛に外順にして、根本有る者能く然り。

大凡そ善知識と爲る、當に慈悲、柔和、善順にして物を接し、平等無諍を以て自ら處るべし。彼れ惡を以て來り、及び惡聲名色を以て我に加へ、非理相干し、誚謗毀辱すとも、但だ步を退いて自照して、己に於て歎むること無れ。一切與に較量すること勿れ、亦動念嗔恨せざれ。只だ與に直下に坐斷して、初より聞かず、見ざるが如く、久々にして魔㋓孽、自ら消せんのみ。若し之と較べば、則ち惡聲相反へさん、豈に了期あらんや。又自己の力量を表顯せざれば、何を以てか常流と異ならん。切に力めて之を行へば、自然に思して服せずと云ふこと無けん。

椎拂の下に人天を開發す、生死を透脫せしむること豈に小因緣ならんや。應に詞色を恬和して機に當りて接引勘對し、其の由來を辨じ、其の存坐を驗して、其の偏墜する所を攻め、其の執著する所を奪つて、直截指示して佛性を見て、大休大歇安樂の場に到らしむべし。所謂

㋑三十七助道品。第一四念所、第二四正勤、第三四如意定、第四五根、第五五力、第六七覺分、第七八正道。合して三十七品なり。

㋒四攝行。菩薩、衆生を化導せんが爲に、必らず此四法を行ず。一布施、二愛語、三利行、四同事、是なり。

㋓菩賢の行願。菩賢は三曼多跋多羅(Samantubhadra)を實名となす。法界に全力遍滿し、諸惡と斷じ、極聖に進む、諸佛最賢の佛なり。三十三身、十九說法をなす。行願に十六願あり。多くは諸行修行の要なり、菩賢菩薩行願讚に詳し。

㋔孽。貪獸虫蟻の怪を云ふ。

釘を抽き楔を拔き、黏を解き縛を去る、切に實法を將て人を繫綴して、是くの如く住し是くの如く執せしむ可からず。別人の移倒を受くること勿れ、此れ毒藥なり。渠をして一生の擔板賺悞を喫著せしむ、豈に利益あらんや。

佛祖出興して、特に此の段の大因緣を唱ふ、之を單傳心印と謂ふ。文字語句を立せず、最上の機を接す、只だ一聞千悟、直下に承當し了りて、修行するを貴ぶ。名聞利養を求めず、唯だ生死を透脫することを務む、今既に其の兒孫と作り須らく它の種草を存すべし。他の古來大有道の士を看るに、動もすれば是れ㋕龍を降し㋖虎を伏し、㋗神明に戒を授け苦を攻む。淡を食し大いに人世を忘し、永く塵寰を謝す。三二十年折脚の鐺兒に飯を煮て喫し、迹を遁れ名を埋めて往々に坐脫立亡す。中に於て一箇半箇諸聖に推し出されて、宗風を建立す、高行を秉らずと云ふこと無し、務めて佛恩を報じ大法を流通し、始めて一言半句を出すこと抑も已むことを得ざるより出でたり。明かに知んぬ是れ接引入理の門、門を敲く瓦子なり。其の體裁力用、妨げず後昆の模範たることを。當に宜しく之を師法として、轉た相勉勵して古風を追復せよ。切に忌む、名を希ひ利を苟むることを、玆れ深

㋕降龍。牧庵虫公、龍を責めたれば、龍は雨を降して梟となすと云云。

㋖伏虎。は故事也、午頭虫公、三虎之に隨ふ云云。

㋗神明。蒿岳珪公の曰く、戒を岳神に授く云云。

㋘簸箕。馬祖章後に蜀に歸る、鄉人喧しく之を迎ふ、溪邊の婆子の曰く、「何の奇特がある、元是れ馬は、簸箕が家の小子なり、」と、師遂に曰く、「君に勸む、鄉に還ることなかれ、鄉に還るも道を成ぜず。」(正宗贊)

㋙大隋。法眞禪師、大安を嗣いで後ち蜀に還る、錫を天彭の堰口山龍懷寺に寄す、路勞に於

く祝するところなり。

馬祖昔、鄉に歸る、㋐簸箕の護を以て道を行じ難きを畏る。因つて再び峽を出づ、緣江西に會ふ。㋑大隋昔、鄉に歸り、先づ龍懷の路口に於て、三載茶湯に衆緣を結ぶ、遂に木庵に隱れて、道蜀に行はる。㋒香林昔、鄉に歸りて、神を潛め照を隱して水晶宮に於て、四十年、一片の事を成ず。正智門老祚を撥ひ尋ねて、雪寶を出して雲門の正宗を大にす。或は留り再び出づる、皆緣を以て斷る、今既に萬里西に歸る、但だ行脚の本志を存せよ、亦必ずしも去留に拘はらざれ。

慈明昔、汾陽を辭す、祝して云く、「修造は自ら人あり、且く佛法のために主となれ」と。爾りしより五たび大刹に據る、一椽を動せず、唯だ臨濟と正宗を提振す。遂に楊岐・黃龍・翠巖の三大士を得て子孫㋓寰海に徧し、果して付授する所に辜かず。蓋し古人以て荷擔すべきの士を擇ぶ、輕んぜざること此くの如し、信に梵苑を嚴飾し、壯麗にす、未だ以て佛法を奇とするに足らざる也。

佛道懸曠なり、久しく勤苦を受けて乃ち成ずることを得べし。祖師門下臂を斷ち雪に立つ、石を㋔腰にし、碓に舂き、麥を擔ひ、車を推し、園を事とし、飯を作り、田疇を開き、湯茶を施す、土を搬び、磨を拽く、皆志を抗げ俗に絕し、自ら强めて息まず、功業を成さんことを圖る者は乃ち之を能くす。所謂未だ一法として墮懈怠の中より生ずること有らず、既に淵源に洞達するを以て、至難至險にして、人の達し能はざる所は、尙ほ能く世を涉りて應酬屈節し、俯仰するに於て能はずと謂はんや、此れ爲さざるなり、能はざるには非ざる也。當に稍㋕雲頭を按下して自ら警め、自ら策すべし。庶幾はくは方便門、寬曠ならんことを。亦善からざらんや。

㋐裕書記に示す（杭州に住する靈隱佛智禪師）

腳は實地を蹋んで安穩の處に到る、時中虛しく棄つる底の工夫なし。綿綿として絲毫を漏さず、湛寂凝然として佛祖も知ること莫し、魔外も捉摸すること無し。是れ自ら無所住の大解脫に住す、無窮の劫を歷と雖も、亦只だ㋖如々地なり、況んや復た諸緣をや。是の中に安住して方に建立して、人の與めに楔を拔き釘を抽く可し、亦只だ渠をして住著なからしめ去る、此れ之を大事の因緣と謂ふ。㋗如來に密語あり、迦葉覆藏せず、乃ち如來の眞の密語なり、覆藏せざるに當りて、卽ち密なり、密に當りて卽ち覆藏せず、此れ豈に情量を繫ぎ得失を立し、窠臼を存し、解會を作す者の與めに舉ぐ可けんや。須らく透脫して實證の地に到るべし。出格超宗頂㋙類

て腹茶し苦く施すこと三年。（會元四）

㋐香林。香林遠禪師、雲門を嗣いで後ち蜀に歸る、永昌宮に於て往來の茶湯を以て接待す、香林衆に謂つて曰く「老僧四十年、方に打つて一片を成す。」（正宗贊）

㋑寰海。畿內縣、寰中の海內なり。

㋒腰石。六祖初めて五祖に謁す、黃梅に於て法乳を相投す、遂に石を腰に負ひ、以て簸舂の務めに供す。（事苑二）

㋓按下雲頭。雲に駕する者は地に下るの意思なり。

㋔裕書記。會元の十九を見よ。

㋖如々。法爾如然の眞理、宇宙萬法の本體をいふ。

㋗如來密語。宰臣門成尙書と俱に、靈居山に入る、齊禪師に問うて曰く「世尊密語あり、迦葉覆藏せず。」師尙書を召して曰く、「會麼」、成曰く「不會なり、」師曰く、「汝若し世尊に不會なれば世尊も不會、汝若し迦葉に會せんとせば迦葉も會す。」（類聚二）

上に向つて領して、始めて得ることを要す。既已に領略せば當に㋕將護すべし、上根大器に遇ふて方に印授す可きをや。

拂を乘り位に據りて宗師と稱す、若し本分作家の手段無くんは未だ免れず、方來を賺悞することを。他を引いて草窠裏に入りて㋖骨董を打し去らしむ。若し金剛の正眼を具せば、須らく灑々落々として唯だ本分の事を以て之を接すべし。直饒ひ見佛と齊しきも、猶ほ佛地の障の有る在り。是の故に從上來棒を行じ、喝を行じ、一機一境一言一句、意鉤頭に在り、只だ獨脫を貴ぶ、切に忌む依草附木なることを。所謂耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふが若し、是くの如くならずんば盡く是れ泥團を弄する漢なり。

方來の禿子夙根有りて工夫を作す、驀地に得入する者、眞正の宗師に遇はざれば、返つて他を引いて㋗露布を作し、機境の中に墮在して、無繩自縛半前落後、是に似て是ならず、最も整理し難し。かならず須らく其の病脈を識り、其の落著を辨じ、其の偏墜する所を徵めて、之を發起して執著住滯を捨てしむべし。然して後に示すに本分の正宗を以てして、疑惑無うして了然として大解脫を得、大寶宅に居し、自然に趂えども亦去らざらしめ、以て大法を洪濟し、祖燈を傳續し、不報の恩を報ずるに堪ふべし。

黃龍老南禪師、昔未だ石霜に見えず、一肚皮の禪を會す。㋙翠巖之を憫んで勸めて慈明に謁せしむ。只だ㋚玄沙の語、靈雲未徹の處を窮究せしむ、時に應じて瓦解冰消、遂に印可を受く。三十年只だ此の印を以て諸方の解路を拈す。病を瘡すに驢馳の藥を假らず、緊要の處、豈に許多の佛法有らんや。

㋖頭。頂顱なり。
㋕將。奬ふなり。
㋖骨董。小雜貨、こまもの。
㋗露布。軍中奏捷の辭、之を露布と謂ふ。
㋙翠巖。雲峰文悅なり。

大宗師の人の爲にする、㋛窠臼路布を立せずと雖も、之を久しうして學徒安を認めて、亦窠臼路布を成す。益々窠臼なきに窠臼と爲し、路布無きに路布を作すを以て、應に須らく之をきはめて盡さしむべし。株を守りて兎を待ち、㋜指を認めて月と爲さしむること無れ。

㋚玄沙語。南公章詳雲峰より出でて南公の石霜に見えしめ、大事の因緣を了し、然も玄摯の語を摯ぐることなし。
㋛窠臼。古は地を掘りて臼と爲す。
㋜指月。修多羅の經を指すに喩へたり。
㋝端倪。幾ほ涯際のごとし。
㋞那伽。龍と釋す。佛は世間の愛を遠離し、繫縛を解脫し、諸漏已に盡く、故に龍に喩ふ。
㋟一句子。藥山惟儼禪師は大衆と夜參禪する時に燈を點ぜず、時に師垂語して曰く、我れに一句子あり云云。（會元五）
㋠秘魔杈。五臺山の嚴和尙は常に一本の杈を持ち、衆僧に對面する時、衆僧を禮拜し、那箇魔魅敎は汝が出家、那箇寬魅敎は汝が行脚道、云云。

機先に在り、風塵草動亦其の㋝端倪を照す、況んや應酬擾々たるを。㋞那伽定にして一法の情に當るなきに非ずんば、安んぞ能く圓應して差ふこと無く、機に先んじて物を照さんや。此れ皆㋞那伽定に在るの効なり。

臨濟の金剛王寶劒、德山の末後の句、藥嶠の㋟一句子、㋠秘魔の杈、俱胝の指、㋝雪峯の輥毬、禾山の打鼓、趙州の喫茶、楊岐の栗棘蓬、金剛圈皆一致のみ、契證し得れば直下に省力あり。一切佛祖の言敎通達せずと云ふこと無けん。唯だ當人の善く自ら洪持するに在るのみ。

㋐ 隆知藏に示す（蘇州に住する虎丘）

有祖以來唯だ單傳直指を務む、水に帶り泥を拖き、露布を打し窠窟を列して人を鈍置することを喜ばず。蓋し釋迦老子三百餘會、機に對して教を設く、世に立ちて範を垂る、大段周遮なり。是の故に最後省要、最上の機を接す。迦葉より二十八世、少しく機關を示し、多く理致を顯すと雖も、付授の際に至りては直面提持せずと云ふこと靡し。㋑ 剎竿を倒し、盞水に㋒ 針を投じ、圓相を示し、赤幡を執り明鑑を把り、鐵橛子の如くなる傳法の偈を說き、達磨の㋓ 六宗を外道と義を立して、天下太平なり。翻轉して我は天、爾は狗と云ふが如くんば、皆神機迅捷にして、擬議思量の測る所に非ず。梁に到り魏に游ぶにおよんで、尤も復た顯に教外別行單傳心印と言ふ。六代傳衣指す所顯著なり、曹谿の大鑒に逮んで、詳かに㋔ 說通宗通を示す。歷涉既に久しうして正眼を具する大解脫の宗匠、格を變じ塗を通じ、久しく名相に滯るものをして、理性言說に墮せざらしめ、活卓々地、脫灑自由の妙機を放出して、遂に棒を行じ喝を行じ、言を以て言を遣り、機を以て機を奪ひ、毒を以て毒を攻め、用を以て用を破ることを見る。所以に流傳七百餘年枝分れ派列

㋐ 俱胝指。會元の四に曰く、「吾れ天龍の一指頭の禪を得て、一生用て盡さず云云。」
㋑ 雪峰穩。雪峰禪師が輥出の三箇の木毬を云ふ。
㋒ 隆知藏。虎丘の紹隆禪師を云ふ。
㋓ 倒剎竿。迦葉阿難を召す、阿難應諾す、迦葉の曰く、門前に剎竿を倒卻して着す。
㋔ 投針示圓相。龍樹が提婆の座前に水を張りたる鉢を出し、其の中へ針を投じ、去つて法を說くも、聲は聞ゆれども形は見えず、而して月輪の圓相を現す云云。
㋕ 六宗。有相、無相、戒行、定慧、無得、寂靜の六なり。
㋖ 說通宗通。は楞伽經の三を見よ。

りて、各家風を擅にし、㋗ 浩々轟々として紀極を知ること莫し。其の歸著を鞠むるに直指人心に出でたるなく、心地既に明かなれば絲毫の隔礙なし。勝負彼我是非知見解會を去りて大休大歇安穩の場に透到すれば、豈に二致あらんや。所謂百川流は異なるも同じく海に歸す。須らく是れ箇の向上の根器、高識遠見を具して、佛祖を紹隆する志氣あるを要す。然る後に能く深く閫奧に入り、底に徹して信得及し、直下に把得住して、始めて印證して種草と爲すに堪へたる可し。此を捨てゝは切に宜しく寶秘の詞を愼むべし。容易に放行すること勿れ。

五祖老人平生孤峻、人を許可すること少し、乾㋘ 曝々地壁立にして、只だ此の一著に靠る。常に自ら云ふ、「一座の須彌山に倚るが如し、豈に虛に落ち滑頭を弄し人を謾ず可けんや。」箇の沒滋味の鐵㋙ 酸虀を把りて、劈頭に學者に拈與して咬嚼せしむ。須らく渠が桶底子脫如許の惡知惡見を喪卻して、胷次絲毫を掛けず、透得淨盡するに到りて、始めて手を下し煅煉すべし、方に拳踢を禁じ得ん。然して後に示すに金剛王寶劍を以てす、其の果の能く履踐負荷し、淨然として一事もなく、山は是れ山、水は是れ水なることを度りて、更に應に那邊の千聖籠羅すれど住まらざる處に轉向して、便ち廼祖以來所證傳持の正法眼藏に契ふべし、應用物の爲にするに至るに及ん

㋗ 浩々轟々。盛大なり、群車の聲なり。
㋘ 曝。燥に作るべし、火裂なり、熱なり。
㋙ 酸虀。酸は餅中裏肉なり、虀は餅中豆なり。
㋚ 摩竭掩室。摩竭はまかだ國にして如來說法の地、掩室は室を掩ふて佛の說法ぜざりしこと、吼耶杜口の語と相對す、世尊の一言を試き給はざりし因緣なり。

で、仍ほ當に耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふて、得十成に滲漏なきことを證驗すべし、卽ち是れ本分の道流なり。

㊂摩竭陁國に親しく此の令を行ず、少林面壁全く正宗を提ぐ、而るを時流錯つて認めて遂に泯默に向つて、以て縫罅なく模索なく、壁立萬仞なりと爲す。殊に知らず本分の事を、情識を恣にし揣量して便ち高見となす、此れ大病なり、從上來の事本是くの如き無し。巖頭の云ふ、「只だ目前の些子を露はす、箇は擊石火閃電光の如し、若し明め得ずとも疑著を用ひざれ。」此は是れ向上の人の行履の處なり、有ることを知るをば除非す、能く之を知る莫けん。

趙州の喫茶去、祕魔の擎杈、雪峰の輥毬、禾山の打鼓、俱胝の一指、歸宗の拽石、玄沙の未徹、德山の棒、臨濟の喝、並に是れ頂に透り底に透り、直截葛藤を剪斷す。大機大用千差萬別會せて一源に歸す、以て人の與めに黏を解き縛を去るべし。若し語に隨つて解を作さば、卽ち須らく本分の草料を與ふべし。譬へば十斛の驢乳に、只だ一滴㊆師子の乳を以て之に滴すれば、悉く皆迸散するが如し。脚跟下傳持し相繼いで綿遠たらんことを要せば、直に須らく人情に徇はざるべし、容易ならしむること勿くんば、乃ち端的なり。

末後の一句始めて牢關に到ると、誠なる哉是の言、死生を透脫し、正印を提持する、全く是れ此の

㊆師子乳。華嚴經入法界品の喩なり。

㊇關楔子。からくりしかけのところ、からくりれぢのところ。

箇の時節なり、惟だ是れ向上の㊇關楔子を蹋著する者の便ち諳悉するをや。

㊀法王沖長老

從上の宗乘高く超え直に證して、㊁師資契會すること斷めて等閑ならず、所以に二祖雪に立つて臂を斷ち黃梅にして負舂す。自餘服勤三十二十載なり、豈に容易に印可せんや。蓋し機を觀て敎を逗するに、百煖千煉纔に偏執疑情有れば、盡く爲めに決破して、底に徹し放下して平穩の履踐を得、轉換して撲不破の地に到りて、㊄皮可漏子の如くに相似て禁當得せしむ。然る後に放出して物を接し生を利す、此れ小小の因緣に非ず、纔に一も周からざれば卽ち模子正しからず。脫得出來すれば七凹八凸、笑を作者に取る、是の故に古德唯だ周正の八面玲瓏たることを務む。內に己に於て行持潔淸なること氷玉の如し、外は則ち圓通謳和して群情を覽る、善く回互すること陂澤の如し。立參の際一一本分の事を以て敲點す、其の㊁領略を待ちて卽ち手段を放ちて與めに琢磨す。譬へば一器の水を一器に傳ふるが如し、切に忌む滲漏することを。其の間に耕を驅り飢を奪ふ、神鬼も測ること莫し。只だ一の大解脫に憑伏して、更に異類相中の頭角を生ぜず。㊅妥貼無爲なり、眞の㊆五戒㊇十善出塵の阿羅

㊀沖長老。續傳燈錄圜悟禪師の下を見よ。

㊁師資。人を敎ふるに道德を以てするを師と謂ふ、資は取なり、卽ち師の敎に從つて取つて行ふなり。

㊂皮可漏子。眞皮は驗撲するとも不破なり、卽ち不破の義なり云ふ。

㊃領略。領收の義。

㊄妥貼。おちつく。

㊅五戒。不殺、不偸、不邪婬、不妄語、不飲酒の五戒を云ふ。

㊆十善。不殺生、不偸盜、不婬欲、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不愚痴。

漢なり。㋐達磨言へること有り、「行解相應するを、之を名けて祖と曰ふ。」

行腳超方は本生死事大たり、接物利生は大善智識たり、止だ大事の因緣を發明すること、此れ相須め相資くるの理なり。古より以て然り、唯だ大法器を荷負するに堪任するもの、乃ち能く壁立萬仞、宗師の㋑鑪㋒韝㋓鉗㋔鎚の中に、煅煉成就して始末眞正なり。是れ出でざるをば除く、一たび出づれば必ず群を驚し衆を動すること定れり。蓋し承當の處、既に㋕莽鹵ならず、付授の時亦率易ならざるに緣りてなり。讓師の曹溪に在るが如くんば、八年馬祖の觀音に與り、德嶠の龍潭に與り、仰山の㋖大圓に於ける、臨濟の斷際に於ける、皆一二十載を下らず。是の故に一言一句一機一境金聲玉振、後世能く窺覦すること莫し。惟だ超證して㋗大同の地に到りぬれば、自然に必ず其の落處あり。憶ふに昔馬祖西堂の爲に云く、「子曾て敎を看るや。」藏の云く、「敎豈に異ならんや。」祖の云く、「然らず子已後人の爲にいかにか東道西說せん。」藏云く、「某病須らく自ら養ふべし、豈に敢へて人の爲にせんや。」祖云く、「子末年に必ず大いに世に興らん。」已にして果然細に古人を詳かにするに、豈に是れ向上の一段、大因緣を大徹大悟して、言像を絕し、分別を離れて、㋘硬糾々の處に、唯だ己自ら知りて、獨り安閑に休歇し去る處を樂しむのみにあらず、然も馬祖尙ほ

㋐達磨有語。傳燈錄初祖章を見よ。
㋑鑪。火床。
㋒韝。火を吹く韋囊。
㋓鉗。頸かせなり。
㋔鎚。つちなり。
㋕莽鹵。輕脫苟且なり。
㋖大圓。傳燈錄の潙山章を見よ。
㋗大同の地。生佛不二。
㋘硬糾々。間に髮を容れざる意思なり。

激勵すること此くの如し。正に圓通轉變して、一隅を守り一處に泥著せざらんことを欲す。須らく古今を該括して踐履融攝し、混圓無際なるべし。利物の時八面に敵を受け、草窟裏の一箇半箇の㋙焦尾を撥得して、種草と作るに堪へんことを貴ぶ、豈に方便して佛祖の恩德を報ずる事業を作すに非ずや。要ず須らく精神を打辨して、垂手方便して一著を著くべく、須らく出身の機有りて人の眼を瞎することを免るべし。果に迷ひ因に謬らば卻つて利益にあらじ、此れ最も知識の要徑たり。

黃龍の老南大禪師嘗て語あり、「丈室に端居して本分の事を以て方來の人を接するは乃ち長老の職なり、其の餘の細事は之を知事に付す、辨せざる者なし。」誠なるかな然も人を用ひるの際、必ず須らく愼んで委任を擇ぶべし、事を敗せざらしめて始めて得ん。大潙の㋚眞如の云く、「住山は巧なること無し、只だ善く人を用ひることを貴ぶ、之を思へ之を思へ。」該語に云く、「伎倆㋛帳樣に如かず、只だ百丈の大智の規繩を創めて立てしが如くんば、千古它底の撲てども破れず、今時但だ謹んで遵ひ守りて、自己先に率ゐて他の雅範に達せずんば、則ち衆人從ひ去らざること有るなし。」

最後稍子を折倒して死生を透脫せしめんには、須らく千聖羅籠すれども住まらず、命根を截斷する底の一著あることを知りて始めて得べし。古德大有道にして能く擒縱し、善く殺活して大解脫を得る

㋙焦尾。(一)人逸士に及第し獸宴を展くを云ふ。(二)虎化して龍となる時、必ず雷起りて其尾を燒く、故に焦尾と云ふ。
㋚眞如。翠巖眞の法嗣、大潙靈祐眞如禪師。
㋛帳樣。榜樣と一樣の意思。
㋜兒。野半なり。

知識、之を用ひずと云ふこと無し。之を知ることの難きにあらず、行事に見、當機瞥脱斷得行方に始めて久遠の得力なり。

楊岐祖師、金剛圈栗棘蓬を倡起して、用て龍蛇を辨じ、虎㊁兕を擒ふ。若し本色是れ他家裏の人は等閑に拈出すれば、便ち衲子の舌頭を坐斷す。

法濟禪師に示す（泗州に住する普照勝長老）

釋迦文、多子塔前に㊀半座を分ち已に密に此の印を授く。その後拈花は第二重の公案なり、金襴を付するに至りて、雞足山中に彌勒を竢つ、是れ多少の節文なり。達磨迢々として西竺より梁に游び、魏を歷て少林に冷坐して、深雪の中箇の斷臂の老子有り、覷破することを解す、免れず漏泄して伊に分付することを、之を單傳密記と謂ふ。子細に之を推すれば一場の敗闕なり、此れより便ち喧しく西來の旨意を傳ふ。世間流に隨つて錯を將て錯に就く、滿地流行して、五家七宗に分れ、遞に門戸を立し提唱す。實に就き之を窮むれば端的何邊の事をか成し得たる。是の故に從上の達人は這般の茶飯を喫せず、且く如何して卻つて是れ誰當ならん。將に知る㊂六合の外に眼を著け得て、早自ら別なることを。況んや無邊香水海浮幢王刹の表に下し視る底、乃ち落著の實處を知ること少し。所以に道く、「此れ大丈夫の事なり。」撲㊃迭掀豁步驟作略、唯だ同風契證して、始めて善く弘荷せん、終に沙を㊄搬し土を搬せず。遂に釋迦金色碧眼神光と共に、一坐具地等閑に手を垂れて、人を殺し人を活す、初より窠臼なし。只だ㊅緊峭萬苦千辛、至嶮至毒下得斷命手、卻然して後に虛しく印授せざるを貴ぶ。白雲師公云く、「神仙の秘訣父子不傳」と。

㊀分半座。は會元一を見よ
㊂六合。上下四方なり。
㊃迭。怪奇なり。

㊆杲書記に示す（杭州徑山に住する）

臨濟の正宗、馬師黃檗より大機を闡き、大用を發し、籠羅を脫し窠臼を出づ。虎驟り龍馳せ、星飛び電激す、卷舒擒縱皆本分に據る。綿々的々風穴興化に到り、唱愈々高く機愈々峻なり。㊇西河師子を弄し霜華金剛王を奮ふ。深く闃奧に入り、親しく印記を授くるに非ずんば、端倪を知ることを莫し。徒に自名㊈邈して只だ戲論を益せん。大抵冲天の氣宇を負ひ格外に提持し、戰はざるに人兵を屈し、人を殺すに眼を眨せず、尙ほ未だ其の趣向に㊉髣髴たらず、況んや星を移し斗を換へ天輪を轉じ地軸を廻すをや。是の故に三玄三要、四料簡、四賓主、金剛王寶劍、踞地師子、一喝一喝の用を作さず。探竿影草一喝賓主を分つ、照用一時に行ずと許多の絡索を示す、多少の學家擡量注解す。殊に知らず我が王庫中是くの如き刀なし、弄し將ち出し來るに及んで、看る底は只だ是れ眼を眨す。須らく是れ他の上流にして契證驗認すべし、正按旁提本分の種草に還す、豈に梯蝶を假らん。只だ㊋

㊆杲書記。圜悟の法嗣、徑山大慧宗杲禪師。
㊇西河師子。汾陽錄の要語に委しくあり。
㊈邈。貌に作るべし、容姿也。
㊉髣髴。見て審かならざる貌。
㊋實際開堂。傳燈錄三聖章に出でたり。

寶壽開堂の如くんば、三聖一僧を推し出す、壽便ち打つ。聖云く、「儞與麼に人の爲にせば、但だ這の僧を瞎卻するのみに非ず、鎭州一城の人の眼を瞎卻し去ること在らん。」壽拄杖を擲下して便ち方丈に歸る。㋐興化同參の來るを見て便ち喝す。僧亦喝す、化又喝す、僧復た喝す、化云く、「儞這の瞎漢を看よ、直に法堂を打出す。」侍僧問ふ、「這の僧何の相觸悞するところ有る」と。化云く、「是れ他也た權有り實有り、我れ手を將つて伊が面前に向つて橫兩遭するに卻つて會せず、此の瞎漢に似らば打せずして更に何れの時をか待たん。看よ他の本色宗風迥然として超絕す。作略を貴ばず、只だ他の眼を正さんことを羨ふ、正宗を扶荷し、宗眼を提持せんことを要せば、須らく是れ透頂透底、徹骨徹髓廉纖に涉らず、迥然として獨脫すべし、然して後に的々相承して、以て此の大法幢を起て、此の大法炬を燃す可し、馬祖百丈首山楊岐に繼ぐとも叨竊と爲さざるのみ。」

報事㋖靜長老に示す

靈山單傳少室密付、卓々として類を絕し倫を離れ、風塵草動を喩せんことを要す。眼光㋗㋘淡々として㋙眚を透り去る、山を隔てゝ已に起倒を識る、聲を呑み迹を削りて毫末を留めず。而も能く逆水の波を鼓し、截流の機を運らし、門に上り戶に上り、人を咬むこと火より急なり。㋚俊鷹快鶻の影に

㋐興化。會元興化章に出でたり。
㋖靜長老。德山靜禪師。
㋗瞎。晶瑩の貌。
㋘眚。目病み翳生ず。
㋚俊鷹快鶻。北に在りては鷹となし、南に在りては鶻となす。
㋙揮。掠なり。

迷ひ、空を㋙揮り、背青霄を摩し、眼を瞎すれば便ち過ぎ、點著すれば便ち來り、挨著すれば便ち去るが如し、妨げず峭淨なることを。此の正宗を傳へて異世に標準たる所以なり。箇々須らく是れ人を殺すに眼を瞎せず、然る後に入作す。只だ黃檗老漢の「如くんば、生らにして此の段を知る、纔に天台に行腳せしに㋛羅漢の波を凌いで瀑流を絕るを見て、卽ち打殺せんと欲す。百丈に抵るに及んで、馬師の一喝に三日耳聾すと擧するを聞いて、乃ち身を退いて舌を吐く。知んぬ是れ大機の用なることを、豈に單見淺聞の擬議する所ならんや。其の後臨濟祖師を接するに、全體此を用て眉毛を惜まず、㋜克家の子を成就し、天下の人を覆蔭す。有志の士應に飽諳熟練して越格超宗せしむべし。然して後飢人の食を奪ひ、耕牛の牛を驅り、先規を紹繼して向背に迷はざる所以なり。細處は直に是れ涓滴も照透し、寬廣は時に千聖も亦他を尋ぬるに著ず、始めて是れ向上の種草なり。㋝祖峰老師常に云く、「釋迦彌勒猶ほ是れ他の奴」と、至竟して他は是れ阿誰ぞ、何ぞ容さん、此に向つて亂りに鍼錐を下すこと有ることを知りて、則ち些子に較ぶるをば除非す。大凡丈夫の氣槩を奮ふて上流を超軼せんと要せば、手を下して羅籠すとも得ず、呼喚すとも回らざらしむべし。利物應機灑々落々たるに非ざる莫し。草窠裏に向つて輒し、鬼窟裏に情魂を弄し、玄妙理性揚眉瞬目擧手動脚を將て合頭の語を下し、實法を以て人家の男女を繫綴せざれ。一盲衆盲を引くは何の方便をか成さん。

㋛羅漢。傳燈錄黃檗章に曰く、天台に遊んで一僧に逢ふ、舊の如く相識る云云。
㋜克家。易繫卦九二。
㋝祖峰老師。類聚又は無門關を見よ。

既已に位に據りて師と稱す、固に容易なるべからず、只だ自己分上滴水滴凍孤迥危峭にして、師子兒の遨遊するに意氣群を驚し、出沒縱橫卒に測度し難きに、驀然として踞地返擲すれば、百獸奔馳して膽を喪するが如し、豈に殊勝奇特に非ずや。還つて是れ與麼の人三千里外に已に端倪を審かにし了れり。是の故に巖頭の道く、「水上葫蘆子を按する が如くに相似たり。」等閑に蕩々地に拘牽惹絆すること得ず、觸著捺著すれば、則ち蓋天蓋地長養履踐、此の地に到るを得て、始めて靈山少室と一線路を分つて、黃檗、臨濟、巖頭、雪峰と互に賓主と爲る可し。風行草偃亦虛りに出頭せず、播揚すること三十二十年、他家に自ら同流の共に證明し、通人の相將護する有り、誰か言ふ ㊅「卞璧人の鑒る無し」と、我は道ふ、㊆「驪珠到處に晶かなり。」

開聖㊇隆長老に示す

開聖の堂頭隆老、政和中に湘西の道林に相從つて、㊈膠漆相投じ箭鋒相直る。是に由り深く之を器とす。既にして復た鐘阜に相聚る、大鑪韛の中に鉗鎚を禁得し了る。此の段の因緣日に近く日に親し。從上來乃佛乃祖越格超宗萬千人、羅籠すれども住まらざる處に向つて、毛頭針竅の間、廓徹虛通して、百千萬億無邊の香水刹海を包容す。拄杖列聖の命脈を點發し、吹毛

㊅卞璧。卞和璞を抱いて楚山に哭すること三日三夜、淚盡き、之に繼ぐに血を以てす、王之を聞き、饌玉人をして再び之を見せしめしに、初めて名玉たることを知れり、厲王之れに命じて曰く、和氏の璧といふ云云。

㊆驪珠。河上の翁、家貧にして其の子川に沒して川中に千金の珠を得たり、翁曰く、珠驪龍あり云云。

㊇隆長老。盧丘隆を見よ。

㊈膠漆。交際の親密なること。

及上路布を截斷し、㊉曲親木床に據りて人の與めに楔を拔き釘を抽き、黏を解し縛を去りて、大自在を得たり。仍た夷門に來り座を分ち、共に相扶立すること久し、況んや箇の一著臨濟の正法眼藏綿々として、慈明楊岐に到りて須らく風吹けども入らず、水灑げども著かざる底の劍利の漢、人を殺すに、眼を眨せざる氣槩を負ひて、高く正印を提ぐべし。祖を罵り佛を呵す、猶ほ是れ餘事なり、直に盡大地の人をして頂に通ずる底に透り、死生の窠窟を絕し、灑々落々として無爲無事、大達の場に到らしめば、乃ち種草と爲さん。

普賢㊋文長老に示す

佛祖心を以て心に傳ふ、蓋し彼彼穎悟透脫して兩鋩の相照すが如し。言象の拘る所に非ず、高く格量を超え、箭鋒相挂けて初より異緣なし。乃ち道妙を受け祖を嗣ぎ燈を繼ぐ、意路を絕し思惟を出で情識を脫して、蕩々然として寬通自在なる處に到る。人を擇んで付囑するに逗到せば、亦氣異にして羽毛頭角、體裁全く具らんことを要す。然る後家聲を墜せず、從上の爪牙を得て方に相應副す、數百年紹續愈々久しうして愈々光顯する所以なり。所謂源流深長なり、今則ち頗る㊌故步を失す、多く家風を擅にして窠窟を存し路布を作す、自ら既に徹を出でず、轉じて以て人の爲にすれば、則ち老鼠の牛角に入るが如し。漸々尖小なり、安んぞ宏綱地に委せざるを得んや。

㊉曲親。剋木なり、親一本に象に作る。

㊋文長老。圜悟の嗣。禍福子文禪師。

㊌故步。ふるき步き方。

老漢昔初めて老師に見え、所得を吐呈す、皆眼裏耳裏機鋒語句の上、悉皆是れ佛法心性玄妙なり。只だ此の老子乾曝々の兩句を擧するを被る。云く、㋐「有句無句は藤の樹に倚るが如し。」初めは則ち擺撼して伎倆を用ひ、次いで則ち論を立して道理を說く、後は乃ち至らずと云ふ所なし。拈出すれば悉皆約下せらる、遂に覺えず泣下る。然して終に能く入得すること莫し、再四㋑懇提するのみ。乃ち垂示して云く、「儞但だ儞が見解計較を作すことを盡して、一時に蕩盡せんことを待つて自然に省みん。」後に隨つて云く、「我早く儞の爲に說き了れり、去れ、去れ。」衣單下に向つて體究するに了に縫罅なし。因つて入室、口に信せて胡道す、乃ち責めて云く、「儞胡道して何かせん。」卽ち心に眞の明眼の人我が胸中の事を透見するに服す。然して竟に未だ入得せず、尋いで山を下る。二載を越えて回る、始めて小玉と呼ぶも、元無事と云ふ處に於て桶底子を脫す。纔に始めて前時示す所眞の藥石なることを覷見す。是より迷昧にして透ること得ず、將に知んぬ眞實語當の處、良遂が諸人知る處、良遂總に知る、良遂知る處、諸人知らずと道ふが如し。誠なる哉是の言や。

雪峰、德山に問ふ、「從上宗乘中の事、學人還つて分有りや也た無しや。」德山杖を以て之を擊つて云く、「儞道へ什麼。」峰云く、「我れ德山に在りて、棒下千重萬重の貼肉の汗衫を脫卻するに似たり。」臨濟黃檗に三擊せられて大愚に到り、「有過か無過か」と問ふ、愚云く、「黃檗與麼に老婆、儞更に來りて

㋐有句無句。類聚十九を見よ。
㋑懇提。懇苦提撕的意思。

過を覓むる在り。」濟猛省して覺えず云く、「元來黃檗の佛法多子なし。」にと。此の二老皆叢林傑出の者なり、並に棒下に於て發明す、後來大いに此の宗を振ふて世の梯航たり、學者宜しく同らして之を思ふべし、豈に是れ麁淺ならんや。而も近世謂へること有り、杖を以て人を接するは、皆機境に墮す、直に須らく心性を究了し、玄妙を談極して時中に向つて綿々密々として、針あり線ありて方に可なるべし。細に入るに只だ一大藏敎㋺五敎㋩三宗の如き、微を析ち隱を發く、剖露して眞實際に至りて佛地理性に徹す、豈に細と爲さざらんや、何ぞ祖師西來を假らん。將に知るべし、法流既に久しうして多く異見を生ず、眞傳を得ず、乃ち醍醐を將て毒藥と作す、豈に德山雪峯黃檗臨濟の咎ならんや。諺に曰く、「索短うして深泉に到らず」と。

㋺五敎。一、小乘。二、大乘始敎。三、大乘終敎。四、一乘頓敎。五、一乘圓敎。
㋩三宗。今の三宗、禪、講、瑜伽、古の三宗、禪、敎、律。
㋥魯祖。馬祖嗣、祖山寶雲禪師。
㋭石霜。馬祖嗣、石霜慧藏禪師。
㋬無業。馬祖嗣、汾州無業禪師。

㋮魯祖、僧を見て只だ面壁す、南泉云く、「我れ有時向つて道ふ、直に須らく父母未生已前に向つて究取すべしと、尙ほ一個半個を得ず、他恁麼に驢年にして去らん。」二老躅を並べ眉を齊しうす。是れ有ることを知らざるにあらず、何に因つて卻つて恁麼地に說話し、還つて魯祖節文の處に究到するや。若し究到せば則ち南泉を見ること水を水に入るゝが如し。若し此を諳せずんば、乃ち魯祖を分疎し、南泉を僻執す。圓轉して他の語脈路布に隨はば、卒に模索不著なること在らん。

㋐石鞏弓を彎き箭を發ち、祕魔杈を擎げ人を驗す、俱胝只だ一指を豎つ。㋑無業唯だ言ふ莫妄想、禾山打鼓、雪峰輥毬、趙州喫茶、玄沙蹉過、佛法豈に如許あらんや。若し一一に方便を作して合頭の語を下さば、論劫千生也た未だ夢にだも見ざること在らん。若し眞實に曹溪の正路を蹋著せば、則ち坐ながら成敗を觀ん。這の一隊の漏逗を覿見せん。

子文監寺此の軸を留むること今數年なり、近ごろ退院稍や閑なり、因つて爲に此のあらゆる蓋天蓋地聖賢を絕出する一著子を出す。公は久參なり、自ら良遂が之を知るが如し。建炎三年閏八月十一日雲居東堂にして書す。

鼎州德山靜長老に示す

長老道林に相從ふてより、宿昔大緣有りて上頭の關を撥轉して、一語に便ち契ふ、圓照して遺すこと無し。從上來皆是の大機大用を以てせざる莫し。龍象の蹴蹋、驢の墻ふる所に非ず、若し此の手段を具せずんば、云何んか人の與めに黏を解き、縛を去り、釘を抽き、楔を拔かん、此れ本分の事なり。但だ只だ一向に操持して耕を驅り飢を奪ふ、廼ち活句なり。一切の語言、機要、事理、明暗、語默、擒縱、殺活、皆在り、下文に一揑を消せず、唯だ黃檗、臨濟、睦州、雲門、潙仰、雪峰、玄沙、尤も妙を得たり。山僧が室中曾て此の關に蹋著せざるには、斷定して放過せず、付授の際尤も牢實なるに在り。切に忌む依稀たることを、便ち骨董なり、寧ろ人の承當する無かる可けんや。有らば則ち須らく是れ箇の中の人にして始めて得べし。

潭州㊶智度覺長老に示す

至道は簡易にして淵奧なり、初め階梯を立せず、壁立萬仞、之を本分の草料と謂ふ。是の故に摩竭室を掩ふて正令を行じ、㋒毗耶詞を杜ぢて本宗を揭ぐるも、尙ほ作家の漢有りて未だ放過せず。何ぞ況んや妙に涉り玄を窮め、心と說き性と論じ、貼肉の汗衫子の黏著を被りて、脫㋓拆不下則ち轉た郎當を見るのみ。少室、曹溪、風穴迥かに殊なり、臨濟德山の作略、剔脫、龍馳せ虎驟り、地轉じ天旋る、妨げず人を慶快することを、了に泥水を施さず。從上來の大達大悟纔に極致の處に信徹すれば、卽ち快鷹俊鶻の風に㋔迷ひ日に曜いて背靑霄を摩し、直下に透脫して、二六時中をして纖毫の障隔なからしむ。八達七通卷舒擒縱して聖位にすら尙ほ居らず、豈に肯て凡流に處らんや。何次蕩然として今を該ね古を括る、㋕一莖草を拈じて丈六の金身と作し、丈六の金身を拈じて一莖草と作す。初より勝劣取舍なし。惟だ當機、活卓々地に在り、有時は人を奪ふて境を奪はず、有時は境を奪ふて人を奪はず、有時は人境俱に奪ひ、俱に奪はず、格を出で宗を超えて十成に蕭灑たり、豈に是れ只だ人を籠罩し、人を蓋覆移換走作することを貴ばんや。要す當に撲實頭にして依倚なく、無爲無事の大解脫各々本分の事を顯示すべし。所以に古人

㊶智度覺。智度寺なり、覺は僧名なり、智度寺に袁覺、祖覺、東山覺、天封覺の四人あり。
㋒毗耶。不二法門の意なり。
㋓拆。開くなり。
㋔迷風。飛揚極高の貌。
㋕一莖草。傳燈錄の十を見よ。

の風塵草動いて便ち先づ照了して、纔に毫芒を出せば、卽ち與めに剗斷するも尙ほ一半を得ず。豈に彼此草裏輥じて相牽き相拽いて機關語句の上に論量揀擇して、窠臼を作して人家の男女を埋沒す可けんや。㋐軒かに知んぬ、是れ眼を開いて床に尿することを。他の明眼の人は終に箇般の路布を儆さず、大丈夫は意氣群を驚す、須らく正に臨濟の本宗を紹いで、一喝一棒一機一境、當陽に剿絕することを鬪るべし。豈に道ふことを見ずや、吹毛用ひ了りて急に還つて磨すと。

蜀・中　鷲峰長老に示す

多子塔前會て半座を分ち、葱嶺西畔㋑隻履獨り攜ふ。臨濟㋒瞎驢を以て惠然に命じ、㋓夾嶠は青山に因つて洛浦に委す。源分れ脈別ると雖も、一脈曹溪より出で、大器利根を擇んで蹤を掃ひ、跡を滅せしめんことを要す。是の故に從上來龍馳せ虎驟り、斗を換ひ星を移し、閃電の中に㋔殺訛を別ち、石火の裏に皁白を分つ。菁底を論せず、惟だ俊流を務む。肘後の符を懸け、頂門の眼を廓かにし、綱宗を立起し正令を單提す。源深からざれば則ち流長からず、功積まざれば則ち用妙ならず。是を以て西河師子を弄す、超宗越格を要す。而して楊岐、栗棘蓬を呑ましむ。㋕奔流度刄を取る、既に箇の選佛場に入り向上の關捩子を闡く、應に須らく一滴の水一滴の凍、硬く鐵脊梁を著けて此の大任を荷擔すべし。己躬の下諦實なれば人の爲にする處偏なし、纔に世緣に落つれば便ち漏逗に涉る。祖

㋐軒。明かなり。
㋑隻履。委しくは傳燈錄十二を見よ。
㋒瞎驢。同上の注を見よ。
㋓夾嶠。同十六を見よ。
㋔殺訛。謬なり。
㋕奔流度刄。喂を貶すれば便ち疎過すの義。

峰老師㋖横に點頭し、白雲祖翁㋗渾圓棗を呑んで常に警策と爲す。深に臨み薄を履むが如くにして、便ち以て百尺竿頭に向つて進むこと千百步し、懸崖上に跳ること萬億遭すべし。廼ち眞の皮可漏、方に撲不破なることを驗す。蓋し大雄的々の種草なり、之を愼め。

㋘顯上人に示す（蘇州眞山寺嚴に住す）

見處通透すれば用處明白なり、旋機電卷き㋙結角羅紋、槃錯縱横なるに當りて、自能回轉して凝滯なし。亦見を立せず、亦機を存せず、滔々地風行けば草偃す。蓋し根腳悟入の時、淵源に徹して、修證して回互無きことを得たり。會も尙ほ不可得なり、豈に況んや不會をや。二六時中只だかくのごとく繫なく絆なし、初より能所我入を存せず、何ぞ佛法あらんや。此れ無心無爲無事の境界なり、豈に世間の聰明、利智、辯慧、多聞、無根本の人の能く測量せんや。達磨西來豈に此の法を將ち得來らんや、他惟だ各々當人本有の性を直指して、出徹明淨にして如許の惡知惡覺忘想計較の染汚する所を爲らざらしむ。參は須らく實參なるべし、眞正の道師を得て草窠裏に引入れられず、直截に契證して貼肉の汗衫を脫卻して、胷次をして虛豁にして一毫の凡情聖量なからしめ、亦外に向つて馳求せず、湛然として眞實なり。千聖も能く排遣することを莫し、一片淨倮々の田地を得、空劫那邊に透出すれば、㋚威音王猶ほ是れ兒孫なり、何ぞ況

㋖横點頭。肯て許可せず。
㋗渾圓棗。浸潤味。
㋘顯上人。圜悟下、有寶華顯禪師。
㋙結角羅紋。花嚴法界觀頌に出でたり、曰く、羅紋結角の中、執か主人を辨ぜん云云。
㋚威音王。過去莊嚴劫に於ける最初の佛を威音王佛といふ。

んや更に他より覓めんや。祖有りて以來作家の漢是くの如くならざる莫し。且た六祖の如くんば新州の一りの薪を鬻ぎし人なり、目字を㊃體らず、㋐大滿に相見するに逗至して、一面に襟を披いて著々透脫す。則ち聖賢迹を混ずと雖も、方便を以て此の段の賢愚を隔てず、皆己が本有なることを顯示せんことを要す。今既に跡を禪流に厠ふ、日を逐ふて冥心體究す、此の大緣人より得ざることを知りて、只だ猛利にして擔荷增進するに在り、日に損し日に益し、精金の百煉千煆するが如し、出塵の要、利生の本なり。尤も須らく七穿八穴にして、無滯安穩にして大機大用を得る處に到るべし。此の工夫正に密作用の中に在り、只だ日に萬緣交參紅塵擾攘として、順違得失擬然として羅列するに、中に於て出沒他の所轉を被らず、能く他を轉ず。活潑々地にして水灑げども著けず、乃ち是れ自己の力量なり。靜嘿虛凝なるに至りて亦兩種に非ず。乃至奇言、妙句、險機、絕境も亦只だ一槩に之を平しくす。了に得失なし、皆我が用たり。此くの似く磨琢すること久しければ生死の際脫然たり。世間の閑名破利を視るに、風に過ぐる游塵夢幻空華の如きのみ。儵然として世を度る、豈に出塵の大阿羅漢に非ずや。

㊃骨剉和尙、一生問有れば只だ「骨剉也」を以て之に酬ゆ。鐵彈子の如し、妨げず緊峭なることを。若し能く體究せば眞の祖師門下の師子兒なり。

㊃體。分るなり。
㋐大滿。唐の代宗、五祖に謁して大滿禪師と曰ふ。
㊃骨剉。羅漢院宋微禪師、黃檗の嗣なり。
㋕本淨。傳燈錄忠國師の章にあり。

忠國師㋕本淨禪師に問ふ、「汝一切の奇言妙句を見る時如何。」淨の云く、「一念も心に愛すること無し。」國師の云く、「是れ汝が屋裏の事なり」と。參學此に到らば乃ち是れ淨潔乾曝々地にして、人の瞞を受けざる者なり。只だ山僧恁麼に道ふも、本分の草料を與ふべし。

諫長老に示す（蜀中無爲山に住す）

趙州の云く、「我れ南方に在る三十年、粥飯の二時、是れ雜用心の處に除く」と。將に知んぬ古德此れ箇の事の爲にすることを將て等閑と作さず、直に是れ鄭重なり、所以に操修覿徹、徹底分明なるに至る。一機一境一句一言に於て、悉く虛に落ちず、是の故に世法佛法一片に打成す。今時湊泊して著實ならんことを要せば、須らく是れ猛利に奮發して、腸を倒し肛を換へて、惡智惡見を取ること莫れ、㋔雜毒を食することを莫れ、一味純正眞淨妙明にして、直下に本地の風光を蹋著し、安穩大解脫の地に到りぬれば、㋒報化佛頭を坐斷して、嘍々として孤危なり。風吹けども入らず、水灑げども著かず、正體現成なり。日用に力量有り、聞聲見色取舍を生せず、著々出身の路有り。豈に見ずや、僧㋝九峰に問ふ、「見說ならく和尙親しく延壽に見ゆること、是なりや否や。」峰云く、「山前麥熟するや、也た未だしや。」渠が親切に近處を識得せば、便ち衲僧巴鼻を見ん。所謂殺人刀活人劍なり、但だ請ふ、長時自ら眼を著けて看よ、出格の時に到りて自然に落處を知らん。

㋔雜毒。取相分別。
㋒報化。臨濟錄に出でたり。
㋝九峰。七延壽嗣の法嗣、歸宗道詮禪師。

㋐元禪客に示す（成都府の廣孝に住す）

趙州の道く、「佛の一字吾れ聞くことを喜ばず。」且く道へ、他甚としてか此くの如くなる、是れ佛は一切智人たれども、渠聞くを喜ばざる莫らんや。軒かに知んぬ是れ這箇の道理にあらざることを。既に此くの如くならずんば、何を以て之を聞くことを喜ばざる。若し是れ明眼の人ならば、聊か聞いて便ち落處を知らん。請問ふ、「何の處にか落在する、試に吐露せよ、看ん。」魯祖、僧の來るを見て便ち面壁す、是れ人の爲にするか、人の爲にせざるか、節文何れの處にか在る。若し他の與めに機を投せんことを要せば、何の趣向を作してか卽ち得ん。

百丈大智、上堂說法の竟る毎に復た大衆を召す、衆首を回らす、丈の云く、「是れ何ぞ。」藥山自ら云く、「百丈下堂の句且く道へ、用て何人をか接する、如何んか領覽せん。」

杲禪人に示す（杭州徑山に住す）

杲禪子根性猛利にして、㋑笈を海上に負ふ、徧く宗匠を訪ひて、知を舊相㋒無盡公に受く、深く之を器重す。俊邁の氣を負ひて肯て㋓碌々として小にして了らず、誠を標して相從ふ。一言機を投じて向來の㋔羈鞅を頓脫す、未だ底を倒して領略せずと雖も、要は是れ㋕昂藏人の抑勒を受けざる快漢なり。其の自る所を原ぬれば、蓋し㋖傳公殿撰の渠が本因を發するに由る。遂に㋗嚴凝を冒して甃く咸平に之く。來りて行を告ぐ、且た法話を乞ふ、子因つて之に示す。衲子は當に痛く死生を以て事務と爲す、知見解礙を消して佛祖の傳付する大因緣を徹證す。名聞を好むこと勿れ、步を退け實に就いて行解道德充實なることを竢ちて、愈々潛遁して愈々匿る可からず。諸聖天龍將に人を推し出さんとするのみ、況んや歲月を以て淹練琢磨するをや。鐘の扣くに在る如く、谷の聲に應ずる如く、精金の萬煆の鑪冶を出づるが如きを待ちて、萬世易へず、萬年一念向上の巴鼻掌握の中に在り、草偃し風行く、豈に㋘綽々然として餘裕有るにあらずや。仍つて此の紙を持して傳翁に似す、相與に證と作さしむべし。履踐は長久して變せざるを貴ぶをや。

㋐元禪客。徹庵、道元、護國景元、等なり。
㋑負笈。負は背馱也、笈は書籍なり。
㋒無盡公。張商英、字天覺、無盡居士と號す。
㋓碌々。凡庸なり。
㋔羈鞅。絡頭なり。
㋕昂藏。軒昂の貌。
㋖傳公。張無盡なり。
㋗嚴凝。凝氷の堅なり。

蘊初監寺に示す（蘇州明因に住す）

只だ儞が與めに一句子を說くと道ふも、早く是れ惡水を著て人に潑ぐ、何に況んや更に目を瞬し、眉を揚げ床を敲き拂を豎て、是れ何ぞと云ひ、喝を下し棒を行ずるをや。軒かに知んぬ是れ平地上の骨堆なることを。更に好惡を識らざる底有りて、佛と問ひ、法と問ひ、禪と問ひ、道と問ひ、相爲さんことを請ひ、相接せんことを乞ひ、向上向下佛法の智見語句の道理を求む。是れ乃ち泥裏に土を洗ひ、土裏に泥を洗ふ、幾時か脫灑なることを得去らん。有般の底は與麼に道ふことを聞いて、便ち計較を作して云く、「我れ會せり。」と。佛法は本來無事なり、人人具足せずと云ふこと無し。終日喫飯著衣何

㋘綽々。寬意なり。

ぞ曾て闕少し來らんと云ふて、便ち無事平常界裏に向つて打住す。殊に知らず豈に恁麼の事有り來らんや。故に知んぬ、須らく是れ本分の其の中の人にして、方に從上宗乘の本分を諳すべし。若し實に悟入の處有らば、起倒を識り進退を知り、休咎を別ち滲漏を離れて、日に近く日に親しうして、轉た更に ㋟ 豹變して窟宅を守らず、圈圍を跳出して天下の老漢の舌頭を疑はん。一に生鐵鑄就すに正に好し、力を著けて修行供養するに。然る後以て無盡燈を燃し、無間の道を行じて身を舍て命を舍てゝ群生を ㋠ 撈摭して、他各々樊籠を出し、執縛を去けて、佛病祖病俱に瘥し、解脱の深坑已に出でゝ、箇の無爲無事快活の道人と爲り去らしむ可し。然して自ら既に得度して、須らく行願を廢せず、一切を度せんと思ひ、忍苦 ㋡ 捍勞して ㋢ 薩婆若海に向つて、舟と爲り航と爲り、始めて少分の相應有るべし。愼んで ㋣ 骨羸錐の露柱燈籠と做して、淨潔の毬子を打すること勿れ。是の故に古德人を勉めて、箇の一條の路を行いて不報の恩を報ずるに堪へんことを須む。如今諸方多く靈利の衲子有りて、直に透りて徹することを得んと要す、有る底は、探頭太だ過ぎて會し易からんことを要す。纔に些の趣向を知れば、便ち出頭せんことを欲す、又是れ一等の蹉過なり。推せども出でざるもの有り、亦未だ圓通せず。時節因緣を知りて機會を失はざるは乃ち通方の士なり。

㋟ 豹變。易の辭なり、君子豹變にして其の文蔚なり。
㋠ 撈摭。水中に於て取るを云ふ。
㋡ 捍。抵なり。
㋢ 薩婆若海。一切智と譯す、諸の佛果上の智慧、海は廣大なる義を現はすなり。
㋣ 骨羸錐。骨立瘦なり。

一書記に示す（四明雪竇に住す）

英靈の衲子 ㋤ 卓犖たる奇姿を蘊んで、㋥ 慷慨して ㋦ 冠を嚴る、身世、浮名を視ること、游塵、浮雲、谷響の如し。宿昔の大根器を以て、此の段有るを知る。生を超え死を出で、聖を絕し凡に越ゆ、乃ち三世如來所證の金剛の正體、歷代祖師單傳の妙心なり。㋧ 跂步蹴蹋、香象 ㋨ 金翅と作りて、億千萬類の上に馳驟飛騰して、流を截り霄を摩せんことを要す。豈に肯て鴻鵠燕雀と爲つて高低勝負に局促として、目前の電光石火の間に較べて、利害に轉ぜられんや。是の故に古の大達細故を記さず、淺近を圖らず、志を發して便ち高く佛祖を超えて、一切の承當すること能はざる所の重任を荷擔して、普く ㋩ 四生九類を津濟して、苦を拔き安を與へ、障道の愚昧を破り、無明顚狂の毒箭を折り、法眼見刺を拈出して、本地の風光をして澄霽し、空劫已前の面目をして明顯ならしめんと欲す。心を悉し力を竭して寒暑を憚らず、意を刻し行を尙んで、三條椽の下に向つて心猿を死卻し、意馬を殺卻して、直に枯木朽株の如くに相似らしめて穿透せば、豈に他に從ひ得んや。覆藏を發ひて暗室の明燈を燃し、津要に艅航せんと擬す。大解脱を證し一念を起さずして、頓に正覺を成じて、且く箇の入理の門を通ず。然して後に ㋪ 普光明場に升りて、無漏、淸淨殊勝、

㋤ 卓犖。超絕なり。
㋥ 慷慨。慨恩なり。
㋦ 冠。脫冠出家の義なり。
㋧ 跂步。緩步なり。
㋨ 金翅。妙翅鳥とも稱す、生龍なとりて食ふと云ふ、鳥類の王なり。
㋩ 四生九類。四生は胎、卵、濕、化。九類は四生及有色、無色、有想、無想、非有想、非無想也。
㋪ 普光明場。華嚴九會の內第二會道場なり。

偉特、法空の座に踞して、口海瀾翻へり、㊁無礙の四辯才を奮ふ。一機を立て一句を垂れ、一勝相を現じて、普く凡聖有情無情をして俱に威光を仰ぎ、㊄庇庥を受けしむるも、尙ほ未だ是れ功勳を絕する處にあらず。更に那頭を轉ずること、千聖羅籠するとも住らず、萬靈景仰に門無く、諸天、花を捧ぐるに路無し。㊅魔外那ぞ能く旁らに覷ん。知見を放卻し、玄妙を卸卻し、作用を颺卻して、惟だ飢餐渴飲のみ、初より有心、無心、得念、失念を知らず、何に況んや更に從前の學解、玄妙、理性㊆分劑の名相㊇桎梏の知見、佛見、法見、動地、掀天の世智辯聰を戀着して、自纏自縛せん。海に入りて沙を算ふ、何の靠る所有らんや。等しく是れ大丈夫、應に務めて勝に敵し、群を驚して自己の本志願を滿つべし。乃ち本分の大心大見大解脫、無爲無事の眞の道人と爲すなり。

㊁四無礙。一義無礙、二法無礙、三辭無礙、四樂說無礙。
㊄庇庥。庇陰なり。
㊅分劑。限量なり。
㊇桎梏。桎は足械、梏は手械。
㊈政和。宋の徽宗の年號。
㊉戮。學なり。

一書記の法語に跋す

予㊈政和の末に瑯邪に抵りて一師に會す、故舊の如し、其の道に志すことの群ならざることを喜す、因つて前偈を作す。詔に大梁に應ずるに及んで、遂に游び從ふことを得たり。日に此の段を以て杏扣することを益々勤む。數百衆の中に乃ち肯て㊉斃ひ力む。復た示すに後語を以てす。建炎元祀、將に東南に之かんとす、因つて重ねて書す。而して復た之に系くるに跋を以てす、他日再會の讖と爲す、

且く以て相分る。道人本分の相知、千萬里の外と雖も毫末を隔てず、而も古者多く此の時節に於て正令を行ず。趙州の云く、「有佛の處住することを得ず、無佛の處急に走過せよ。」石室曰く、「一向に去ること莫れ、已後卻つて我が邊に來れ。」と。洞山は萬里寸草なし。㊋大慈は老僧を帶取して去れ。㊌歸宗は時寒し途中善く爲せ。曹山は去るも亦不變異、悟本は飛猿嶺峻し。好く看よ、皆直截にして覆藏せず、唯だ百川の明宗することを務む。嘗陽に領略せば、則ち南州北縣何の處にか渠に逢はざらん。末後の慇懃未だ免れず、重ねて拈ずることを。一遍且た作麼生か是れ諦當の處、椰樑橫に擔ひて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。

宗覺禪人に示す

宗門は利根上智を接して生死を出で、知見を絕し、言說を離れ、聖凡を越ゆる道妙を提持せしむ、豈に淺識小見、理道機境解路の上に活計を作すものならんや。能く擬議する所、須らく龍の如く、虎に似て人を殺して、眼を眨せざる漢の瞥脫快利の力量を用て、聊か擧著するを聞いて剔起して便ち行はんことを要す。外は世間の縛著を棄て、內は聖凡の情量を捨てゝ直に得たり。孤迥々峭巍々絲毫を依倚せず、當陽に薦透し、全身擔荷することを。佛來るとも炫惑し動さず、況んや祖師宗匠の語句機峰をや。一刀に截斷して更に顧㊍藉せず、自餘の諸雜甚ぞ、㊎譬ひ閑の如し、方に上流を攀ぢて少分相應ずべし。見ずや永嘉纔に曹溪に跨づて、便

㊋大慈。大慈山寰中禪師、百丈に嗣ぐ。
㊌歸宗。廬山歸宗智常禪師。
㊍藉。資謝、借也。
㊎譬如閑。要緊ならずの意。

ち師子吼す。丹霞、馬師、選佛場を示すを聞いて、當下に決破す、二師の前に逗到して流に逆ふて投契す。亮坐主四十二本の經論言下に氷消す。德山紙燭を吹くに、便ち疏鈔を燒く。臨濟六十棒の後、乃ち翻擲す、並に皆透脫す。知らず曾て入室幾回かし、請益幾次かせし。近時學道の士、他工夫を用ひずとは道はず、多くは只だ是れ公案を記憶し、古今を論量し、言句を持擇し、葛藤を打し、路布を學す、幾時か休歇を得ん。斯くの如きは只だ一場の骨董を ㋐贏得す。源を推し本を窮むるに、蓋し上梢す。作家に遇はず、自己大丈夫の志氣を負はず、曾て歩を退いて己に就いて精神を打辦し、從前已後勝妙知見を放下し、直截獨脫して本分の大事因緣を領取せず。是の故に半前落後、不分不曉なり。若し只だ恁麼ならば縱ひ一生勤苦すとも、亦未だ夢にも見ざること在らん。是の故に昔人の云く、「菩提は言說を離る、從來得る人無し。」德山の道く、㋑「我が宗語句なし。亦一法の人に與ふる無し。」趙州の道く、「佛の一字吾れ聞くことを喜ばず」と。看よ他早く是れ土を掇し人を塗糊し了れり。若し更に棒頭に於て、玄を求め喝下に妙を覓め、眉を瞪り眼を努らし、手を擧げ足を動せば展轉して、野狐の窠窟に落ち去らん。此の宗は惟だ悟明到を貴ぶ、銀山鐵壁萬仞、孤峭擊石火閃電光、擬不擬、便ち坑に墮ち、穽に落つ、所以に從上箇の一著子を護惜して、同到同證す。儞が攝摸する處なし、既に能く心を辦じ、能く緣累を舍て、修行して知識に依る。若し更に耐心して、千難萬難湊泊す可からざる處に向つて身心を放下して、體究して徹底せしめずんば、誠に惜しむ可しとなす。只だ千生百劫より今に到るまでの如くんば、還つて間斷ありや也た無や。既に間斷無くんば、箇の何の生死去來をか疑はん。軒かに知んぬ緣に屬することを。本分の事に於て了に交涉なし。五祖老師常に說く、「我れ此に在る五十年、千千萬萬の禪和を見卻するに、禪床角頭に到りて、只だ是れ佛と做り、佛法を說くことを覓む。並に曾て箇の本分の衲子を見ず」と。誠なる哉、今時を看卻するに、只だ佛法を說く底も也た得難し、何に況んや更に本分の人を求めんをや。時節澆季にして聖を去ること愈々遠し、大唐國裏の胡種看々滅する也。或は一個半個を得たりとするも操持することを有らん、敢て已前の龍象に似ることを望まず、但だ履踐趣向を知りて、頭正しく尾正しからば、早く是れ火中に蓮を出すなり。切に宜しく諸緣を撥退して、便ち能く古來大達大悟の底蘊を識破すべし。處に隨つて休歇して密行を行せば、諸天花を捧ぐるに路なく、魔外行蹤を覓むとも見えず。是れ眞の出家自己を了徹するなり。如し福報因緣あらば、出で來りて一隻の手を垂るるとも亦分外とせじ。但だ肯心を辯せよ、必ず相賺さず、只だ老僧恁麼なるも也た是れ ㋒普州の人、賊を送る。

㋐贏。買餘利あるなり。
㋑我宗語。傳燈錄師章の語なり。

光禪人に示す

親切を得んと欲せば、第一に求むることを用ひざれ、一求めて之を得れば已に解會に落つ。況んや此

㋒普州人送賊。賊が賊を護送すと云ふ意、どちらもどちら、賊と賊との會合。

の大寶藏、古に亘り今に亘り、歷々虛明にして無始劫より來かた、自己の根本たり。擧動施爲全く他の力を承く。唯だ是れ休歇して一念不生の處に到りぬれば、則便ち透脫す。情塵に墮せず、意想に居らず、迥然として超絕しぬれば、則ち徧界藏さず、物々頭々渾て大用と成る、一一皆自己の胸襟より流出す。古人之を家財を運出すと謂ふ。一得、永得、受用、豈に窮極有らんや。但だ患ふ、體究の處、根脚牢からざれば、徹證すること能はず、直に須らく猛に諸緣を截ち、纖毫の依倚なく、放身捨命直下に承當して、第二個無からしむべし。縱使聖出で來るとも、亦移易せず、時に隨つて任運に喫飯著衣し、聖胎を長養して知解を存せず、是れ省要徑截殊勝の法門ならざる可けんや。

民禪人に示す

先聖一麻一麥、古德は苦を攻め淡を食ふ、志を此に潔うして寢を廢し餐を忘す。體究專確にして實證を求めんと要す、豈に所謂ⓑ四事豐饒なることを計る者ならんや。道の古に及ばざるに至るに及んで、便ち法輪未轉、食輪先轉の議あり、是れに由つて叢林、長老を呼んで粥飯頭と爲す、古と一倍返くに非ざることを得んや。然るに隨緣變異の門、且た第二段を行ず、北山に方來の道人を延接するに惟だ南畝を仰ぐ。今秋適々大ⓒ稔に會ふ、覺民禪客を請うて收刈を覩せしむ。行に臨んで言を乞ふ、因つて示すに前段の因緣を以てす。貴らくは本を崇び末に及ばんことを。乃ち彙利並び照す、圜悟通達の本分の事と爲す。勉めて之を行せば乃ち善し。

大凡そ道を學し玄を探さんには、須らく大信根を以て、深く此の事、言語文字一切の萬境の上に在らざることを信ずべし。確實に惟だ自己の根脚に於て、從前の知を作し解を作さん、狂妄の心を放下して直に絲毫も念に掛けざらしめ、本淨無垢寂滅圓妙本性の中に向つて、徹底承當せば、能所雙忘し、言思路絕して廓然として、明かに本來の面目を見、一得永得堅固にして動かざらしむ。然して後歩を換へ身を移し、言を出し氣を吐くに、並に陰魔境界に落ちず。則ち一切の佛法端坐して現前せん、遂に行坐皆禪なるに契ふ。生死の根本を脫去して、永く一切の蓋纏を離れ、箇の灑々たる無事の道人と成らん。何ぞ須ひん紙上に向つて他の死語を尋ぬることを。

ⓒ百草　頭上に祖師あり、夾山指出して人をして薦ましむ。ⓓ寬平田中大義あり、百丈手を展ぶ、人の知らんことを要す。若し能く顆粒圓成せば、卽ち是れ單傳心印なり。更に或は但然たらんことを彌望せば、第一聖諦を證せしむ。且た出草の一句作麼生か道はん、滿船明月を載せ將ち歸る。

才禪人に示す

俱胝、僧を見て問に答ふるに及んで、惟だ一指を竪つ。蓋し通上徹下契證して疑なし、病を瘥すに驢馱の藥を假らざる也。後人、來脈を諳んぜず、例に隨ひ箇の指頭を竪つ、漫りに皂白を分たず、大

ⓑ四事。一衣服、二飲食、三臥具、四醫藥。
ⓒ稔。穀熟するを稔と云ふ。

ⓒ百草。會元五を見よ。
ⓓ寬平。傳燈錄六を見よ。

いに醍醐を將て毒藥と作すに似たり、良に憐愍すべし。若し是れ眞的に見透する底は、始より鄭重なることを知りて、終に等閑なりと作さず、所謂千鈞の弩、鼷鼠の爲に機を發せず、是の故に須らく頂顙上の眼を具して、方に入作すべし。後來玄沙拈じて曰く、「俱胝承當の處、莽鹵なり、只だ一機一境を認得す、有般の拍盲底は語に隨つて解を作し、便ち俱胝を抑屈して以て實に然りと謂へり。殊に知らず、焦埇打著す、連底の凍なることを。直に須らく子細にすべし、切に忌む、㊀顙頂なることを。只だ俱胝化し去るに臨んで自ら言ふ、『我れ天龍一指頭の禪を得て、一生用ひ盡さず』と。豈に徒然ならんや。」

曹溪大鑑、微なりし時、乃ち新州に樵を鬻ぐ人なり、碌々たること數十年、一旦客の經を誦するを聞いて、其の㊁本願を發し、母を棄て鄉を出で、遠く黃梅に謁す。幾に見えて數々語る間に、機に投じて迹を碓坊に隱して八箇月、秀師と偶を呈するに暨んで、始めて鋒鋩を露す。黃梅尋いで衣盂を擧げて之に授く、是の時群衆趂逐す、競うて奪取せんと欲す。而して㊂蒙山先づ庾嶺に及んで之を擧ぐ、勝がらず方に悟る、力を以て爭ふ可きに非ざることを。稽首して發藥を乞ふ。大鑒示すに、不思善惡の處の本來面目を以てす。卽便ち歸を知る、時未だ至らざるを以て、復た四會の㊃獵人の中に遁るゝこと久し。然る後番禺に出でて、風幡心動の語を吐く、印宗、師の禮を伸ぶ。之が爲に落髮登具し、卽ち大法要を開き、二千衆を董す。聲九重に徹し、貴近に命じて紫泥を降さしむるに、確然として應せず。龍象數十人を度す、皆大宗師なり。何ぞ其れ㊄韙いなる哉。聖賢の世に應じ、存亡進退擧照して、遺すこと無しと雖も、然も步驟趣向徹より著に至り、之を攷ふるに世緣を斷せず、而も妙規を示す、百世の下、與に等を爲すもの無し。今に到りて寰海に徧するは皆其の子孫なり、每に洪範を仰ぐ、輙ち其の毫末を擬せんと欲するに、亦不可得なり。後進の力量ある者の、之を勉めんことを望まんと欲し、聊か㊅梗槩を述するのみ。

㊀顙頂。大きな面なり、人を馬鹿にすること。
㊁本願。一日薪を負ふて市中に至り、客の金剛經を讀むを聞き、感悟する處ありて、本願の心を生ず、昔ふは法の爲に師を尋ねるの意なり。
㊂蒙山。道明禪師なり。（傳燈四）
㊃獵人中。獵隊の中に一十五載を經たり。（六祖壇經）

現定の見聞覺知は是れ法なり、法、見聞覺知を離る、若し見聞覺知に著せば卽ち是れ見聞覺知にして達法に非ざる也。大凡そ達法の士は見聞覺知を超出して、見聞覺知を受用す、見聞覺知に住せず、直下に透脫すれば、渾て是れ本法なり。此の法有に非ず無に非ず、語に非ず默に非ず、而して能く有と現じ無と現じ、語と現じ默と現じ、長時亘然として不變不異なり。是の故に雲門云く、「說の時は便ち有り、不說の時は便ち無にして去り、思量の時は便ち有り、不思量の時は便ち無にして去る可からず。」と、直に須らく妙に此の法に達して大用を得せしめ、長時語默縱橫にして、悉く般若をして現前せしむべし。何ぞ必ずしも更に善知識の身邊に在るを親と爲し、田野の間に在りて作するを是れ疎なりと爲すと云ふことを論せんや。一往直に前んで自

㊄韙。美の意なり。
㊅梗槩。大略なり。

然に處に觸れ渠に逢ふべきなり。

乃佛乃祖、此の一端的の事を仰重す。群機の中に布在して、高低貴賤未だ嘗て向背あらず、百種千頭作爲天眞にして、㋐歷落㋑圓陀々地なり。若し特地に佛法玄妙の見を作さば則ち虧けん。儻し能く見を起さずんば、只麽に淨裸々として卻つて全く彰る。所以に道く、「林に入りて草を動さず、水に入りて波を動ざす」と。山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗、拄杖子を見ば、只だ喚んで拄杖子と作す、之を覿體と謂ふ。若し箇の裏に向つて、覿得透せば、朝より暮に至り、暮より朝に至り、絲毫の透漏なし。全く我が用たり、一一分外に非ず、渾て是れ本分の事なり。腳跟下未だ諦當を得ざるも、亦絲毫許りを移易せず、豈に端的現成の機要に非ずや。

㋐歷落。分明の義。
㋑圓陀々。圓々的意思。

直截の省要、只だ箇の現成公案を消す、浩々たる作爲晝より夜に及ぶまで、縱橫十字、喧靜語默、全體運用す。一時に覿破しぬれば、頭より與めに批判し將ち去る、快なること妨げず。

此の事若し言語の裏に在らば、則ち一句の語に合して、便ち殺定して更に移改せじ。云何ぞ千句萬句、終に窮竭すること無からん。將に知んぬ言語の裏に在らざることを。語句を假り、以て此の事を顯發せんことを要す。靈利の漢、當に須らく直に此の意を體すべし。超證して語句を透る底、活鰕々地にして、便ち能く一句を將て百千句と作して用ひ、百千句を將て一句と作して用ひしむ。更に何の

卽心卽佛、非心非佛、不是心、不是佛、亦不是物以至心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。東山、水上に行き、日午、三更を打す、後園の驢草を喫し、北斗裏に身を藏することを疑はん、一串に穿卻せん。嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何。」州云く、「放下著。」進んで云く、「某甲一物不將來、未審し、箇の何をか放下せしめん。」州云く、「看よ汝放不下。」と、言下に大悟す。後來㋒黃龍頌す。一物不將來、兩肩擔ひ起さず、明眼の人謾じ難し、言下忽ち非を知る。步を退くれば深坑に墮す。心中限なきの喜、貧の寶を得るが如し。毒惡既に忘壞して沒交涉、㋓蛇虎知己たり、異類等解寥々たり。千百年淸風猶ほ未だ已まず、放下著若し常情を以て之を論せば、他道ふ、「一物不將來」と。云何ぞ卻つて向つて放下著と道ふ、將に知んぬ法眼細微を照すことを。他の爲に大病を拈出して、他をして羞慚を知り去らしむ。他尙ほ覺らず、更に復た進んで問ふ、「再び與めに點過するに直に得たり、瓦解冰消することを。方に始めて底を倒して一時に脫去す、遂に猛虎を伏し、毒蛇に馴れしむるに至る、豈に內感じて外應ずるに非ずや。

㋒黃龍頌。明眼の人謾じ難し、退步すれば深坑に墮つ、貧の寶を得たるが如し、交涉を沒し異類を等解す。
㋓蛇虎。一蛇一虎左右に侍して年中食を與ふ。（傳燈十一）

龐居士渾家火に向る、居士慕に云く、「難々十石の油麻、樹上に攤く。」龐婆の云く、「易々百草頭上、祖師の意。」靈照云く、「也た難からず、也た易からず。飢來りて飯を喫し因し來りて睡る。」と、尋常人に擧向すれば、多くは是れ靈照が道、得て省力なることを愛し、龐翁龐婆の難と說き易と說くを嫌ふ。只

だ是れ語に隨つて解することを作す。殊に其の宗猷に本かず、所以に言迹の興り、異途の由りて生ずる所なり。若し能く言を忘れ、意を體せば、方に此の三人各一手を出し、共に箇の沒底の藍兒を提するを見ん。蝦を撈し蜆を摭し、著々人を殺すの機有り、處々出身の路有り。

璨上人に示す

達磨西來、文字語句を立せず、唯だ直に人心を指す。若し直指を論せば、只だ人人本有なり。殼子の裏に全體應現す、從上の諸聖と絲毫許をも移易せず。所謂天眞自性、本淨明妙にして、十虛を含吐し、根塵獨脫する一片の田地なり。惟だ念を離れ情を絕して、遐かに常格を超ゆる大根大智、本分の力量を以て、直下に自らの根腳下に就いて承當す。萬仞の懸崖に手を撒し、身を放ちて更に顧藉することと無きが如し。知見解礙をして底を倒して脫去せしむ、大死人の已に氣息を絕し、本地の上に至り、大休大歇して口鼻眼耳、初より相知らず、識見情想皆相到らざるに似たり。然る後、死火寒灰の上に向つて頭頭上に明かなり。枯木朽株の間、物々斯れ照す、乃ち孤逈々峭巍々に契合す。更に心を覺め佛を覺むることを須ひず、築著磕著、元外より得るに非ず。古來悟達百種千端只だ這れ便ち是なり、是の心必ずしも更に心を求めず、是れ佛何ぞ更に佛を覺むるに勞せん。儻し言句の上に於て路布を作し、境物の上に解會を生せば、則ち骨董袋中に墮在す。卒に撈摸不著ならん。此れ懷を忘れ照を絕する眞諦の境界なり。

㋐荒田揀ばず、手に信せて拈じ來る。㋑明々たり百草頭、明々たり祖師意、何に況んや㋒青々翠竹、鬱々黃花、㋓墻壁瓦礫、無情說法を以て、㋔水鳥樹林の苦空無我を演ぶるをや。是れ一實際に由依して無緣の慈を發し、寂滅大寶光に於て、無作勝妙の力を顯す。㋕長慶の云く、「道伴に撞著して、肩を交へて過ぐれば、一生參學の事畢れり。」

南塔の云く、「我れ片木葉を拈じて城に入れば、便ち是れ一坐仰山を移し去ると、故に香嚴の擊竹、靈雲の桃花を見、㋖資福の刹竿頭、㋗道吾の神杖子、㋘大仰の鍬を挿み、㋙地藏の田を種う、箇の金剛の正體を發揚するに非ずと云ふこと無し。當に人をして步を動せずして、大解脫の眞の善知識に參見せしむ。不言の化を行じ、無礙の辯を得て、則ち森羅萬象、百草頭頭に長時に徧參して、普く圓融法界に攝し、報化佛頭を坐斷して、坐臥行藏、徧行三昧を超證せしめずと云ふこと無し。何ぞ必ずしも㋚覺城東際、㋛樓閣門前、熊耳曹源、陞堂入室して、然して後に親近傳證とせんや。

㋜惠超、和尙に咨ふ、「如何なるか是れ佛法。」眼の云く、「汝は是れ惠超。」超乃ち省悟す、所謂爾より出づる者爾に反る者なり。唐朝の古德英禪師徵な

㋐荒田。本門北院の語。（頼業十九）

㋑明々百草。麗居士錄に出でたり。

㋒青々翠竹。道生法師の說なり曰く、「無情も亦佛性あり。」曰く、「青々翠竹、是れ眞如を盡す、鬱々たる黃花は般若にあらざることなし。」（事苑五）

㋓墻壁。忠國師の語なり、出處は涅槃經にして、曰く、「墻壁は無情の物なるが故に佛性と名く、云々。」

㋔水鳥樹林。觀無量壽經に曰く、其の摩尼の水流れて華間に注ぐ、樹の上下を尋ねれば、其聲微かなり、妙演の說、空無常無我諸波羅密の若し云々。

㋕長慶。會元七師章の語。

㋖資福。資福貞邃禪師は資福如實の嗣、衆に謂ふて曰く、「江を隔てて、資福の刹竿を見た

りし時、田を事とす、槌を運らして塊を擊つ、次で一の大なる土塊を見て、戲れに槌を以て猛に之を擊つ、時に應じて粉碎す、驀地に大悟す。此れより散誕として不測の人と爲る、頗る神異を彰す。老宿有りて拈じて云く、「山河大地、這の僧に一擊せられて百雜碎、㊃佛に獻ずるに香の多きを假らず。」と、誠なる哉是の言や。

璨上人に示す

㊄無住の本に依つて一切の法を立す、無住の本は無住に本づく。若し能く徹證すれば則ち萬法一如なり、其の分毫の住相を求むるに不可得なり、只今現定の作爲全く是れ無住なり。根本既に明かなれば、人の目有りて㊅日光の明に照すに、種々の色を見るが如し、豈に般若の關捩に非ずや。

永嘉の云く、「當處を離れず常に湛然たり、親切なること此の語に過ぎたる無し、覺むれば則ち知んぬ、君が見る可からざるを。但だ當處湛然二邊に於て、坐斷して平穩ならしめよ。切に忌む知解を作して求覺することを。纔に求むれば卽ち影を捕ふるが如し。」

㊆萬法と侶たらざる是れ何人ぞ、回光自照して看よ、汝が一口に、西江

㊃璨上人。僧璨。信心銘の著者。傳燈錄三、信心銘を見よ。
㊄無住。文殊師利菩薩。
㊅日光。金剛經第十四に出でたり。
㊆萬法。傳燈錄八、龐蘊章を見よ。
㊇西江。高亭簡禪師、初めて江を隔てて德山を見たる時の語なり。
㊈鳥窠。鳥窠禪師、字は道林、國一の嗣なり。
㊉投針。南本涅槃經二、純陀品に出でたり。

り、云々。」(傳燈十三)
㊆道吾。會元十一を往見せよ。
㊇大仰。傳燈錄十一師章を見よ。
㊈地藏田。會元八を見よ。
㊉覺城。文殊師利菩薩漸く南方に遊び、覺城に至る、東の方莊嚴憧娑羅林中大塔廟の處に住す云々。(華嚴入法界品三十四之二)
㊊樓閣。善財五十一、海岸國大莊嚴園に至る、廣大樓閣に至る、毘盧遮那莊嚴藏と名く、衆財、樓閣前に於て敬恭し頂禮す云々。(華嚴同上)
㊋惠超。淨惠法眼の嗣、傳燈錄廿五を見よ。
㊌獻佛。五鼎演海會錄上堂語。
㊍無住。文殊又問ふ、顚倒想執れか本と爲す、答ふ、無住を本と爲す。又問ふ、無住執れか本と爲す。答ふ、無住なれば則ち本無し、文殊師利無住本立一切法に從ふ云々。(維摩經六)
㊎日光。金剛經第十四に出でたり。
㊏萬法。傳燈錄八、龐蘊章を見よ。
㊐隔江。高亭簡禪師、初めて江を隔てて德山を見たる時の語なり。
㊑鳥窠。鳥窠禪師、字は道林、國一の嗣なり。
㊒投針。南本涅槃經二、純陀品に出でたり。

の水を吸盡せんを待つて、卽ち汝に向つて道はん、八角磨盤空裏に走る、參透得せば目前の萬法平沈し、無始の妄想蕩盡せん。

德山㊀江を隔てて扇を招く、便ち人の承當する有り。㊁鳥窠、布毛を吹けば、尋いで人の省悟するあり。此の段の大因緣、時至りて根苗自生するに非ざるを得んや。抑も機感相投ふ地有るか、抑も當人密運し、無間、師門の發揮を借るか、何ぞ峭絕すること此くの如く難くして、超證することこの如く易き。古人芥を輕じて㊂針を投ずるを以て況を爲す、良に虛しからず。

心を信得及し、性を見得徹すれば、日用の中に於て、絲毫の透漏無し、全く世法卽佛法、全く佛法卽世法、平等一如なり。豈に說の時は便ち有、不說の時は便ち無、思量の時は便ち有、不思量の時は便ち無なること有らんや。此くの如くんば、卽ち正に妄想情解の間に在り、何ぞ曾て徹證せん。直に心々念々照了して遺なきを得れば、世法佛法初より間斷せず、則ち自然に純熟して、左右原に逢ふ。問あれば問に隨つて便ち對へ、問なくんば亦湛然常寂なり、豈に著實に生死の要綱を透脫するに非ざらんや。末後の一句都て通穿し過ぎぬれば、有言、無言、向上、向下、權實、照用、卷舒、與奪、箇の勘破了也を消せず、誰か識る趙州の這の巴鼻、須らく是れ吾が家の種

草にして始めて得べきことを。

寧副寺に示す

古人此の大因緣の爲に、師弟子相見するに、未だ嘗て是れを以て擊揚せずんばあらざるが若し。食寢閑曠に至るまで念を此に攝せざるなし。是の故に一言一句、廼ち杖ち廼ち喝す、㊁瞬揚㊂舉動、悉く機に投ずべし。蓋し誠心專一にして、許多の惡知惡見の汚染なし、直截承當すること難からざるに似たり。今の兄弟根性差鈍にして復た㊃駁雜す、知識に參尋して薰炙日久しと雖も、尙ほ㊄猶豫を懷く、一往に徹識すること能はず、病純一長久ならざるに在り。儻し能く晝夜を捨てず、寢を廢し餐を忘じて、㊅矻々として道に在れば、古人に如かざることを患へず。

詳禪人に示す

志を立して道を辨ずるの士は、二六時中に於て自ら照し、自ら了して玆を念じ玆に在り、自己腳跟下の一段の大因緣、聖に處ても增さず、凡に居ても減せず、獨り根塵を脫して、迥かに物表に超ゆる有ることを知る。凡そ作爲する所、方所を立せず、湛寂凝然たり。惟だ萬變千化すれども、初より動搖せず、緣に應じて彰はる、事に遇ふて便ち發す、圓成せずと云ふことなし。惟だ虛靜にして一切超然ならんことを要す。主本既に明かなれば幽として燭さざること無し。萬年一念、一念萬年、頂に透り、

㊁瞬揚。瞬目揚眉なり。
㊂舉動。舉手動足。
㊃駁雜。不純一なり。
㊄猶豫。不決定。
㊅矻々。勤作なり。

底に透り、全機大用なり。譬へば壯士の臂を屈伸する頃に、他力を借らざるが如し。則ち生死の幻翳永く消して、金剛の正體獨り露る、一得永得、間斷有ること無し。古今の言敎、機緣、公案、問答、作用並に全く此を明かにす。若し脫灑に履踐して、日久しく歲深きことを得れば、自然に左右原に逢ひ、一片に打成す。豈に見ずや、法燈の道く、「荒田に入りて揀ばず、手に信せて草を拈じ來る、觸目未だ嘗て無にあらず、機に臨んで何ぞ道はざらん。根無うして活を得たり、地を離れて倒れず、日用尙ほ知らず、更に何の處に向つてか討ねん、切に宜しく㊀消息すべし。」

慧禪人に示す

㊁水潦、馬祖に參じて佛法的々の大意を問ふ、馬祖一蹋を與ふ、遂に大悟す。乃ち曰く、「百千法門無量妙義、只だ一毫頭上に向つて、根源を識得す、豈に快ならずや。」卽ち呵々大笑す。以至平生衆に示すに、長に云く、「一たび馬師の蹋を喫してより、直に如今に至りて笑未だ休せず。」又復た呵々大笑す。蓋し是れ誠を存すること堅確にして、正に入頭の處を覺むるに未だ得ず、驀然として蹋に遭ひて、便ち底に徹して承當擔荷し、透脫して疑なし。尋いで胸中の所證を吐き出す、亦復た別の事を以てせず。如今の參學若し果して諦實ならば、宗師一語一言一機一境を以て、之を投じて撥著せば、便ち轉せん、豈に難き事有らんや。但だ患ふらくは根浮び識淺うして、飄然として風の樹頭を過ぐるに似て、千回萬度提持すれども、亦未だ便ち契ふこと

㊀消息。進退を謂ふ。
㊁水潦。傳燈八、水老章に出でたり。

能はざることを。何に況んや更に情解を作す者は、指して是くの如くの悟入の事なしと爲ることを被るをや。馬師、水潦も亦只だ是くの如く一期の建立なりと。此くの如くんば則ち直に驢年に到るとも、未だ夢にも見ざること在らん。是の故に學道は唯だ諦信を尙ぶ、慧禪人操履甚だ專なり、聊か此を出して以て方便を示すのみ。

若し此の事を論せば、擊石火の如く、閃電光に似たり。明得、明不得、未だ免れず喪身失命することを。只だ明め得ざるが如くんば、喪身失命則ち固に是なり。明め得て何に因りてか喪身失命する、多少の人此に到りて疑著す、殊に知らず、及得盡して、方に命根斷ずる處に到りて、心肝五臟を換卻して、向上と齊等なることを。所以に道く、「直下に懸崖に手を撒するに似て、然る後乃ち生鐵鑄就すら、喚んで荊棘林を透出すと作す。天下の老漢の舌頭を疑はず、信に眞的參學の分あらん、」と。

若虛庵主修道者に示す　（尼）

學道の士、初より信向有りて、世の煩㊀溷を厭ふ、長く恐らくは箇の入路を得る能はざることを。既に師の指に逢ひ、或は自己に因つて、直下に從本已來、元自ら具足せる妙圓の眞心を發明して、境に觸れ緣に遇ふて自ら落著を知りて、便乃ち守住す。患ふらくは出得すること能はざるを。遂に窠臼を成じて、機境上に向つて照を立し、用を立し、咄を下し、拍を下す。眼を努らし眉を揚ぐ、一場の特地なり、更に本色の宗匠の、盡く與めに如許の知解を拈卻するに遇ふて、直下に本來無爲無事無心の境界に契證す。然る後養漸を識り、休歇を知り、一向に冥然たり。諸聖も尙ほ他の起處を覓むるに得ず、況んや其の餘をや。所以に巖頭の道く、「他の得る底の人は、只だ閑閑地を守る、二六時中無欲無依なり、是れ安樂の法門にあらざる可けんや。」

昔灌溪、末山に往く、山問ふ、「近離何の處ぞ。」溪云く、「路口。」山の云く、「何ぞ蓋卻せざる。」溪語なし。次の日問を致す、「如何なるか是れ末山の境。」山云く、「頂を露さず。」「如何なるか是れ山中の人。」云く、「男女等の相に非ず。」溪の云く、「何ぞ變じ去らざる。」山の云く、「是れ神にあらず、是れ鬼にあらず、箇の什麼をか變せん。」此くの如くんば豈に是れ腳し實地を蹋み、壁立萬仞の處に到るにあらずや。所以に道く、末後の一句、始めて牢關に到る、要津を把斷して凡聖を通せず、古人既に爾り、今人豈に少欠せんや、幸に金剛王寶劍有り、當に須らく知音に遇著して、以て拈出するに可なるべし。

㊀溷。濁なり。

良㊁蘆頭禪人に示す

金色頭陁、鷄足峰に論卻打坐す、達磨、少林面壁九年、曹溪、四會縣に看獵す、㊂大潙、深山庵を

㊁蘆頭。境內に蘆葦多きが故に主に名く、猶ほ紫頭、炭頭の如きなり。
㊂大潙。會元九に出でたり。
㊃大梅。傳燈錄七に出でたり。
㊄無業。禪師大悟の後、清涼の金閣寺に往き、重れて大藏經を閱覽す、八年を經過したり。
㊅古聖。本生經に出でたり。
㊆常啼。大論九十八に出でたり。
㊇長慶。二十年間七個の蒲團を坐破す、此の事を一日も明さず、饌を捲いて忽然として大悟す。（會元七）

卓すること十載、㋐大梅、一住人迹を絶す、㋑無業、大藏を閲す、㋒古聖、足を翹ぐること七晝夜、底沙を贊す、㋓常啼月を經て心肝を鬻ぐ、㋔長慶七個の蒲團を坐破す。是れ皆此の一段の大因緣の爲にす、其の志尙ぶべし、終古後昆の標準と作す。便ち身を致して、長連床上に在かしむるに、亦冥心體究するに過ぎず。但だ心念を澄靜ならしめ、紛紛擾擾の處、正に好し工夫を作すに。當に工夫を作す時に當りて、頂に透り底に透り、絲毫の遺漏なし。全體現成す、更に他處より起らず、惟だ此の一大機、阿轆々地に轉ず、更に何の世諦佛法とか說かん。一樣平持して日久しく歲深ければ、自然に脚跟下、實確々地、只だ是れ箇の良上座なり。直下に契證せば水の水に入るが如く、金の金を博ふるが如し。平等一如、湛然眞純なり、是れ活計を作すを解す。但だ一念不生にして、放ちて玲瓏ならしめよ、纔に是非彼我得失有りとも、他に隨つて去ること勿れ、乃ち是れ終日竟夜、親しく自家の眞の善知識に參ずるなり。何ぞ此の事の辨せざるを憂へん、切に須らく自ら看るべし。

許奉議に示す（庭圭）

此れ箇の事、利根上智の人に在りては、一聞千悟難しと爲さず、須らく脚跟牢實にして、諦當徹信ならんことを要す。把得定、作得主、一切違順の境界、差別因緣に於て、一片に打成し、大虛空の織毫の障隔なきが如し。湛々虛明にして、轉變有ること無し。百劫千生なりと雖も、始終如一にして方に平穩なるを得。多く聰俊明敏なるを見るに、根浮き脚淺うして便ち言句の上に向つて、轉變を認得して、卽ち世間に過ぎ尙る可きものなしと以へり。遂に見刺を增長し、能を逞しうし解を逞しうし、語言の快利を趂めて將て、佛法は只だ此くの如しと爲す。境界の緣生するに至るに及んで、透脫し行かず、因つて進退を成す、良に痛惜すべし。故に古人直に是れ千魔萬難、悉皆嘗遍す。七處割截すと雖も、亦念を動さず、一往心を操ること猶ほ鐵石の如し。以て生死を透脫するに至るまで、渾て力を費さず、豈に是れ大丈夫の情を超え、慷慨して存する所にあらずや。

在家の菩薩の出家の行を修すること、火中に蓮を出すが如し、名位權實意氣卒かに調伏し難し、火宅煩擾煎熬して百端千緒なるをや。自己直下に本眞妙圓にして、大寂定、休歇の場に到るをば除非す。尤も能く放下しぬれば、廓爾として平常なり。無心を徹證し、一切の法を觀ること夢の如く幻の如く、空豁々地にして時に隨ひ節に應じて、消遣し將ち去らば、卽ち㋐維摩詰、傳大士、㋑裴相國、㋒楊內翰の諸在家の勝士と其の正因を同じうし、自己の力量に隨つて、未悟を轉化して、同じく無爲無事法性海中に入り、則ち㋓南閻浮提に出で來りて、打一遭すとも㋔折本とせじ。

佛法多子なし、俱胝は一指を竪て、㋕打地は只だ地を打ち、鳥窠は布毛を吹き、無業は莫妄想、㋖

㋐維摩詰。藥には結摩詰と曰ひ、秦には淨名と云ふ、法身大師なり。（維摩經）
㋑裴相國。黃檗運の法嗣、裴休字は公美。
㋒楊內翰。麻谷寶徹の嗣、楊億、字は大年。
㋓南閻浮提。一に南贍部州と曰ふ、此れ大地の總名なり。
㋔折本。折了本錢、もとでをうしなふ也。
㋕打地。馬祖の嗣、凡そ學者問ひを致せば、惟だ棒を以て地を打ちて之に示す、時のひと打地和上と謂ふ。
㋖中邑。馬祖の法嗣、朗州中邑洪恩禪師。
㋗古堤。朗州古堤和尙。

中邑は喙々和々、㋐古堤は無佛性、骨剉は一生、只だ箇の骨剉と道ふが如し。只だ信得及するが爲に、所以に一生受用すとも盡きず。若し疑著すれば便ち異見差別有り、向上有り、向下有り、豈に能く坐得斷せんや、所以に久長を貴ぶ、乃ち人を得難きなり。

既に趣向得入の根腳洞明ならば、當に脫灑にして特立孤危、壁立萬仞ならしむべし。㋑佛病祖病去り、玄妙理性遣り、等閑に蕩々地、百不知百不會、一へに三家村裏の人の如くにして、初より殊異なし。養ひ來り養ひ去り、日久しく歲深ければ朴實頭大安穩にして方に安樂を得、終に背て自己を露出して聰明を作し、作略を顯はし、知見を衒耀して、口頭の禪を趂はず。所以に道く、㋒「十語九中、一嘿に如かず。」又道く、㋓「我れ千百人を見るに、只だ是れ作佛を覓むる底なり、中に於て一箇㋔無心の道人を求むるに得難し。」此の事最も行持を要す、行持に於て相に著せず、德に居らず、是を無相の眞修と名く。香象は河を渡るに流を截りて過ぐ、此くの如く行持滴水滴凍なるも、尙ほ胷中に留めず、何に況んや特地に心を起して、諸罪惡を作さんをや。既已に是くの如く保護せば、亦是くの如く轉じて、未悟を勸めて便ち此れ箇の上に於て、調直純信にして無爲無事ならしめば、豈に快ならざらんや。

㋑佛病。は雲門錄上の語なり。
㋒十語。慧力可昌禪師の語なり。
㋓我見千百人。趙州の語なり。
㋔無心道人。四十二章經の文なり。

諸知浴に示す

此れ箇の大法三世諸佛同證、歷代祖師共傳、一印に印定す。直指人心、見性成佛、不立文字、語句之を敎外別行單傳心印と謂ふ。若し言詮、路布に涉らば、階を立し梯を立す。格外格內を論量せば、則ち本宗を失卻し、先聖に辜負す。須らく最初の入作、便ち本分の人に遇ふて、直に根源を截り、步を退いて己に就き、鐵石の心を以て、從前の妄想、見解、世智、辯聰、彼我、得失を將て、底を倒して一時に放卻して、直下に枯木死灰の如くならしむるを要す。情盡き見除き、淨裸々、赤灑々の處に到り、豁然として契證せば、從上の諸聖と一絲毫許をも移易せず。諦かに信得及し明かに見得徹せば、此に始めて入理の門と爲す、更に須らく一念萬年、萬年一念、二六時中純一無雜ならしむべし。纔に纖塵の起滅あらば、則ち㋖二十五有に落ち、出離の期なし。㋗抵死㋘護生咬んで斷えしめよ、然る後田地穩密なり。聖凡位の中に收攝するに得ず、始めて是れ鳥の籠を出づる如く、自休自了の處なり。得坐、披衣、眞金百煉、擧動施爲、等閑蕩々地なり。根塵生死境、智玄妙、湯の雪に沃ぐが如し、遂に自ら時を知る、更に分外底なし、名けて無心の道人と爲す。此を以て修證し、轉じて未悟を開き、是くの如く履踐せしめよ、豈に要道とせざらんや。

古人此の一段の因緣の爲にすること、豈に止だ餐を忘じ、寢を廢するのみならんや。頭目髓腦を捨

㋖二十五有。有は因果不忘の義、所作の業因によりて必ず其の結果を感得すといふ意なり、二十五有は衆生の業因の結果たる生死輪廻の世界を二十五種に分類したる名稱なり。
㋗抵死。苦死と一樣なり、死力を盡すの意思なり。
㋘護生。護字俗語上、擊が護(メツタ)に高いの護なり、生字套上作麼生の生なり。

て、臂を斷じ眷を負ふに至る。動すれば是れ三二十年、只だ巖頭、雪峰㊀欽山の如くんば、同じく叢林に歷涉すと雖も、各一務を執りて勤を効す。九度、洞山、三たび投子に到る、凡そ至る所、處として未だ嘗て放過せず、一宵一㋐霎必ず遞に相擧較し、互に相切瑳す。遂は㋐新豐に契ひ、豁存、旨を德嶠に領ず。其の㋑跂步體裁を觀る、謂つ可し法門の龍象と。後學の人、以て其の陳躅を仰ぐ可し、虛しく光陰を棄てしむること無し。昔賢を㋒忝しむること有らんのみ。

昔天台の㋓韶國師、少にして俊才を負ふて叢林に游ぶ、到る所機を投じて已に師席を領ず。最後に金陵清涼の大法眼禪師の會下に抵り、已に咨參に倦む。唯だ隨侍の者を勉進して、衣を籌室に㋔搨めしむ。一日衆僧の參に隨ふ。問有り、「如何なるか是れ曹源一滴水。」答へて云く、「是れ曹源一滴水。」師之を聞いて前の證解、渙として冰の釋くるが如く、方に大安穩を得たりと爲す。是に知りぬ、學解は人に因つて領する所なるを。一言一句一機一境、只だ多聞に益す、究竟至實の處に到りては、須らく是れ桶底子脫して始めて得べし。此の事斷定して言句の中に在らず、若し執著記憶して、以て己が見とせば、畫餅の如し、豈に飢に充つべけんや。然も大達の士、超證諦實なり、機に投ずるに至るに及んで、語句の間に於て迴に塗轍を出づ。機境、筌蹄、他を籠羅すとも住らず。只だ㋕石頭、藥山に問ふが如くんば、「儞此に在りて何をか作す。」對へて云く、「一物も爲さず。」頭云く、「此くの如くならば、則ち閑坐也。」對へて云く、「閑坐ならば則ち爲す也。」石頭又問ふ、「子道ふ、爲さずと、箇の何をか爲さざる。」對へて云く、「千聖も亦識らず。」と。石頭乃ち頷を以て贊して云く、「從來共に住して名を知らず、任運相將て只麽に行く、古自り上賢猶ほ識らず、造次の凡流豈に明む可けん。」此くの似くならば、豈に是れ徹證底の人の語話にあらずや、機量言句、何ぞ曾て他を拘束し得んや。若し㋖理地明ならざれば、胷次に物有り、問著すれば、氈上に猫兒を拽くが如し。是の故に祖師道く、「㋗心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なり、流に隨つて性を認得すれば、喜も無く亦憂も無し。」

叢林の兄弟參問、最初に的に正因有り、善知識の邊に於て自ら生死事大、己事未明を陳ぶ、此の所言を推するに、豈に是れ汎々として名の爲め位の爲め、我能我勝の爲めならんや。若し始終一貫にして常に此の心を持せば、己事明めざるを憂へず、更に親近すること稍久しきに及んで、自己分上に未だ毫末相應の處有らず。便ち如之若何。彼の見解の長短を論量し、我見を增長して箇の出頭の處を覓めて、他時一辨の香敢て和尙に辜負せず。殊に知らず元初の正因を失卻して、卻つて魔界に墮在し去ることを。㋘古人の道く、「設ひ眷屬莊嚴、求めざるに自ら至ること有るも、既

㊀欽山。价洞山の法嗣、欽山文邃禪師。
㋐霎。片時也。
㋐新豐。新豐山に於て學徒を接誘す。（傳燈錄洞山章）
㋑跂。音奇、凡て足あるものの跂行と云ふ。
㋒忝。音珈、辱也、累なり。
㋓韶國師。韶國字は德韶、處州の人、年廿五にして出家す。（傳燈錄廿五）
㋔搨。は提なり。
㋕石頭。傳燈錄十四藥山章に出でたり。

㋖理地。實際なり。
㋗心萬境。傳燈錄二に出でたり。
㋘古人道。無業國師上堂の語なり。（傳燈廿八）
㋙踢破草鞋。做し得て用頭浸きなり。

に是れ一等に ㊐ 草鞋を蹋破す。宜しく應に初心を了卻して、生死を脫透することを期すべし。」と。最も至要と爲す、時人を待たず、各宜しく勉力すべし。

㊐ 印禪人に示す

道の悟達に由る、志を立つるを先と爲す。㉔ 博地具縛の凡夫より跂步超證、直に聖域に入らんことを欲す、豈に小因緣ならんや。固に宜しく鐵石の心を操りて、生死の流を截り、本來の正性を承當すべし。纖塵も中外に法有ることを見ず、胷次を洞然として、了に罣礙無からしめ、施爲作用、悉く根本中より出づ。一得して根本既に牢實なれば、能く一切の物を轉ず、是を金剛の正體と謂ふ。永得豈に外に求むることを假らんや。是の故に、古德云く、「此の宗は其の妙を得難し、切に須らく子細に用心すべし。可の中頓に正因を悟りぬれば、便ち是れ出塵の階漸なり、」と。

古德、江を隔てゝ扇を招き布毛を吹く、便ち發機の處有り、驀口に墊し、劈脊棒するに至りて、亦桶底子脫するを解す。蓋し專一なることの久しきに緣りて、一旦瞥地なり、豈に外より之を得んや、皆自證自悟に由るをや。

大梅、馬師に諮りて箇の卽心卽佛を受け、便ち深く閫奧に入つて、自ら去りて住山す。後に非心非佛の語を聞いて便ち云く、「這の老漢、人家の男女を鼓弄す、何の了期か有らん。儞は但だ非心非佛、我は只だ卽心卽佛也」と。豈に是れ逆水の波有りて、馬師の漏逗を覷破せしにあらずや。

藥山、衆に示して云く、「我に一句子有り、犢牛の兒を生まんを待ちて、卽ち儞に向つて道はん、當時若し放過せずんば、但だ伊に向つて道はん、㊀ 和坐子敗缺と。」

信侍者に示す

學道の要は ㊁ 根を深くし、蔕を固うするに在り、二六時中に於て自己の根腳を照了し、當に大いに起念すべし。百懷に干らざる時、圓融無際にして、脫體虛凝なり。一切所爲曾て疑間なし、之を現成本分の事と謂ふ。纔に一毫頭の見解を起すに至るに及んで、承當して主宰と作さんと欲すれば、便ち陰界の裏に落在す。見聞覺知、得失是非に籠 ㊂ 罩せられて半醉半醒にして ㊃ 打疊し辨せず、的實にして論せば、但だ闞閃々の中に於て管帶し得て行じて、一事なきが如くに相似て、頂に透り底に透りて、直下に圓成す。了に形相なく工用を費さず、作爲語默起倒を妨げず、終に是れ別人にあらず。稍や纖毫の滯礙あることを覺すれば、悉く是れ妄想なり。直に灑々落々として太虛空の如く、明鏡の臺に當るが如く、㊄ 杲日の天に ㊅ 麗けるが如からしめ、一動一靜、一去一來、外より得ず、放ちて自由自在にして法縛を被らず、法脫を求めず、始めを盡し終りを盡し、打成一片ならしむ。何の處

㊐ 印禪人。續傳燈廿八に出でゝり。
㉔ 博地。博は廣多也、下凡の地廣多なるが故なり。（三大部補注十一）

㊀ 和坐子。和は盞し禪和子の和なり、坐子は就ち上坐子の坐子なり、座に通ず。
㊁ 深根。老子五十九章の語なり。
㊂ 罩。鳥を覆ふて能く飛ばざらしむるを云ふなり。
㊃ 打疊。打摺と一樣なり。
㊄ 杲。日出づるなり。
㊅ 麗。附着なり。

にか佛法を離れて外に別に世法有り、世法を離れて外に別に佛法有らんや。是の故に祖師、直に人心を指す。金剛般若は人の相を離るるを貴ぶ、譬へば壯士の臂を屈伸する頃に、他力を借らざるが如し。此くの如く省要好く長時に自ら歩を退き、體究して箇の落著諦實證悟の地有らしめば、卽ち是れ念々徧く無邊無量の大善知識に參ずるなり。切々に諦信して勉力めて工夫を作さば、乃ち善か之善なり。

祖印沙彌に示す

永嘉の道く、「當處を離れず、常に湛然として覓むれば卽ち知る、君が見る可らざることを、只だ當處湛然二邊に於て坐斷して平穩ならしむ。切に忌む、知解を作して求覓することを。纔に求むれば卽ち影を捕ふるが如きなり。

馬祖云く、「卽心卽佛。」又云く、「非心非佛。」又云く、「不是心、不是佛、不是物。」東寺云く、「心不是佛、智不是道、劍去つて久し、爾方に舟を刻む。」若し各語に隨つて去る、豈に定論有らんや。若し言を忘じて契證せば、更に百千億の句を宣演すと雖も、亦一實に過ぎず、且た什麼か是れ實處。大梅の云ふが如くんば、儞は但だ非心非佛、我は則ち卽心卽佛なり、豈に實ならずや。徹底して信得及せんことを要せば、須らく是れ親證親見して、自然に人の謾を受けざるべし。

民知庫に示す

民禪は錦官大慈の傳法の昭律師の法孫なり。纔に ⑭ 披削して卽ち家業を習ひ、 ⑮ 四分毗尼を學す、

既にして布巾を ⑯ 搨りて法を離れ、自淨せんことを欲す。乃ち錫を肩にして南に游んで、西來の宗旨を訪ふ。夾山に抵りて因に相從ふ、道林に住すること久し。老僧蔣山を領せしとき、參扣すること愈愈堅確なり。其れ領略に於て、能く自ら知解を擺撥して、全機直に透ることを要す。緣に應じて酬唱する每に、一往直截して頗る蘊藉有り、喜ぶ可しと爲す。然も此の根器を以て更に勤を効し、志を息めて極深の處深なく、極妙の處妙なきに到りて、大休歇大安穩なり。纖塵を動せず、只だ閑々地を守りて、聖凡能く測ることなし。萬德 ⑰ 將來せずして、然る後以て鉢袋子を分付すべし。

巖頭云く、「物を卻くを上と爲し、物を逐ふを下と爲す。萬境萬緣、以至古今の言敎機に臨んで應變す。若し自己の根腳虛靜にして圓明寂照なれば、凡來我を干せども、能く金剛王寶劍を以て鋒に當つて斬斷す。則ち凜然たる神威あり、一切を坐斷すれば、卻くることを待たずして自ら退く、豈に綽々然として餘裕有らざらんや。儻し本を立すること明かならざれば、稍や遲疑に涉りて、則ち牽引せられて ⑱ 酌然として分疏不下なり、豈に他の所轉に隨ふことを免れんや。既に他に隨ひ去らば卒に自由の分なし、至道簡易なり、唯だ卻くと逐ふと善く道を體する者、宜しく深く之を思ふべし。

古人此の一段の事の爲に、直に全身を捨て、雪に立ち、春を負ひ、心肝を賣り、兩臂を然し、 ⑲ 猛

⑭ 披削。裂裟を披着し、髮を削去す。
⑮ 四分毗尼。一比丘法、二比丘尼法、三受戒法、四滅諍法也。
⑯ 搨。爪剌なり。
⑰ 將。請なり。
⑱ 酌然。酌當に灼に作るべし、灼は明なり。

火聚に投じ、七處割截せられ、㋐虎を飼ひ、鴿を救ひ、頭を捨て、目を施し、百種千端なることを得たり。蓋し艱苦せざれば則ち深く到らず、有志の士固に宜しく古を以て儀を爲して、㋑顏を晞ひ㋒蘭を慕ふなり。

圓湛虛凝は道の體なり、展縮殺活は妙用なり、善く及を遊ばしめて能く操守すれば、珠の盤に走るが如く、盤の珠に走るが如し、頃刻も虛に落つること無し。亦世法佛法を分たず、直下に一片なり。所謂觸處渠に逢ふ、出沒縱橫、初より外物なし。淨倮々、阿轆々、本分の事を以て印定す、頭々上に明かに、物々上に了す。何處にか更に得失是非、好惡長短有り來らん。但だ恐らくは自己の正眼未だ洞明なることを得ず、是れ二邊に落在するを致す。則ち沒交涉なり。豈に見ずや、永嘉道く、「上士は一決して一切了す、中下は多聞にして多く信せず。」

佛祖の言敎は筌罤のみ、之を藉りて以て入理の門と爲す。既に廓然として明悟して承當得すれば、則ち正體の上に一切圓具す。佛祖の言敎を觀るに、皆影響邊の事なり。終に頂顙上に向つて戴卻せず。近世參學多くは宗猷に本かず、唯だ言句を持擇して親疎を論じ、得失を辨じて浮漚の上に實解を作す、更に善く多少の公案を㋓淘汰し得、諸方五家宗派の語を問ふことを

㋐猛火。花嚴經の文なり。
㋑飼虎。金光明最勝王經十に出でたり。
㋒晞顏。揚子法言に、晞顏の徒也と、注に晞は慕なり。
㋓蘭。司馬相如、字長卿、少時大子と名づく、旣に學んで、藺相如を慕ふ、人と爲つて改めて相如と名く。（前漢書五十七）
㋔淘汰。善眞のものをとり立て不眞のものを取り去るなり。

解するに誇りて、一向に情識に沒溺し、正體を迷卻す、良に憐愍す可し。眞正の宗師有りて眉毛を惜まず、勸めて如上の惡知惡見を離卻せしむ。卻返之を心行を以て移換擺撼煅煉すと謂ふ。展轉して荊棘林の中に入る。所謂打底に作家に遇はざれば、老に到るまで只だ骨董と成る。省要の處一箭を消せず、皮下に血有るものは落處を知らん。苟し或は躊躇せば、則ち鼻頭を失卻せんなり。

七佛已前も便ち與麼なり、直に須らく硬糾々として頭皮を緊著して、分明に歷落して、這の一片の田地を薦取して穩密なるべし。長時乃ち自ら步を退くを會して、終に我れ見處有り、我れ妙解有りと道はざれ。何故ぞ、箇の中若し一絲毫の能所の見刺を立すれば、則ち重きこと山嶽に過ぎたり。從上來決して相許さじ、是の故に釋迦文、然燈佛に、無法を以て授記を得、盧老黃梅に本來無物を以て親しく衣鉢を付す、生死の際に至りて纔に自ら擔荷すれば、則ち㋕靈龜尾を曳くが如し。應に須らく淨穢の二邊、都て依怙せざるべし。有心無心、有見無見、紅爐に一點の雪を著するに似たり。二六時中頂に透り底に透り、灑々落々として、此の千聖途を同じうせざる處に遊び、直下に純熟せしめば、自然に箇の絕學無爲、千人萬人羅籠すとも住らざる底の、眞實の人を成就し得ん。

趙州和尙、僧を見て喚んで云く、「近前來。」僧近前す。州云く、「去れ多少の省力あり、若し薦得せば、乃ち是れ十成ならん。若し如之若何を作せば、則ち知見生ずるなり。」

㋕靈龜尾を曳く。步々跡を生ずるの意。

古人大慈悲を具して、人の當面に自ら承當せざるを見て、方便撥正して箇の入路を通ずる有り。古堤の僧の來るを見て便ち云く、「退後退後、汝佛性無し」と云ふが如くんば、後來只だ箇の仰山のみ有りて、能く渠が端的を知る。如今拈じて學者に問ふ、十箇に五雙有りて茫然たり。伊が句下に向つて死し了るが爲めに、所以に瞥地の分なし、若し活處に據らば、如何んか吐露せん。切に忌む他の語句に隨ふことを。

靈雲、頌を桃花を悟るに作る、玄沙渠を未徹と言ふ。老婆臺山の路を指す、趙州歸り來りて勘破と說く。叢林の中種々の論量を作す、只だ鬧を贏ち得たり。殊に知らず、古人門を敲く瓦子の如くに相似たり、只だ貴ぶ、門に入り得ることを。既に門に入得し了れば、安ぞ瓦子を執卻して、奇特の事と作す可けん。諦當直截に顯露すと謂ふ、何の處にか落在する。還つて委悉するや、毫釐も差有れば、天地懸隔す。

荒田に入りて揀ばず、手に信せて草を拈じ來る、其れ亦能く人を殺し、亦能く人を活すことを奈せん。苟し或は眼を著け得て、正しく手を下し得て親しからば、則ち一莖草も丈六の金身と作さしむ可し、況んや其の他の變化をや。根本既に明めぬれば、日用の中に於て田を鋤き、土を㋝墾き、春種忽秋收む。㋞夾山老子と親しく唱酬し、地藏阿師と展演して、同一梵行なるに非ざる無し。踐履純熟、

㋝墾。力を以て土を反すなり。
㋞夾山。夾山に囑して曰く、向に去れ、城隍棗落に住することなかれ、但だ深山裡に向つて饅頭の邊を覓め、一個半個の接續を取りて斷絕せしむることなかれ。（會元五）

高く㋟毗盧に據りて、此の正法を傳ふ、豈に妙ならずや。

自聞居士の出京を送る

何の處にか蹋著し來る、若し是れ、舟を移して水勢を諳じ、棹を擧げて波瀾を別たば、何ぞ消せん。死に抵るまで叮嚀なることを、自ら一揮して便ち了す可し。所以に風馳せ電閃く、擬議すれば則ち千里萬里に去る。只だ俊流を接して懵底を管せず、是の故に鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る、格外の玄機知識を尋ねんが爲なり。既に此の宗に達すれば、一切の世出世間を觀るに、曾て移易せず。一一頂に透り底に透りて、便ち放身捨命を解す。萬別千差の境界に於て恬然として動せず、縱ひ㋠風刀に遇ふとも、恒に坦々、たとひ毒藥も也た閑々、儻し蹉跎長養せずんば、安んぞ能く日月を揭げて、大通大明にして自在に出沒せん。此の地、從來向背なし、直に須らく上頭の關を撥轉すべし。

湧道者に示す　（尼）

古人此の大法の爲に、軀を捐て命を捨て、無邊無量の辛勤を歷て、奧旨を洞明するに至るに及んで、鄭重すること至寶の如く、保護すること眼睛の如し。造次動轉、輕觸せしめず、纔に一毫の勝解知見を起さば、卽ち雲の靑天を翳し、塵の鏡面を昏すが若し。故に趙州の道く、「我れ南方に在る三十年、粥飯の二時是れ雜用心の處と除く。」曹山、人に指す、此の事を保任すること、蠱毒の鄉を經るが如く、

㋟毗盧。徧一切處と譯す。
㋠風刀。鋒刀に作る、證道歌の語なり。

水も也た他の一滴に沾ふを得ずして始めて得ん。心を忘じ照を絶するを以て、如々實際に到りぬれば、心に於て無事なり。㋐心に於て無事なれば、平澹無爲にして、超然として獨運す。自ら既に腳し實地を蹋まば、方に人の爲に黏縛を解去す。一切の人を度し盡すとも、實に人の度す可き無し。直に須らく最後の句を用取すべし、物々頭々出身の地有らんなり。

實上人に示す

古人此の大事を念じて、深山幽谷村落の間に處すと雖も、未だ嘗て斯須くも違背せず。境に遇ひ緣に逢ふて、若しくは色若しくは聲、動作施爲自己分上に就かしめ、回轉せざる無し。從上來透徹の士の、履踐する所と二なく別なし。所以に根本牢强なれば境界の風に隨つて轉せず、靜然として安閑なり。聖凡の情量に落ちず、直下に大休大歇、得坐披衣す。今汝既に鄉井に還る、能く昔人の如く覷捕して、間然すること無からしめば、鐘山の方丈搥拂の下、以至三條の椽下、七尺單の前と何を以て異たんや。若し稍や違背して、間斷有るに及ばゞ、沒交涉の處に打入せん。岐に臨んで切に斯の言を記せよ、異時前程逆め料る可からず。

㋐無事於心。德山上堂云く、汝但だ心に於て無事なれば、則ち虛にして靈寂にして妙。(傳燈十五)

樞禪人に示す

玄學の士、見性悟理、佛の階梯を踐むこと、是れ家常茶飯なり。須らく知るべし、佛祖頂顱上に、骨を換ふる妙致有ることを。方に越格超宗、向上の人の擧揚を作して、德山・臨濟をして作用を施す無からしむ可し。平時只だ閑々地を守り、初より伎倆を立せず、三家村裏の人に似て頑然として癡兀なり。直に得たり、諸天花を捧ぐるに路なく、魔外潛に覷ふとも見えず、漠然として毫芒圭角を露さず、萬億の寶貨に深く藏し、牢く鎖すが如し。土面灰頭㋒傭保と雜作す。口亦言はず、心亦念せず、一世の人測ること莫し、而して神意泰然たり、豈に有道無爲無作、眞の無事の人に非ずや。

解語舌に干るに非ず、能言詞に在らず、明かに知んぬ、古人舌頭の語言、是れ依伏の處にあらざることを。則ち古人の半句一言、其の意唯だ人の直下に、本來の大事の因緣を契證せんことを要す。所以に修多羅の敎は月を標する指の如く、祖師の言句は是れ門を敲くの瓦子なり。是般の事を知らば、便ち休せよ、行履の處綿密なれば、受用の處寬通す。日久しく歲深うして移易せず。拈弄收放、熟することを得つれば、小小の境界悉く能く照破割斷して、朕迹を留めず。死生の際に至るに及んで結角羅紋、相參雜せず、湛然として動せず、翛然として出離す。此れ㋓臘月三十日涅槃堂裏の禪なり。

㋒傭保。南方奴婢の賤稱なり。
㋓臘月三十日。往々百年の壽盡くるを以て喚んで臘月三十日と作す、地黑く天昏く、胡餅亂撞正に此の時なり。

實禪老に示す

威音已前は師無うして自悟す、一往超證して千聖と途を同じうす。放得行、把得住、作得主、渾圓、

成現して煆煉を須ひず、而も自ら純熟す、威音已後に至るに及んで自ら超卓の處有り。直下に承當して無疑の地に到ると雖も、須らく師に依つて決擇し、印可せられて法器を成せ使めんことを要す。爾らずんば必ず魔孽有りて正因を壞破せん。是の故に祖有りて以來、資授けられ師傳ふ。最も師法を貴ぶ、何に況んや此れ箇の事、世智、辯聰の了ずる所に非ず、見聞覺知の拘はる所に非ず、苟し勇猛大丈夫の志氣を操りて、能く眞正の善友知識を擇ばずんば、生死の流を截ち無明の殼を破らんや。㊐孜々として參扣すること久しく專一なれば、時節緣稔つて驀地に桶底子脫し、廓然として省悟す。然る後誠を投じて決擇證據するに、自然に水を下る船の如く、篙棹を勞せず、乃ち針芥相投ずと爲す。既に旨を得るの後、綿々として相續し、管帶して間斷なからしめ、聖胎を長養す。縱ひ境界の惡緣に逢ふとも、能く正知見定力を以て融攝して、一片と成らしめば、則ち生死の大變も自己の胷次を動ずるに足らず、養ひ得て歲深ければ、箇の無爲無事大解脫の人と成らん、豈に是れ能事已に辨じ行腳事畢るにあらずや。

㊐孜々。勤勉の貌。

瑛上人に示す

此の事は當人の快利なるに在り、既に承當擔荷して、自己の根脚有るを知らば、尤も宜しく卓々として特立獨行すべし。須らく情を絕し照を離れて、廓然として空寂ならしめ、一法の得べき無うして諸緣を截斷して、灑々落々として大安穩の地に到りて、綿密にして滲漏無からしむべし。所謂壁立萬仞峭巍々地なり。然る後卻つて回り來りて、世に涉り物に應ずるに、初より我相なし、豈に聲色順逆魔佛の境界有らんや。最も難きは是れ等閑にして作意せざる處なり。驀地に牽轉せられて便ち漏逗す、應に須らく相續管帶して走作勿からしむべし。久しうして一片に打成せば、乃ち歇場と爲す、更に須らく向上の行履を會取して始めて得べし。古德の云く、「得坐披衣向後自ら看ん」と。

泉上人に示す

參問は見性悟理を要す、直下に情を忘じ照を絕すれば、胷襟蕩然として癡の如く兀に似たり。得失を較べず、勝劣を爭はず、凡そ順逆有らば悉皆截斷して相續せざらしめば、悠久にして自然に無爲無事の處に到らん。纔に毫髮も無事ならんことを要すること有れば、早や是れ事生ずるなり。一波纔に動いて衆波隨ふ、豈に了期有らんや。佗時死生到來せんに、腳忙じ手亂れんこと、只だ脫灑ならざるが爲なり。但だ此を以て確實と爲せば、自然に鬧市の裏に亦靜かなること水の如し、豈に己事辨ぜざることを憂へんや。

纔に是非有れば紛然として心を失す、只だ這の一句、多少の人を驚動して、計較を作さしむ。若し當頭に坐斷せば、威音王那邊に透出せん。若し此の語に隨つて轉せば、特地に紛然たらん。應に自ら回光返照して始めて得べし。

如來禪、祖師禪、豈に兩種有らんや。未だ免れず、㊖嫌含して各皁白を分ちて、特地に㊗乖張す

㊖嫌含。不決なり。
㊗乖張。乖戾的意思。

ることを。事理機鋒一時に坐斷して、是れ淨潔の毬子を打す、還つて著實諦當の處を知るや、放下して看取せよ。

思禪人に示す

一切の萬法皆自己と違無く背無し、直下に透脫して一片と成る、無始より以來、只だ恁麼なり。但だ恐る當人自ら相違背して、强ひて取捨を生す、無事に事を生す、所以に快活ならず。若し能く外攀緣を絕し、內己見を忘すれば、物に卽して是れ我なり、我に卽して是れ物なり、物我一如にして洞然として無際なれば、則ち二六時中四威儀の內、一一皆壁立萬仞なり、何の處にか如許の㋺勞攘有り來らん。每に久參を見るに、神を凝し照を澄しむることと既に多時なり。然も箇の入處有りと雖も、驀地に便ち一機一境を認めて、硬く把住して撥剔を受けず、此れ正に大病なり。須らく銷融放下して、自ら大休歇の處を得んことを要して始めて得ん。

㋺攘・擾なり。

傑上人に示す

行脚參請、既に知識に依附し、大叢林に於て淸高の雅衆に陪すること久し。一旦に親緣を以て著略して歸せんことを須む、動すれば是れ數百里遠く行く、須らく自らの力量を以て履踐を忘れず、直に行處をして塵を生せざらしめんことを要す。況んや此の段の事、知識の身邊に在る時便ち有、鄕井に居ては便ち無しと道はず。所謂趯時も在らざれば死人に如同す。正當在時亦模を起し樣を畫せず、則ち平常なりと雖も、滴水滴凍、卓然として識を絕して、箇の無爲無事無心の事業を成ず。表裏洞然として無際なり、萬法と侶たらず、千聖と途を同じうせず。根を深うし蔕を固うして、只だ閑々地を守りて、養ひ來り養ひ去る。徹せざるを憂へず、但だ凡情を盡して自己の工夫を作せ。外緣に管すること勿れ、名利を逐ひ我見を起し勝負を競ふこと勿れ。是の故に㋩古德の道く、「任運として猶ほ癡兀の人の如し、他家に自ら通人の愛有り。」と、傑禪人條ちに來りて別を告げ、警策を求む、因つて此の語を書して之に授く。

成修造に示す

蔣山、門下、禪の說くべき無く、道の傳ふべき無し。半千の裙子を聚む と雖も、唯だ箇の金剛圈栗棘蓬を以て、跳る者は力を著けて跳り、呑む者には意を用ひて呑ましむ。怪しむこと莫れ、沒滋味、太險峻なることを。或は若し驀地に體得すれば、畫錦をきて鄕に還るが如し、千人萬人只だ仰羨し得ん。要は且た他の從來する所を覓むるに得ず、所謂人々本分の事なり。纔に心を生じ念を動じて承當擔荷すれば、早や本分ならずして了れり。直に萬機休罷し、千聖も攜へられざることを得たり。奈かせん猶ほ依倚の在る有ることを。快に須らく擺撥して、那邊に透脫し去りて始めて得べし。所以に道く、「但だ纖毫も有れば、卽ち是れ塵意を擧ぐれば便ち魔の撓ます所に遭ふ。」

㋩古德道く。傳燈廿九に出づ、寶誌和尙十二時の歌。

一切を成就するも總べて只だ他に由る、一切を破壞するも亦只だ他に由る。奇特殊勝の緣、恆沙の功德藏、無量の妙莊嚴、超世希有の事は、皆成就する所なり。慳貪、憎妬、情識、執著、有爲、有漏、垢染、雜亂、解路、名相、知見、妄情は破壞する所なり。唯だ它能く一切の物を轉ず。一切の物能く他を轉ずること能はず、形段面目なしと雖も、而も十虛を包括す。凡を含み聖を育す、若し相取を作して之を取らば、卽ち見刺に墮して、卒に摸搡不著ならん。

諸佛の開示、祖師の直指、唯だ此の妙心なり。徑捷に承當して一念を起さず、頂に透り底に透りぬれば、現成せざる無し。現成の際に於て心力を勞せず、任運に逍遙して了に取捨なし。乃ち眞の密印なり、此の密印を佩すれば暗に燈を藏すが如く、世間に游戲して欣怖を懷はず、盡く是れ我が大解脫場なり。永劫窮年、曾て間斷なし。所以に道く、「丈六の金身を一莖草と作して用ひ、一莖草を丈六の金身と作して用ふ、豈に他有らんや。」

雪峰の道く、「是れ什麼ぞ。」雲門の道く、「須彌山。」洞山道く、「麻三斤。」趙州道く、「喫茶去。」巖頭嘘、投子噫、臨濟喝、德山棒、杈を擎げ指を擧げ鼓を打ち㋐磨を拽く、一一向上の宗風を顯し、頭々本分の草料を示す、大達の士一覷便ち透り、一擧に落處を知る。宗風を紹ぐに堪へたり、漕底は沙を數ひ、當面に蹉卻す。是の故に須らく俊流を得て、乃ち種草と作すべし。

㋐拽磨。五祖法演禪師、掌磨時僧あり、磨の急轉するを覩指して以て師に問ふ。此れ神通か法爾か。師乃ち衾衣旋磨一帀す。

逸上人に示す

有志の士、決定して此れ箇の大事に信入せんと欲せば、須らく從前の知慧聰明、所解所知を將て、底を倒して放下して癡兀の如くにして、胷中空勞々として、百不知百不解、千休萬歇、萬歇千休せしめんことを要す。驀然として本地風光の上より、㋑倜儻透脫して、前後際斷し、徹證自得して金剛の正體に契すれば、一㋒綟絲を斬るが如し、頓然齊しく了す。劫火洞然たりと雖も、初より變異なし。信得及、把得住、作得主して、一爲、一切爲、一了一切了、餉閒に身を移し、步を換へて萬種の作爲、渾て一體に歸す、更に何の世法佛法とか說かん。頭々物々、處に觸れて現成す、便ち佛祖と殊なること無し、亦た群靈と異なること無し。蓋し根脚既に明めぬれば、幽として燭さざること無し。手に信せて拈じ、步に信せて行き、口に信せて言ふ。元より它に非ず、亦別處に從つて轉せず、之を大施門開と謂ふ。百千の妙用縱橫十字、頂に透り、底に透りて、明かに佛性を證す。長時無間なり、一得、永得、踐履純熟す、豈に是れ省要得力の處にあらずや。但だ恁麼に信入せば、斷定して人を悞らず。

僧、雪峰に問ふ、「學人乍ち叢林に入る、乞ふ師、箇の入處を指せ。」雪峰云く、「乍に身を碎いて微塵の若くす可くとも、終に箇の師僧の眼を瞎せん、且た古人恁麼の意、何の處にか在る、若し善く參詳せば妨げず回避し得ざることを。須らく箇の入路有るべし、若し只だ言に隨ひ義を逐はば、則ち蹉過

㋑倜儻。不羈の貌、又高遠の貌。
㋒綟。線なり。

少からず。我れ早く是れ眉毛を惜しまずして了れり。」

僧、石頭に問ふ、「如何なるか是れ道。」頭云く、「木頭。」又問ふ、「如何なるか是れ禪。」頭云く、「磋埇。」奇怪なり、古人忒煞直截、略ぼ回互せず、所謂親切にして太だ近し、智見有りて計較するに足れる底、銀山、鐵壁を隔つるが如し。然らざれば則ち口頭の言語を認めて、便ち宗乘に當つ、則ち轉じて更に周遮す。是の故に眞實の道人、只だ純朴を務め、知見を生ぜず、直下に承當す。只だ恁麼に注解するも、是れ土上、泥を加ふること數百重、如かず我に石頭本分の草料を還し來らんには。

三祖云く、「急に相應せんと要せば、唯だ言不二」と。若し山僧に據らば、只だ箇の不二、早く是れ二にし了れり、參せよ。

趙州、婆子を勘破す、叢林議論千萬、多く見解を作す。殊に知らず、他の古人自ら乾淨の處に在りて、立ちて儞が泥坑子の裏に向つて、頭出頭沒することを看るを。

馬師云く、「儞が一口に西江の水を吸盡せんことを待ちて、卽ち儞に向つて道はん。信に此の老、天下の人を蹋殺す、只だ等閑に一語を出して、便ち限なき知見を作さしむ。若し這の老漢の葛藤を截ることを解する有らば、便ち請ふ、參を罷めよ。」

淨禪人に示す

淨道人因に入室す、遂に所疑を請益して云く、「此の一段の事何としてか、宗師多く人に這邊那邊を示す。」尋で之を語る、「本分に據りて截斷せば豈に如許有らんや。然も垂手方便、箇の入路を圖ることを貴ぶ。乃ち强ひて之を分つ意は、實に二種なき耳。見ずや僧、曹山に問ふ、『古人那邊の人を提持す、學人をして如何んか趣向せしめん。』山云く、『步を退いて已に就かば、萬に一を失せず。』其の僧省あり、所謂鉤頭の意を識取せよ。定盤星を認むること莫し、只だ今時を及盡せんことを要せば、便ち向上の事を承當し得ん。且く今時作麼生か及得盡せん、只だ當人、快に精彩を著け、緣塵を擺撥して、直に胷中をして脫灑にして纖毫を立せず、頂に透り底に透りて洞然として虛寂ならしむるに在り。切に忌む勝量の解會を作すことを。直に本來と相應せんことを待つて、自然に自悟自證して大安樂の地を得ん、此れ豈に紙上に能く話會する所ならんや。請ふ自ら眼を著けて看よ。」

堅道者に示す

佛祖の妙道徑截なり、唯だ人心を直指して見性成佛を務めしむるのみ。但だ此の心源、本來虛靜明妙にして、初より纖毫の隔礙なし。妄想の翳障するを以て、隔礙なきに自ら染障を生ず。本に背き末を逐ひて、枉けて輪廻を受く。若し大根器を具せば、更に外に求めず、自らの腳跟に於て脫然として獨證すれば、惡覺の浮翳旣に消して、本來の正見圓妙なり、之を卽心卽佛と謂ふ。此より一得永得、桶底子の脫するが如し、豁然として契合す、一法の情に當つべき無し。覩體純靜にして受用疑無ければ、則ち一了一切了、非心非佛と說くを聞き、一幷に親しく違順好惡の境界に臨むに至るに及んで、

則ち一印に印定す。何ぞ彼我異同種々混雜の知見有らんや。是の故に古德、一機一境一語一默に於て鍼を投じて理に入れば、千門萬戸了に差殊なし。百千の異流の同じく大海に歸するに譬ふ。自然に之に居して既に安く、之を用て透徹すれば、箇の無爲無事絕學の道人と作り去る。二六時中別心を生せず、異見を起さず、時に隨ひて飮啖し衣著す、萬境萬緣虛凝ならずと云ふこと無し。千萬年なりと雖も、一毫髮許をも移易せず。此の大定に處す、豈に不可思議、大解脫に非ずや。唯だ長時に間斷なく、內外中間有無染淨に墮せず、直下に休歇し去らんことを要す。佛と衆生とを見るに、等しくして差殊なし、乃ち是れ十成安樂の地なり。今既已に趣向有り、只だ長養して純熟せしむるに在り、煆へ來り煆へ去りて百煉の精金の如くにして、方に大法器と成らんなり。

尙禪人に示す

幸自ら圓成す、何ぞ特地なることを須ひん。たとひ慈悲を以ての故に、手に信せて拈じ來るも、未だ免れず、强ひて枝節を生ずることを。卻返つて未だ鋒鋩を露さゞる已前には如かず、只だ如今恁麼に水を涉り泥を拖することを少からず、只だ裏に就いて分疎することを得よ。還つて委悉するや、一粒の中、世界を藏す、普天匝地、時に應じて收む。

瑛上人に示す

道本言なし、言に因つて道を顯す、若し眞に道を體する人は、之を心に通じ、之を本に明む。直下に千重萬重の貼肉汗衫を脫卻して、豁然として本來眞淨、明妙、冲虛、寂淡、如々不動、眞實の正體に契悟す。一念不生前後際斷の處に到りて、本地の風光に蹋著すれば、更に許多の惡覺知見、彼我是非、生死垢心なし。拔白露淨にして信得及して、他の從上來の人と無二無別なり。等閑に作爲せず、確執せずして、虛通自在、圓融無際なり、時に隨ひ節に應じて喫飯著衣平常に契證す、之を無爲無事眞正の道人と謂ふ。蓋し根本既に明に緣つて、六根純淨なり、智と理と雙べ冥して、境と神と俱に會す。深として深とすべき無く、妙として妙とすべき無し、行履に至りて自ら融通を會するを喚んで、得坐披衣と作す。向後自ら看よ、終に肯て只だ言句の中、話路古人の公案の間に向つて埋沒し、鬼窟裏、黑山下に活計を作さず、悟入深證を以て要と爲す。自然に至簡至易、平常無事の處に到りて然も亦終に肯て死殺坐卻して、無事界裏に墮在せず。是の故に從上作家の古德、棒を行じ喝を行じ、宗旨を立し、興奪を明し、照用三要三玄五位偏正を設く、峻機、電の如く卷き、言前格外旁提正按す。只だ當人の活卓々地にして、千人萬人羅籠すとも住まらず、向上の宗乘あることを知るを貴ぶ、終に指注定殺して坑を掘りて人を埋めず、若し此くの如き有る者は定めて是れ泥團を弄す、慷慨して透脫するに非ず、眞正具眼の衲子は、所以に人の殘羹餿飯を喫せず、繫驢の橛子に綴住せらるれば、唯だ宗風を埋沒するのみにあらず、抑も亦自己生死を透脫することを得ず、況んや復展轉して、路布窠窟解路を將て傳授して、後學に與へんや。遂に一盲衆盲を引いて相將ゐて火坑に入ることを成す、

豈に是れ小禍ならんや。復た正宗をして只だ淡薄を見、祖佛の綱紀地に委さしむ、豈に痛ましからずや。所以に學道は先づ須らく正知正見の師門を擇んで、然る後複子を放下して、歲月を論ぜず、用て事を做して、綿々として相續して、苦硬にして入り難きことを怕れざれ、參取して須らく徹し去るべきことを管せよ。見ずや、睦州の道く、「未だ箇の入頭を得ずんば、須らく箇の入頭の處を得べし、若し箇の入頭の處を得ば、老僧に辜負することを得ず。」既に誠を操ること日久し、大いに鉗鎚を經て洪鑪に煅煉せよ。日に近く日に親しく、田地穩密なり、只だ更に悠久の管帶を辨じて、證の如く悟の如く、始終無間にして世法佛法、打成一片ならしめば、物々頭々出身の處あらん。塵機に墮せず、物の爲めに轉せず、鬧市の裏十字街頭、浩浩たるの中、正に好し力を著くるに。

五祖老師、平昔人の爲にすること最も捷徑なり、示す毎に徒に多く古德の有漏、筌蹄、無漏、木杓、大乘、井索、小乘、錢貫、覿面に相呈する時、如何んか典座に分付せん、如何か是れ玄旨、壁上錢財を掛くといふことを擧して、學人に謂らく、「儞若し興慶を會得して底に徹し去らば、便ち罷參す可し。所謂唯だ此れ一事實なり、直に赤心片々にして、一絲髮許をも隔てざることを得たり。若し眞に究めて此の田地に到ることを得ば、始めて綱宗を提持し、正法眼を傳ふるに堪へたり。」

昇禪人に示す

參問の要は專一なるに在り、强ひて作爲せず只だ本分を守る、須らく根腳透脫の處有りて、明かに本來の面目を見て、本地風光を蹋著すべし。初より尋常の行履を改移せず、而も表裏一如にして任運に施爲す。奇特を立せず、汎常の人と以て異なること無し。喚んで絕學無爲閑靜の道人と作す、而も自處するの際心迹を露さず。直に得たり、諸天花を捧ぐるに路なく、魔外潛に窺ふに見ざることを。始めて是れ朴實頭著實の處なり、養ひ來り養ひ去り、日久しく歲深くして、世法佛法打成一片にして、混融無際にして力用現成す。死生を透脫すること豈に難事とせんや。但だ患ふらくは證入の處、諦當ならざれば、胷中物有りて則ち留礙なり、急に相應せんと要せば、當に須らく旋有ならば旋消して、紅爐に雪を著くるが如くに相似たるべし、自然に廓然安靜にして大解脫を得ん。但だ自ら退審せよ、知識に親附すること久しからずと爲さず、所以に履踐の處、還つて端的の落著有りや也た未だしや、落着有らば更に箇の何をか疑はん。直下一念を起さずんば、脫體承當せん。一處纔に眞ならば、千處萬處豈に更に別ならんや。祖師は只だ人の見性を要す、諸佛は只だ人をして心を悟らしむ。心性既に眞にして純一無雜なれば、則ち四大五蘊六根六塵一切の萬有、皆是れ自己放身捨命の處にあらざる無し。等閑に蕩々地、日の普く照すが如く、虛空の邊量なきが如し、豈に限ある身心を以て、返つて自ら拘局して快活ならざらしめんや。

古人十年二十年只だ參透せんことを要す、一たび透りて後、便ち活計を作すを解す。如今豈に是れ欠闕せんや、但だ要情を起さず、執著を生ぜざれば、力に隨ひ緣に遇ふて通徹せざるなし。唯だ專一

に純一なることを貴ぶ。事緣を幹くすと雖も、亦外物に非ず、攝めて歸れば自己卽ち妙用たり。八萬の塵勞、卽時に化して、八萬の㊀波羅密と作る、更に別に知識に參ずるを須ひず、日用の中に於て無量數の衆生を度し、無量數の佛事を成就す。無量數の法門を歷涉するも、皆自己の胷中より流出す、豈に他有らんや。所謂百尺の竿頭に須らく步を進むべく、大千沙界に全身を現すべし。

民上人に示す

學道は深く宜しく步を退いて體究すべし、但だ死生を以て念とせよ。世諦は無常なり、是の身堅久なるに非ず、一息不來なれば便ち是れ異世他生なり。或は若し異類に入らんことを論せば、轉た千生萬劫を更ふとも、出徹の處無からん。幸にして今富んで春秋を有す、正に好し力を著けて念々趣向して心々移らず、根腳に向つて覩捕するに、一念不生、前後際斷の處に到りて、驀然として透徹すること、桶底子脫するが如くにして歡喜の處有らん。奧を極め深を窮めて本地の風光を躍著し、本來の面目を明見せば、天下の老和尙の舌頭を疑はじ。坐得斷、把得住、無心無爲無事を以て之を養はゞ、二六時中更に虛しく過ぐる底の工夫なし。心々物に觸れず、步々處所なし、便ち是れ箇の了事の衲僧なり。名を圖らず利を苟めず、壁立萬仞滴水滴凍、自己生死を透脫する事を辨じて、諸餘を管せず、聲色を動せず、群衆を驚さず、翛然として獨脫す、眞の出塵の羅漢なり。切に宜しく信じて履踐すべし。

㊀波羅密。到彼岸なり。

昔蒙山の惠明道人、黃梅より盧老を趂逐して、大庾嶺に到りて之に及ぶ。遂に衣鉢の爲に來らず、只だ法の爲に來ると咨稟す。盧乃ち盤石に坐して冥心せしむ。因つて之に語りて云く、「汝但だ善惡都て思量すること莫れ、正當恁麼の時一物を思はず、我に明上座本來の面目を還し來れ。」明、言に依つて念を斂む、尋いで省發すること有り。乃ち復た盧に問ふ、「只だ這箇とやせん、爲當更に別に密意有りとやせん。」盧の云く、「我れ若し爾に向つて道はん、卽ち密ならざるなり、只だ上に說くが如く、汝若し會せば卽ち密は汝が邊に在り。」と、蒙山乃ち了了として疑なし、將に知んぬ密意は卽ち是れ密印なることを。若し老僧が示す所を體得して心地豁然たらば、密印豈に別人の邊に在らんや。密說顯證皆只だ刹那の頃に於て、纔に心を生じ、念を動せば、卽ち交涉沒するなり。

心道者に示す

祖有りて以來直に此の一段の大因緣を指す、政に生死を透脫せん爲なり。須らく是れ上根利智は言詮に超え、情域を出でて、世緣彼我高低强弱衰榮を以て、意と爲さざるべし。徑に自己根腳下に於て、本來淸淨寂照虛凝を取りて、今古を輝騰し、遐かに知見を絕する底の本分の事を了悟し、便ち翛然として獨立すれば、萬象も藏覆すること能はず、千聖も以て擬倫すること無し。等閑に蕩々地一物思はず、一物爲さず、自然に無欲無依にして、諸三昧を超ゆ。更に何の建立の門戶差別の作爲をか說かん。直下に坐斷して壁立千仞、凡も亦拘はらず、聖も亦管せず、方に是れ了事の衲僧なり。身心、

枯木朽株寒灰死火の如くなれば、乃ち眞の休歇なり。所以に從上來只だ懷を忘れて獨り得ることを貴ぶ、既に得ての後我見を立せず、自ら㉑貢高ならず、任運縱橫、癡の如く兀に似て、始めて無爲無事の道人の行履に稱ふ。設使ひ三五十年も亦變せず、亦異ならず、千生萬劫に至りて亦只だ如々なり。所謂長久なること最も人を得難し、若し一往恁麼に信得及透得徹せば、世を度すること能はざるを憂へず、煩惱生死の坑を跳ること、唯だ當人の諸根猛利なるに在り、毗盧を超え祖代を越ゆること、亦難しとせず、此れ眞の大解脫門なり。

達磨祖師初めて少林に來りて、九年面壁冷坐す、深雪の中、箇の可祖を得たり。所得を勘證するに洎んで、只だ禮三拜。位に依つて立つ、此れ豈に許多の言詮に涉らんや、直下に領取して頂に透り底に透り、纖芥も違ふこと無く、現成して撲てども破れず、萬機も能く到ること莫からんことを要須す。然る後に無住の本の中に於て一切を流出す。融通して滯ること無ければ、百千の作爲皆我が妙用なり。處々人の與めに釘を抽き楔を拔き、各をして安穩にし去らしむ、豈に省要ならずや。

玄沙一日、人の屍を捧いて過ぐるを見て、指さして衆に示す、「四個の死漢一箇の活漢を捧く」と。若し情見に隨はば卻つて是れ玄沙自ら相顚倒す。若し向上の正眼を以て見を離れ情を超えば、乃ち玄沙の人の爲にすること、極めて是れ親切なることを知らん。是の故に透脫須らく他陰界を出づべし。

㉑貢高。貢上なり、自ら高陵物有りて人を實伏せんと欲する者、之を貢高と謂ふなり。

見ずや、㉒古德の道く、「白雲淡泞、水、滄溟に注ぐ、萬法本閑なるに、而も人自ら鬧し。」果して是れ眞實諦當ならば、聊か擧著するを聞いて、便ち落處を知る、以て生死を透脫すべし。陰界の中に在りて窒礙せられじ、鳥の籠を出づるが如く、自由自在なり。自餘の一切機用、言句只だ一截に便ち休す、更に第二の見に落ちざるなり。

照道人に示す（尼）

釋門の奇特徑截に超證、速に般若と相應ずること、禪宗に出でたるは無し。此れ乃ち如來の最上乘、淸淨の禪なり。靈山に花を拈ずれば、金色頭陁微笑し、迦文、涅槃妙心正法眼藏を付授せし自り、敎外別行、單に心印を傳ふ、歷代の四七達磨西來に至るまで、直に人心を指して見性成佛せしめ、凡聖久近を論ずること無し、但だ根器相投ずれば一念に透脫す、更に㉗三僧祇劫を假らず、便ち本來圓成淨妙の㉘調御を證す。是の故に此の宗に游泳することは、大法器に資る、初より志を立し歩を跂て、便ち超卓せんことを要す。所謂㉙立地成佛なり、蹔時念を斂むれば、便ち無生を證す。前後際を立せず、他より得ず、惟だ是れ自己分上に猛利に操修す。一綟絲を斬るが如く、一斬一切斬、性靈瞥脫す。前念は是れ凡、後念は是れ聖、擬、不擬凡聖一如なり、十虛を含吐して更に方所なし。永嘉道く、「爭か

㉒古德。南陽忠國師なり、會元に出づ。
㉗三僧祇劫。三無數劫のこと、菩薩が佛果を得る迄に經たまふ修行の年時なり。
㉘調御。佛十號の一なり、一切知生を調伏す、故に調御と名く、成實論十號品に出づ。
㉙立地成佛。法華經龍女涅槃廣額屠兒等の類。

似ん無爲實相門、一超直入如來地なるには。」と。

法華會上に龍女一珠を獻じて、正覺を成ず、豈に念を轉じて、便ち妙果を證するに非ずや。蓋し此の法は天地も覆載すること能はず、虛空も包容す可からず、一切含靈の根腳に蘊在して、一切の依倚たり。長時淨裸々、處として周からざる無し。但だ情識の爲めに拘せられ、聞見に隔てられて、緣影を認めて心と爲し、四大を身と爲す、此の正體を證得すること能はず、所以に諸聖非願力を以て、指出して人に示して、一切群生根器ある者をして、回光返照して、單拈獨證し去らしむ。只だ龍女の獻する所の寶の如きんば、卽今何の處にか在る。若し纔に擧著便ち和座子、承當得せば、終に語言の中に向つて解會を作し、心機意想の裏に窠窟を作さじ、便ち靈山無垢世界と無二無別なり。從上來唯だ最初の一念、最初の一句を貴ぶ。念未だ生せず、聲未だ發せざるに、直下に截斷せば、千聖の靈機萬靈の印契、一時に劃破せん。是れ脫灑自由大自在を得る要妙の處にあらざる可けんや。

龐居士、馬大師に問ふ、「萬法と侶たらざる、是れ何人ぞ。」馬師云く、「汝が一口に西江の水を吸盡せんことを待つて、卽ち汝に向つて道はん。」と、此箇の公案多く唇吻に涉りて商量し、機境の解會を作す有り、殊に宗猷を禀けず。須らく是れ箇の生鐵鑄就す底の方に、能く流に逆りて超證して、乃ち二老の鐵船を翻卻することを解して、始めて壁立萬仞の處に到りて、方に許多の事無きことを知るを要す。

倫上人に示す

一切有心天地懸隔❸酌然たり。如今關を透り得ざるは、只だ心執重多なるが爲なり。若し脫然擺當して無心の地に到らば、一切の忘染情習俱に盡きて知見解礙都べて銷せん、更に何事か有らん。是の故に南泉云く、「平常心是れ道」と。然も纔に念を起して平常を待要せば、早く乖差し了れり、此れ最も微細にして❹湊し難き處と爲す。沒量の大人箇裏に到りて踟躕す、何に況んや學地をや。直に須らく抵死護生咬嚼して斷たしむべし。直に大死底の人の氣息を絕するに似て、然る後甦醒して、始めて大虛に廓同することを知らん。方に腳し實地を蹋むに到りて、深く此の事を證すれば、明得徹信得及して、等閑に蕩々地、百不知百不會、纔に築著するに至りて、便ち轉轆々なり、更に拘制なし、亦方所なし。用ひんと要すれば便ち用ひ、行せんと要すれば卽ち行ず、更に何の得失是非有らん。通上徹下一時に收攝す、此れ無心の境界なり、豈に容易に履踐湊泊せんや。須らく是れ箇の人にして始めて得ることを要す。若し未だ此くの如くならずんば、當に須らく身心を放下して、冥然地に一毫許の依倚無からしむべし。覿來り覿去り、日久しく歲深うして、自然に蓋天蓋地、處に觸れて現成す。未だ天生の釋迦、自然の彌勒有らず、阿那箇か娘肚裏に在りて便ち會する、直に應に快に精彩を著けよ。時人を待たず、驀然一咬咬斷せば、倆を柰何ともせじ、大丈夫須らく自得自由自在の處に到りて始めて得べし。

❸酌。灼に作るべし。
❹湊。水會也、簇進なり。

正上人に示す

參請、固に利根にして、機に乘じて便ち領じて、初より凝滯無からんことを欲す。亦須らく深信純熟して、効を長久に取りて衣單下に向つて工夫を作すべし。所謂休し去り、歇し去り、唇上に㊂醭生じ去り、古廟の香爐の如くし去る。蓋し此れ乃ち生死を透脫し、凡情を超え、彼岸を越えて、尤も大いに人間の雜務を忘るべく、辨利聰明は未だ世間を出でず、只だ虛妄を增す、祖師西來此の一段を唱ふ、人の直下に徹證して、無始無明の住地を了卻して、淨盡して遺すことを無くして、明かに本地の風光を證し、明かに本來の面目を見せしめんことを要す。千聖萬聖出で來ると雖も、絲毫許をも移易せず、之を直指人心見性成佛と謂ふ、豈に只だ言に隨ひ句を逐ふて機境を作し、路布を事とし知見を廣めんことを圖り、人に勝らんことを欲して、名利を取ることを待つべけんや。固に此の理に非ず、既に是れ有志の士、一等に草鞋を蹋破す、須らく箇の徹頭の處を究むべし。只だ僧の雲門に問ふが如きんば、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」對へて云く、「東山水上に行く。」他、豈に徹了して恁麼に道ふにあらずや、一葉落ちて秋を知るべし、更に言句の上に言句を生じ、知解の上に知解を作することを待たば、爭か徹し去ることを得ん。若し雲門の此の意を體得せば、古今の言句一時に穿過せん。但だ辨じて心に肯て與麼に靠將し去れ、㊃甕裏豈に曾て鱉を走らしめんや。是の故に古德の云く、「靈

㊂醭。かび也、酢に白醭を生ず云々。

㊃甕裏云々。てにとつたことと云ふこゝろ、掌得程的意思。

利の漢、聊か擧著するを聞いて剔起して便ち行く。」

性然居士に示す

道山の性、道と合ふ、恬靜を喜んで藻飾を尙ばず、夙に深信を蘊んで尤も玄學を慕ふ。宴寂する每に通宵徹夕、冥默內照す。瑩徹せること冰壺玉鑑表裏洞然たるが如し。而も蔬食長齋して向上の宗乘を究む、偏く知識に參じて一へに誠至を以て探り窮むるに年歲有り、始は則ち循り見て、語句合頭の窠窟を歷て、八穴七穿す。游歷して底を築いて其の志愈々確し。驀地に脫去して、直に佛祖心性の淵源に徹す、深く理妙に入りて踐履說宗二ながら通ず。涅槃生死を融攝して身心一如、勝淨の地に到りて機智增々明にして、轡を頓へて自ら樂むこと久し。猶ほ自ら已まず、諸方達道の上上の大機に就いて佛見法見を碎き、大用上頭の關捩を明了し、烹煅の鑪鞴を展拓し、玄妙を擺撥し、廉纖を擇擘し、殺活の綱宗を提持し、聖賢の閫域を超脫して正に邪正を辯じ、休咎を識り進退を知り、機宜を別つ、誠實の地に到らんことを圖る。恰も安閑の事を整して虛寂の境に游んで、徑直に無爲無事羅籠すとも住らず、呼喚すとも回らず、毗盧を超え釋迦を越え、莊嚴淸淨自在大解脫の域に臻らんことを欲す。適々世緣を以て暫時渠を挽綴するに、「之に處するに亦翛然たり。有志の士、無量阿僧祇を以て頃刻と爲す、當に亦綽然として本源を遂ぐべきのみ。凉に乘じて相過ぎる、紙筆に遇ふて此を作る。

慧空知客に示す

諸佛出世祖師西來、其の旨歸を鞠むるに、斷じて他事なし、唯だ同體大悲無緣の等慈を以て、此の段の大因緣を揭示す。利根上智の格を越え宗を超えて、直下に領略せんことを圖る、所謂敎外別行、單傳心印なり。是の故に十萬衆の前に於て花を拈ずるに、只だ迦葉のみ有りて特り證す、覺えず微笑す、是に由り釋尊付授す。達磨梁に游び魏を歷て人を尋ね、少林に在りて面壁すること久し。獨り二祖の深く信じて、雪に立ち臂を斷ち、一言の下に安心することを得て、遂に衣鉢を傳ふ、此れ豈に小事ならんや。蓋し從上來皆聖賢の世に應じ、主勝れ、根强にして、龍象の蹴踢なり。源既に淵深にして流れ短淺ならず、四七二三よりの後、間世の英靈相繼いで傑出す。㋺思㋩讓、馬師、石頭の如くんば寰中に獨步す。德山は疏鈔を爇き、臨濟は禪板を燒く。藥嶠、天皇、百丈、黃檗及び㋭五家の宗主各々門風を立して、縵天の網を布き萬里の鉤を垂るゝが如し。頂に透り底に透りて、千萬人に過ぎたる作略出沒卷舒擒縱照用權實有らずと云ふこと莫し。只だ一途一轍一知一見を守りて、窠臼を存し、知解を立して死水の裏に浸殺して、實法を以て人を繫縛せんや。所以に寰海に徧して列刹相望む。數百年まで綱宗墜ちず、的々相承し、源々相繼ぐ、單見淺聞皮膚幽陋、能く負擔する所に非ず。是れ卓識奇姿を蘊んで、步を跂めて佛祖を越ゆる器量の蓋天蓋地にして、初めて窠を出で來りて迥然として殊絕せんことを要す。先づ自己の根腳を了卻し、本色の㋬猪狗を咬む

㋺思。青原行思禪師。
㋩讓。南岳懷讓禪師。
㋭五家。雲門、臨濟、潙仰、法眼、曹洞の五派なり。
㋬咬猪狗。虎の如く狼の如き惡辣手段なり。

手段、大達の宗師に靠り、順逆の境界に向つて透脫し、粉骨碎身、志見を辨じ、大を圖りて細を圖らず。遠を圖りて近を圖らず、千艱萬苦至難至險銀山鐵壁の如くなる處に於て、放身捨命手を那邊に撒して、此の大事因緣を承當し、情を絕し見を離れて狂機業識を欺卻し、大解脫門を闖いて、自己生死の大事を了卻して初發の志に酬い、六根・四大・五蘊・㋻十二處・㋼十八界・㋽七大性を見るに、虛空の狂花亂起亂滅するが如し。唯だ全く乃祖乃佛、所證の廓徹靈明、廣大虛寂金剛の正體を稟承し、根を深くし極を寧んじて餉間に一毛一塵一機一句を擧ぐるに、根本の中より發せずと云ふこと靡し。之を大機大用と謂ふと雖も、早く是れ胡亂に名摸し了れり。更に何の處に向ひて心に著し性に著し、玄に著し妙に著し、理に著し事に著せん。箇裏に到りて紅爐上の一點の雪の如し。聞くに禪と道と迹を削し聲を呑むも猶ほ未だ是れ極致にあらず、況んや其の餘の光影・色聲・山河・大地・露柱・燈籠・眼見・耳聞・擔枷・抱鎖をや。豈に見ずや、德山、門に入れば便ち棒し、臨濟、門に入れば便ち喝す。睦州現成公案子細に看來れば、渠已に是れ泥に入り水に入りて、老婆心切なり。所以に道く、「若し一向に宗敎を擧揚せば、法堂上須らく草深きこと一丈なるべし。自餘の方便門軒かに知んぬ、是れ已むを得ずして抑して之を爲す。」是れ皆從上來の大善知識、慈を垂れ悲を運ばん。異世の標榜と作り、有志の士をして窮めて撲不破の處に到り、八面玲瓏た

㋻十二處。六根と六識とを合稱して云ふ。十八界の六識を六根の第六意根中に攝するが故に十二處となる。
㋼十八界。六根と六塵と六識とを總稱して十八界と云ふ。
㋽七大性。地、水、火、風、空、根、識の七、其の性廣大也。

らしむ。唯だ自利のみに匪ず、亦以て人を利し、無盡燈を傳ひ佛の惠命を續ぐ。唐より㊀五季を歷て以て國初に至り、重望を負ひ祖位に據りて龍の如くに馳せ虎の如くに驟いて、南に奔り北に走る。人の與めに楔を拔き釘を抽き、黏を解き縛を去る者、何ぞ限あらん。近世人なしとは道はず、全材獨脫して、本分の鉗鎚を奮ひ、作家の鑪韛を啓くものを求むるに、誠に多く得べからず。蓋し師因循として淺陋に、資又根を深うし蔕を固うするもの無きに緣る、只だ曉り易からんことを圖りて、便ち膠漆の如し。祖宗無上の道妙高遠、大機をして絕ゆるに幾きことあらしむ。尙ほ後昆類を拔き、倫を離る底有りて古と儔を爲し、是非得喪彼我取捨を顧みず、鐵石の心を以て卷くべからず、移すべからざるの志を辨じて、苦を攻め淡を食し、艱難を怕れず、向前體究して、以て芳躅を繼ぐ可きことを賴む。往世の高風を續いで人間の明燭と爲り、昏衢の日月と作るべし。此れ私心に常に渴望する所の者なり。今旣に憤悱として起發せんことを圖る、切に始を盡し終を盡すに在り、海上に人を殺すに、眼を眨せざる手段を具する宗師を擇んで、徹し去らんことを圖取すれば、則ち豈に唯だ自己超方の本心に酬ゆるのみならんや。抑も亦佛法の大海に於て一隻手を出さん。矧んや此の門、人我を絕し、愛憎を離るゝをや。只だ正知正見を貴ぶ、安んぞ誰が家の子ぞと論ずるものに在らんや、等しく是れ曹溪門下なり、何ぞ彼の宗、此の派、其の間に有らんや。

㊀五季。梁、唐、晉、漢、周の五代を、往古の堯舜の代に比して季世といふ也。

張直殿に示す

佛祖の妙道に契證することは、最も宜しく上智利根にして、懷を忘じて體究し、機境に墮せず、直下に萃を拔き群を超え、心を虛にして領略して、直に圓明廣照して地に透り、天に通じて生死根源に徹して、葛藤路布を出づることを得べし。胷中灑落にして一念生ぜず、前後際斷し一句當陽に解會を脫去し、諦實に取證して了に疑惑なし。昔㊁則老の靑林に問ふが如くんば、「如何なるか是れ佛。」對へて云く、「丙丁童子來求火。」渠れ便ち語言に入りて道理を作す、便ち謂く、「丙丁は是れ火、更に來りて火を求む、我是れ佛なるに、更に去りて佛を問ふが如し。法眼の究窮撥正するに至るに及んで、他卽ち大いに信せず、翻然誠を投ずるに及んで、法眼亦只だ前の如し云云。」渠れ大悟、蓋し風に當りて證驗始めて回光することを解す。更に惡知惡解を作さず、當下に暗に燈を得るが如く、貧の寶を獲るが如し。此れ豈に小事ならんや、誠實に諦信せば、千萬億劫長く受用を得ん。是の故に道本言なし、言に因つて道を顯す。若し此の道を得れば、斷じて言句の上に在らず。後番纔に言句有る底裏を知り得て、便ち七縱八橫、顚じ來り倒し去り、腳し、實地を蹋む。廼ち語に隨つて解を生ぜず、遂に能く自在なり。出沒與奪、源を窮め本を極めずと云ふこと莫し。從上大達の士、此の場地を經て、琢磨煅煉して方に行持するに堪へずと云ふこと無し。但だ熟處をば放つて生ならしめよ、生處弄して熟せしめよ、悠久にして大機大用を得。一切の萬變千化

㊁則老。報恩玄則禪師。(傳燈廿五)

を見るに、皆卽ち識得破、信得及、把得住し、作得主す。何の放光動地に選ばん。千百萬億、佛來るとも箇の了の字を消せず。巖頭の云く、「物を卻くるを上と爲し、物を逐ふを下と爲す。若し戰を論せば、箇々力轉處に在り、唯だ向上に轉じて下風に落ちず、便ち是れ急に著眼の處なり。擬議不來なれば便ち眼睛を換卻す」と。正に宜しく快に斷割取すべし、久しうして純熟せば、摩詰、龐老と以て異なること無し。

胡尙書悟性に示す勸善文

人人腳跟下に本此の段の大光明有り虛徹靈通す、之を本地の風光と謂ふ。生佛未だ具らざるに、圓融無際なり、自己方寸の中に在りて四大五蘊の主たり。初より汚染無うして本性凝寂なり。但だ妄想の倏ち起りて之を翳障するが爲めに、六根六塵に束す。根塵相對するが爲めに黏膩執著す。一切の境界を取り、一切の妄念を生じ、生死塵勞に汨沒して解脫を得ず。是の故に諸佛祖師、此の眞源を悟り、洞かに根本に達して、諸の沉淪を憫んで大悲心を起し、世に出興す、正に此の爲めのみ。達磨西來教外別行、亦此の爲のみ。只だ大根利智回光返照して、一念不生の處に於て明かに此の心を悟ることを貴ぶ。況んや此の心能く一切世出世間法を生じて、長時に印定して、方寸に孤迥迥活鱍々なるをや。纔に心を生じ念を動せば、卽ち此の本明を昧卻す。如今直截に透り易からんことを要せば、但だ放つて身心をして空勞々地ならしめば、虛にして靈、寂にして照なり、內己見を忘れ、外纖塵を絕す、內外洞然として唯だ一眞實のみなり。眼耳鼻舌身意色聲香味觸法、皆他に依つて建立す。他能く如許萬緣を透脫超越し得たり。而も如許萬緣初より定相なし、唯だ此の光に仗つて轉變す。苟も此の一片の田地を信得及せば、則ち一了一切了、一明、一切明、便ち能く所に隨つて作爲する、皆是れ頂に透り底に透る大解脫金剛の正體なり。先づ此の心を悟了して、然る後一切の善を修めんことを要須す。豈に見ずや、白樂天、鳥窠に問ふ、「如何なるか是れ道。」窠云く、「諸惡莫作衆善奉行。」白云く、「三歲の孩兒も也た道ひ得たり。」窠云く、「三歲の孩兒も道ひ得ると雖も、八十老翁も行じ得ず。」と。故に應に探過正に修行を要すべし、目足の相資くるが如し。若し能く諸惡を作さず衆善を精修すれば、只だ五戒㊟十善を持つ人も亦以て淪墜せざる可し。何に況んや先づ妙明の眞心堅固の正體を悟りて、然る後力に隨つて修行し、諸の善行を作して一切の人をして因果に迷はず、地獄天堂の因も皆本心より作成することを知らしむるをや。此の心を平持するに當りて我人なく愛憎なく、取舍なく得失なし、漸漸長養三十二年、順逆の境界に逢ひ退轉せざることを得たり。生死の際に到りて自然に脩然として怖畏なし。所謂理須らく頓に悟るべく、事漸修を要す。多く學佛の儁を見るに、唯だ世智辨聰を以て、佛祖言敎の中に於て奇妙の語句を遲掠して、以て譚柄を資くるに能を逞しくし解を逞しくす。此れ正見に非ず、當に棄舍して冥心靜坐して、緣を忘れて體究すべし。底に徹して玲瓏たるに逗到し、

㊟十善。不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不嗔恚、不邪見。

自家無價無盡寶藏の中より運出せば、何ぞ眞實ならざる者有らんや。卻つて須らく先づ本來を悟了し、卽心卽佛の正體を明見して、諸妄緣を離れて脩然として澄淨ならしめ、然して後に一切の衆善を奉行し、大悲を起して有情を饒益す。作爲する處に隨つて皆是れ平等無我無著の妙智顯發して、本體に通徹する善行なり、豈に妙ならずや。所以に道く、「但だ肯心を辨ぜよ、必ず相賺し、悟を以て則と爲して遲晩を嫌ふこと莫れ。」と、珍重。

張宣機學士に示す

從上大達の士、此の最上獨脫の一著子を單提密傳す、極めて省要なりと爲す。唯だ利根上智の機應相投じ直下に領略せんことを務む。幾時か如許般次の向上向下、理性玄妙、正偏主賓語言作用有らん。纔に解會を生ずれば卽ち羈勒せられて更に自由の分なし。是の故に本分の作家は終に人の釣鉤に上り、人の圈闖に落ちず、唯だ自ら洞明照了して冐次に毫髮を留めず、超然として孤高なり。萬法と侶たらず、千聖と鄙を同じうせず、脫白露淨にして、湛然虛凝なり。緣に涉り機に應ずるに至りて、劍輪を飛ぶが如く、猛火に聚るが如し。安ぞ近傍すべけんや。語默有無動靜彼我一併截斷す。是の故に道く、「末後の一句、始めて牢關に到る、要津を把斷して、凡聖を通せず」と。已むを得ずして之を一句と謂ふ、之を正位と謂ひ、之を頂門と謂ひ、之を金剛王と謂ふ。纔に此の意を得れば墮落として通透して、情塵意想見解勝智自然に銷融す。時中寬廣にして大自在を獲。此を以て身を修し己を行じ、此を以て國を定め邦を安ず。澤を生民に及ぼして位望轉た隆なり。心術愈正しくして能く其の功に居らず、其の德を有せず。萬世一時萬年一念、十方猶ほ目擊の造化を掌中に握るがごとし。只だ是れ箇の物を轉ずるなり、天を回らし地を易へ、須彌を芥中に納れ、大千を方外に擲ぐること豈に難易ならんや。既已に深諦にして、更に淘煉に資りて、轉た力量有りて、而も神を勞せざらしむる泰然たる大定なり。豈に止だ此の生、盡未來際を窮むるのみならんや。此に資らずと云ふこと罔し、同道同證に遇ふて擧せざるに知り、言はざるに契ふ。此を捨てば置いて論勿くんば可なり。傳に曰く、「如來密語有り、迦葉覆藏せず、獨り迦葉能く覆藏せず、廼ち密とする所以のみ。」

同龐居士に示して傳へて之を申ぶ

學士大夫の相見するに、多くは理性を論じて差根本に近けれども、卽ち知見を廣うし、玄妙に該涉し、天人の際に通じて、三敎を會同するを通儒と爲す。之を以て著述して名を異世に垂れんと欲す。頗る踐履を顧み節を立て、聽を退け、賢業を修むること、至りて膚淺なること有り。涉獵して以て談柄を資け、口を尙び勝を好んで用て同列に伏せんことを要す。我見を增長して皆正因に非ず、拍盲にして信向を知らざるに賢れりと雖も、自己單見淺聞に任せて毀訾を生ず、果に昧く因に迷ふて流俗に墮入する者あり、然も之を眞實心を虛しうし己を潔うし、刻苦步を退け懷を忘じて契證し、脚、實地を蹋んで根塵を透り、伎倆を絕し古と儔たるに比せんや。維摩大士〈給孤長者の流の如くんば、克く

道果を證して世出世を超ゆ。只だ唐朝の裴相國❶陸亘大夫、❷陳操尚書、❸王敬常侍、❹于襄陽、❺李習之、鄭愚韋宙の如くんば、心を悉して體究し、平生を盡して受用を得ずと云ふこと莫し。我が宗に尤も出沒を洞明して、深を窮め奥を極むるに、楊大年、内翰李駙馬都尉、便ち龐居士と並べ驅す可し。蓋し大力量を具して、仕路に在りて宰官を捨てず、方の外に游んで佛祖の巴鼻を提ぐ。世人に鉗鎚として同事攝を操りて、鴛鴦の行の中に向つて出で方面と作り、大宗師の與めに内外の護と爲る。豈に夙昔靈山の❼記莂を承けて、百劫千生煉磨の願行を發して、而も是くの如く機緣を闡くに非ずや。近世佛法澆漓すと雖も、衣冠貴❽胄、深く信ずる者の極めて夥し、殊に古風有り、是れ前の三流の中に相❾半ならんことを要すべし。儻し此の段の志有らば、須らく上上の大機を攀ぢて、中下の體度を作すこと勿るべし。則ち凡を超え塵を出でゝ、大解脱を得んこと難からずと爲す。唯だ是れ專一久長にして、境界惡緣に逢ふて直截撥斷せよ。所謂假使鐵輪は頂上に旋るとも、定慧圓明にして終に失はず。

李渤抬遺出でゝ九江に守たり、拭眼の歸宗と相値ふて一面に投契す。一日驀に問ふ、「敎の中に道く、芥子に須彌を納る、豈に是の理有らんや。」歸

❶給孤。須達多、唐には善施と云ふ。仁にして聰敏、積んで能く散ず、乏を賑ひ貧を濟ふ、孤を哀れみ、老を卹ふ、時のひと其德を美とし、給孤獨と號す。
❶陸亘。傳燈八に出づ、南泉に嗣ぐ。
❷陳操。傳燈十二、睦州の嗣。
❸王敬。傳燈十一、潙山の嗣。
❹于襄陽。于頔字は允元。(會元三)
❺李習之。傳燈十四、李翺字は習之、藥山儼に嗣ぐ。
❻記莂。記別とも書く、佛の修行者の成果に對する讖言のこと、單に記とも云ふ。
❼胄。嵩なり、系なり。
❽半。恐らく伴ならん。

宗の云く、「人傳ふ、公を李萬卷と、是なりや否や。」對へて曰く、「然り。」宗の云く、「公の身を觀るに三尺に滿たず、萬卷の書何の處にか著くる。」李卽ち旨を領ず。此れ豈に相に著し情に執し、見を守る者と論量す可けんや。是の指に因つて月を見、筌蹄を忘れて魚兎を得る者の根器を要す、乃ち以て方便窠窟を守らざる可きのみ。直に一擧便ち落處を知る、然る後穎脫して七通八達の地に到りて大受用を顯すべし。

❸韓文公、大顚に問ふ、「愈、公務事繁し、佛法省要の處、請ふ、師一言せよ。」顚只だ坐に據る、公罔然たり。是の時❷三平侍立す、卽ら禪床を撫すること一下して云く、「侍郎、和尙の道は先づ定を以て動かし、後智を以て拔く。」文公大いに喜んで曰く、「禪師の佛法峭峻なり、愈、卻つて侍者の處に於て箇の入處有り。」と。利根種性一撥すれば便ち轉ず、看よ他の師資、互に方便を作して名くべからず、言ふべからざる處に向つて發揮す。韓公の俊快なるに非ずんば安ぞ能く領略せん。所謂斤を揮ふ者も敏手なり、亦須らく斤を受くる者も動かざるの質有り、然る後二り俱に妙に入るべし、然らずんば則ち一場の漏逗と成さんのみ。此を觀るに那ぞ日々に入室し、朝々咨參するを假らん。是の故に昔人江を隔てて扇を招げば、渠便ち橫に趍いて領ず。今恁麼に紙墨に形はす、廼ち知りて故に犯すなり。

❸韓文公。韓愈、字退之なり。
❷三平。三平寺義忠、大顚に嗣ぐ。

黃聲叔に示す

相逢ふて拈出せず、意を擧すれば有ることを知る、子細に點檢すれば已に是れ水を渉り泥を拖く、況んや其の餘の周遮をや。則ち通人分上宜しく峭絶なるべし、豈に紛ㇾ拏を容れんや。蓋し此れ箇の獨り灑々落々たることを許す、電卷き星馳すと雖も、未だ免れず蹉過することを。只だ恁麼に擧覺するも、過犯彌天、如し未だ相逢はず、未だ意を擧せざる時に、直下に領略することは、其の人に存す、更に文彩に形はれ、知解を作し去らしむ可からず。珍重珍重。

㋐ 曾侍制に示す

僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」天下參問以て模範と爲す、異解を作す者極めて多し。唯だ直に透りて依倚せず、知見を作さずんば便ち能く疾く領せん、纔に毫髮の見刺有れば、則ち黑漫々地。豈に見ずや、法眼擧して覺鐵觜に問ふ、「趙州箇の庭前柏樹子の話有り、是なりや否や。」覺の云く、「和尚、先師を謗すること莫れ、先師に此の語なし、但だ恁麼に體究せば、便ち是れ古人直截の處なり。」

嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何。」州云く、「放下著。」者云く、「一物不將來、未審し箇の何をか放下せん。」州云く、「儞を看るに放不下なり。」嚴陽遂に大悟す。後來南禪師頌有り、「一物不將來、兩肩擔ひ起さず、言下に忽ち非を知る、心中限り無き喜、毒惡既に懷を忘ず、蛇虎知己を爲す、寥々千百年、清風猶ほ已まず、但だ試みに自ら頻に擧せよ、一物不將來、時如何、州の云く、放下著、驀然として、便ち省せんこと難からじ。」と。僧、雲門に問ふ、「一念を起さず、還た過有りや無や。」門の云く、「須彌山此れ又直截省要なり、無事にして心を虛にし慮を靜にして、且く鈍工夫を下せ、只管擧して看よ、久しうして當に自ら入處有るべし。」

呂學士に示す

初祖達磨、梁に到り武帝に見え、㋒合下に只だ箇の頂顙上の一著子を用ふ。武帝薦まず、人をして今に到りて㋓腕を扼らしむ。後來多少の人、泥を㋔汨ひ水に汨ひ、它の腳迹に去りて尋いで卜度して百千の異解を作す。要且つ曾て夢にも見ず、只だ是れ機緣の上に機緣を生じ、見解の上に見解を起す。所以に道ふ、劍去りて遠し、爾方に舟を刻む。當時能く箇の胡漢を截斷せば、則ち人を帶累する所に到らず、所謂恩を知りて方に恩を報ずることを解す。且く作麼生か它を截得斷せん。

蜀守蘇仲虎に寄す

大法は本より平常なり、利根精敏寬通して聰明と作らざるに在り、之を了するに入り易しと爲す。毎に患ふらくは知見太だ多くして、遂に源を汨らすことを。轉た窮むれば轉た遠し、能く透徹すること莫し。若し一切平心なれば、心も亦了に不可得なり。泯然として自ら盡く、則ち本性圓明にして

㋑擧。牽引なり。
㋐曾侍制。靈隱遠法の嗣、會元廿に出づ。
㋒合下。猶ほ當下と言ふが如し。
㋓扼腕。傍觀に耐へざる意思。
㋔汨。沒なり、亂なり。

混成す。造作を假らず、流を截つて深く證す、過と不及との處なし。乃ち天眞の機要に造る、所謂手を心頭に著けて便ち判すと云ふ是なり。日用の間常に成現せしめば、豈に泰定ならざらんや。古人心を悟ると云ふは此の心を悟る也。機を發すと云ふは此の機を發する也、自ら萬世移らざる可し、只だ閑々地を守りて、超然として獨得て是に對待なし。若し對待有らば則ち兩立と成る、便ち彼我得失有り、能く腳、實地を蹋むこと莫し。更に一歩を進めて一法を立せず、然る後に怙妥なり。明かに本來の人を見、胷中の物を去卻し、目前の機を喪卻して、脫體安穩にして、永く退轉を離る。無所畏の方便を得て以て、群靈を拯濟す可し。政に須らく長久なるべく、相續無間にして乃ち善し。

國譯佛果圜悟眞覺禪師心要卷上　終

國譯佛果圜悟眞覺禪師心要卷下

黃㋑太尉鈴轄に示す

此の道幽邃にして天地未だ形はれず、生佛未だ分れざるに、極めて湛然凝寂にして萬化の本たり。初より有無に非ず、塵緣に落ちず、㋺煒々燁々として涯際を測ること莫し。眞の眞なる可き無く、妙の妙なる可き無し。超然として意象の表に居す、物の以て比倫す可き無し。是の故に至人獨證穎脫、泯然として淨盡す。此の淵源に徹して方便力を以て直下に單提し、最上の機を接して階級を立せず、所以に之を宗乘敎外別行と謂ふ。一印を以て印定す、遂に關捩を撥轉して擬議を容れず。拈花微笑、投針擧拂、植杖㋩抵几、瞬目揚眉に至りて、悉く窠窟理道語言路布を出す、擊石火の如く閃電光に似たり。瞥然として迅急なり。萬變千化曾て依倚なし、頂に透り底に透り、籠羅を截斷す。只だ俊流を許し懵底を論せず、正に人を殺すに眼を眨せざる氣槩を具し、一了に一切了一明ならんことを要す。然して後特達死を絕し生を出で、凡を超え聖に入りて、遠見高識を蘊んで居常鋒鋩を露さず。等閑に突出すれば、則ち群を驚し衆を動ず。蓋し根を

㋑太尉。漢代は百官を太尉に表す、秦官は師事を掌るものなり。

㋺煒燁。煒首委、盛赤なり。燁音葉、明盛なり。

㋩抵几。會元十六慈受深の章に曰く、几を拊つて曰く、還底豈に是れ活佛意にあらずや云々。

深うし蔕を固うして威音王已前、空劫那畔を覷破すれば、卽今日用と異なく別なし。既に能く行持するに、力有りて重きに任じ遠きに致して、大自在を得るに堪へたり。㊁三秖を促めて一念と爲し、七日を㊇衍べて一劫と作すとも、猶ほ是れ小小の作用なり。況んや大千を方外に擲げ、須彌を芥中に納れんをや、乃ち家常の茶飯のみ。昔裴相國、旨を黃檗に得、楊大年、印を廣慧に受け、維摩、手に妙喜界を搏り、龐老、一口に西江を吸ふ、豈に難事ならんや。唯だ直に此の大因緣を領するのみ、既に此の道の基本有らば、時中能く人の處分を聽かず、略勇猛を操りて、應酬指呼の際に向つて眼を著け、快機利智を運し、一切の萬有を轉じて、自己の常握に回して、舒卷縱擒せば、則ち上來大達の、道を抱き德を蘊む、豈に踐履純熟の士と異有らんや。但だ源々をして相續して間斷無からしめば、便ち是れ長生路上快活の人なり。㊅祖師の云く、「心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なり、流に隨つて性を認得すれば、喜も無く亦憂も無し。」と、纔に轉變の處に於て幽深の旨を得、流動の時に向つて本性を徹見すれば、㊆二邊を超出して中道に居せず。安んぞ更に違順憂喜愛憎を存して、自ら受用を罣礙せしむ可けんや。心を以て心を傳へ、性を以て性を印すること、水を水に入るゝが如く、金を金に博ふるに似たり。樂易平常にして無爲無事なり、境に遇ひ緣に逢ふて一箭を消せず。德山棒を行じ、臨濟喝を用ひ、雲

㊁三秖。大藏一覽八に出でたり。
㊇衍七日。菩薩は卽ち七日を演じて以て一劫と爲す。(維摩不思議品)
㊅祖師云々。傳燈二に出づ、廿二祖摩拏羅尊者傳法の偈。
㊆二邊。空假なり、不空不假之を中道と謂ふ。

門睦州風の如くに旋り、電の如くに轉ずるもの何の遠きかこれ有らんや。唯だ情に徇ひて轉ぜざれば、色を蓋ひ聲に騎りて今を超え古を越えて、百草顚頭に向つて快く劍刃上の事を行ず。所以に道く、「向上の一竅を撥開すれば、千聖齊しく下風に立つ。」と、鳥窠布毛を吹き、俱胝の一指頭、趙州の三喫茶、禾山の四打鼓、雲門の須彌山、洞山の麻三斤、瓶盤釵釧を鎔かして一金と爲し、酥酪醍醐を攪いて一味と爲す、至微至奧の無上の道妙を出でず。嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何。」州の云く、「放下著。」復た徵す、「既に一物不將來、某をして箇の何をか放下せしめん。」州の云く、「看よ儞が放不下なることを。」と、渠れ卽ち大悟す。豈に是れ靈利にして言下に返照して、直截に透徹し、懷を忘じ念を絕する大解脫の根源を解し、本地の風光を躍著し、本來の面目を契合するにあらずや。此の一句を以て證卻すれば、則ち千句萬句根塵俱に謝して心宗に默契す。便ち他物に非ず、後來便ち毒蛇を伏し、猛虎を降し、不可思議の靈驗を顯す、豈に殊特とせざらんや。

雷公達敎授に送る

靈山に釋迦文のとき、百萬億の賢聖會集して龍象林の如し、皆群を超え衆を越ゆる大器大根なり。以て風を迎ひて投契し、嶽を隔てゝも領畧しつ可し、豈に止だ一を聞いて十を知り、毛塵を擧ぐるに至微至隱の底蘊を徹見するのみならんや。宜なるかな、未だ明かならざる、先に見て亳髮を遺さず、拈華に至るに及んで獨り金色頭陁微笑す。黃面老廼ち懷を開き手を展べて了に覆藏せず。便ち道く、

「吾に正法眼涅槃心有り、之を分付す、善く護持せしめよ。」と、厥の後果して的傳二十八世、雅に開證の初祖に當れり、今に到るまで流通して眞規墜ちず。是の時文殊・普賢・彌勒・金剛藏・觀世音悉く拱默して之を聽く。何ぞやと、嘗て其の至趣を鞠むるに、蓋し授受の際に當りて、豈に許可を愼ますして然るならんや。眼を以て眼を照し、聖を以て聖を繼ぐと雖も、羽翰步驟體裁蹊徑を絕去して、唯だ獨用向上の一著子を單提せずと云ふこと莫し、寔に千聖不傳の妙、萬靈景仰の宗なり。格を出で情を越え、凡を絕し聖を脫し、天を輝かし地を焯し、古に輝き今に騰る。是の故に二千年を歷て渾べて目擊の如し。只だ阿難由來を詢ふて謂く、「金襴の外別に何の法をか示す。」迦葉遽に呼ぶ、渠が應諾するを待つて卽ち云く、「門前の剎竿を倒卻著せよ」と。此れ向來拈華微笑と何の異同する所あらん。則ち綿々聯々として初より二致なし。傳燈錄、㋓寶林傳に載する所、水を水に入るるが如く、金を金に博ふるに似たりと云はずと云ふこと靡し。所以に達磨唱へて「直指人心敎外別行」と、故に㋔忝せざるのみ。溈山の云く、「此の宗は其の妙を得難し、切に須らく子細に用心すべし。」と、可の中頓に正因を悟れば、便ち是れ出塵の堦塹なり。破布の百衲を著して、頭㋕鬚髻、脚跟蹌たり、稠人の中に之を看るに、半分文にも直らず、驀地に打徹無量生の業識の種子を翻卻し、百不知百不會の處に向つて、口に信せて道ひ、手に信せて拈ず、有を知らざる底は㋖鴨の雷を聽くが如し、只だ眼を眨得す。後來㋗楗頭便ち此千群萬衆を領す、若し固に之れ有らば往々に大有道の宗師なり。比比皆是なり、貴勢に居して卿相と作るが如きに至りては、裴相國、陳操尙書、白樂天、王常侍本朝、楊大年、文公、李都尉駙馬が群を驚し、聖に敵して信徹し見透して受用無盡なり。率ね皆奇謀の異見を禀けて、世間に㋘蹈襲せずして出世間の津㋙梁を圖る、廼ち此くの如し。山僧が禀くる所寡昧なり、偶々憤發して先㋚哲の造詣する所を攀躋せんと欲す。殊に人に過ぎたる作畧なし、但だ操守すること久しうして、微しく信有るを以て固に晦を善くせず、出でて人の爲にす、蹉跎として四十餘載、傑出の英才に遇ふ每に、必ず傾倒羅列す。所向に隨ひ機緣に任せて專一箇の中に在り、一句一言を撥轉し、頂に透り底に透りて、千聖頂上に大自在を得る解脫力用を明めしむ而已。果して能く盡六地の群靈を濟度して、擧げて之を安樂無爲無無穩密の地に置くこと有らば、則ち迦文金色より下六代の祖、唐宗大達の將相に至りて、豈に異有らんや。源深ければ流長く、根牢ければ蔕固し。妄りに許與せず、廼ち眞實諦當、英靈豪俊解脫の大士と爲すなり。

㋓寶林傳。釋氏稽古略三を見るべし。
㋔忝。辱也。
㋕鬚髻。髮亂るゝ貌。
㋖鴨聽雷。眼睛突出。
㋗楗。音は件、限門の木也。

巨濟了然朝奉

根腳下に各々此の段を具せり、惟だ宿植深厚の士は、世諦に於て緣輕く力量有りて能く自ら擺撥し、長時に步を退けて孤運獨照し、三業を潔淸し、端坐參究して、妙省明脫す。自己分上に向つて見を離だ

㋗蹈襲。襲因也、合也。
㋘梁。石渡水を云ふ。
㋙哲。明なり智なり、智人也。

れ情を絶して壁立萬仞なり。無始劫來深習惡覺を放舍して我山を摧碎し、愛見を枯竭して直下に承當しつれば、千聖も能く移易すること莫く、萬象も覆藏す可らず。天を輝し地を焯す、乃佛乃祖の直に指す、妙嚴清淨本有の金剛の正體なり。百匝千重辨別する能はざる處に向つて眼を著得し、八縱七橫了に分割無き處及を下し得、機物の先に出で言意表に超えたり。灑々落々湛々澄々として、轉變自由にして力用活脫す。從上來の克證の上流に於て、同得同用無異無別なり、等閑の地只だ靜默を守りて初より鋒鋩を露さず、箇の癡兀の人に似て、緣に隨つて放曠として、飢餐渴飲常の時と以て異なることなし。所謂群を驚し衆を動せず、密々に用を顯し大機を發す。久しうして純熟安閑穩實の地に到る、更に何の㋙閑東破西、煩惱生死の拘束し得可きか有らん。是の故に古の有德の宿德、人をして既に根塵を脫し密印を弘むるに當りて、三十二十年冷寂々地の工夫を做さしめて、纔に纖毫の知見解路あれば隨つて卽ち掃攃す。亦掃攃の迹を留めず、手を那邊に撒して全身放下す、硬糾々地に大快活を得たり。唯だ恐る、是くの如きの作略有りと知ることを。知れば則ち禍事なり、始めて是れ眞實踐履なり。見ずや㋛王老師、趙州、洞山、投子、皆無心の境界を贊重す。實に後學の也た與麼に去らんことを欲してなり。若し機關語言辯慧知解を呈せば、正に是れ心田を汚染す。卒に未だ能く以て流を入す可からず。靈山の拈華少林の面壁、多少の人穿鑿本分に依らず、殊に知らず口頭の聲色を將て捫摸作用す。大いに㋚

㋙東西。支那俗語品物を指す。
㋛王老師。南泉王氏なり、自ら王老師と稱す。

腦を刺して膠盆に入るゝに似たり。若し是れ俊流ならば、他れ應に爾らざるべし。已に能く探討して必ず其の遠き者大いなる者を意ひて、㋜結交頭に到りて諦實に驗す。所以に得底の人は鼻涕を㋝雪むるに亦工夫無し。且く道へ、他何の處に向つて行履する、將に知んぬ敎外に單傳することを。是れ造次に承當し、空を望んで摶邈するに一一に頂に透り底に透りて、天を蓋ひ地を蓋ひ師子兒の游戲自在なるが如し。軒豁の時は直に是れ軒豁なり、綿密の處は直に是れ綿密なり。只だ是れ一段の腳跟なりと雖も、究竟に到りては順らく自ら精采を著けて、乃ち實頭の受用を爲すべし。

張仲友宣敎に示す

此れ箇の大因緣を㋞探賾せんと要せば、惟だ利根上智終に省力に㋟較る。然も須らく用て一段緊要の事と作して、常時に己見を靜卻して、胷中をして脫然として回光覩捕して、內外虛寂にして湛然凝照ならしむべし。一念不生の處に到りて淵源に徹透して翛然として自得す。體虛空の若くして邊量を窮むること莫れ、古に亘り今に亘る、萬象籠羅すれども住らず、凡聖も拘礙すること得ず。淨裸々赤灑々、之を本來の面目、本地の風光と謂ふ。一得永得未來際を盡すとも、更に何の生死の滯

㋗刺膠盆。方語にして、執着を離れざる意。
㋜結交。結果交代的意思。
㋝雪鼻涕。懶瓚和尙、衡山に隱居す、唐德宗皇帝使を遣して之を召さしむ、瓚方に牛糞火を撥して芋を煨して食す、來涕顚に垂る、使者笑つて曰く「且く勸む、尊者涕を拭け、」瓚曰く、「我豈に工夫有り、俗人の爲に涕を拭かんや、」と、寬に起たず云々。（碧巖三十四則に出づ）
㋞探賾。索隱。賾は幽深也、玄微也。
㋟較。音敎。

礙を爲す可きか有らん。小小の得失是非、榮枯寂亂に至るまで直下に截斷して、把得住作得主して長養し將ち去れ。一心生ぜざれば萬法咎無し、只だ是れ切に忌む、見を起して承當を作すことを。便ち彼我に落ち必す愛憎を生じて脫灑なること能はず、此れ箇の無心の境界、無念の眞宗なり。猛利の人方に能く著實ならんことを要す。祖師西來、只だ是れ直に人心を指して、人をして見性成佛せしむ。既に明かに此の心を信入して信得及せば、萬緣放下して、常に胷次をして空勞々地ならしめよ。此れ聖胎を長養して眞正に入る修行なり。

若し確實に未だ箇の諦當の處有らずんば、時中境に逢ひ緣に遇ふに、卽ち紛々擾々として、一切の物に隨つて轉じて長く生死纏縛の中に墮在することを得易し。應に須らく快く精彩を著けて、但だ無常を念ひて生死を以て大事と爲すべし。日を逐ひて日用の中に向つて、行の時は行の時を看取し、坐の時は坐の時を看取し、著衣の時は著衣の時を看取し、喫飯の時は喫飯の時を看取せよ。直下に脚跟に箇の發明の處に有らば、深く此の大事因緣空劫那邊より以て父母未生前に至るまで、合下に圓明して朗照なることを信ぜん。只だ卽今日用の中の如くんば、又何ぞ曾て虧欠せん。一處透得しぬれば千處百處遺なし。所謂處々眞なれば處々眞なり、塵々盡く是れ本來の人なり、眞實に說く時は聲現れず、正體堂々として身を沒卻す。卽ち㋙一塵纔に擧ぐれば大地全く收まる。遍法界都べて是れ箇の自己なり、更に何の處に向つてか眼耳鼻舌身意を著けん。軒かに知んぬ無二無別

㋙一塵。雲門錄中に出でたり。

なることを。水を水に入るが如く、金を金に博ふるが如し、眞に如々實際の大解脫なり。

昔于頔相公、裴休相國、本朝の楊億內翰李遵、明大尉、皆利根の種智を稟けて、長く方外の老宿と辨心參究して、悉く契證すること有りて、賢達たることを失せず、蓋し根性一世の㋐薰炙に非ずや。于公㊐紫玉に見えて佛を問ふ、紫玉呼ぶ、渠れ應諾す。玉の云く、「只だ這れ是れ。」裴公、黃檗に高僧を問ふ、檗云く、「更に別に求むること莫れ。」楊大年㋚廣慧老に參透す、頌有り云く、「八角の磨盤空裏に走る、金毛師子喚んで狗と作す、身を翻して北斗に藏れんと擬欲せば、應に須らく南辰の後に合掌すべし。」と、李都尉、石門に見えて大悟す、頌あり、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち拌ふ、直に無上菩提に趣いて、一切の是非管することを莫れ。」と、四公謂ふ所豈に異有らんや。但だ心地を發明すれば直に本根に透る、既に爾も諦實なれば、所に隨つて作用して別の道理なし。

五祖老師常に問ふ、「過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得、三心既に不可得なり、畢竟して心何の處にか在る。」と、山僧常時參衆に示す、龐居士、馬大師に問ふ、「萬法と侶たらざる底是れ何人ぞ。」馬師云く、「汝が一口に西江の水を吸盡せんことを待つて、卽ち汝に向つて道はん。」と、若し畢竟心の落處を體究し得ば、卽ち一口に西江水を吸盡せんと云ふことを領略し得べし。纔に意見を生じ一念の疑心

㋐薰炙。親炙といふに同じ。親近して薰炙をなすといふこと。

㊐紫玉。會元三に出づ、馬祖の嗣、紫玉山道通禪師。

㋚廣慧。首山の嗣、廣慧院玉琳禪師。（會元十一に出づ）

を起さば卽ち沒交渉、須らく諸緣の雜知雜解を放下して淨盡せしめて、計較無き處に到らんことを要す。驀爾に得入すれば、卽ち自己の庫藏を打開して、自己の家財を運出するなり。

德文居士に示す

撲實頭に腳跟地に著けて修行して意を淨めば、是れ大なる便宜なり。所謂❶一丈を說得せんよりは一尺を行取せんには如かず。然も見性悟理は情念俱に捐てゝ、胷次廓然として一切の相を離れて、融徹虛通す。然して後頂に透り底に透りて物我一如なり。生と死と齊しく佛と衆生と等し、動靜語默に至るまで處に觸れて原に逢ふ、一毫一塵を擧ぐるに該收せずと云ふこと靡し。然して後日用の中、踞地師子の如し、誰か敢て前に當らん、乃ち❷一相一行偏行三昧を得たり。根機旣に脫することゝ、一へに無心より出でたり、纎に纖微も有れば悉く皆截斷す、方に是れ向上の人の行履なり。所以に古老參玄の士、先づ妙心を悟りて、無修の修を行じ、無證の證を證することを貴ぶ、外に向つて馳求することを用ひず、只だ自ら回光せば便ち了せん。見ずや古人機に投ずる、江を隔てゝ扇を招き、刹竿を倒卻し、指を竪て毛を吹き、桃花を見、擊竹を聞く、皆是れ契證の處なり、佛法豈に許多有り來らんや。正に伎倆を絕して、當陽に便ち承當せんことを要す、卽ち是れ安樂修證の地なり。

興祖居士に示す

❶一丈。大藥寶中の語（傳燈錄九）

❷一相一行。圓覺經語事苑に出でたり。

虛妄の纏縛を脫し、生死の窠窟を破らんには、第一に根器猛利にして軒豁ならんことを要す。次に長久不退の心を辨じて力量をして洪深ならしめよ。境界の魔緣撓括すれども動せず、佛祖の大法を以て本心を印定す。此の心は乃ち眞淨明妙にして卓然として獨り存す。虛空世界は成壞有れども、此の段は初より改移なし。直下に專一に操存探究して、頂に透り底に透りて物我一如ならしむれば、微下通上只だ箇の金剛の正體なり。了々として毫髮の遺漏なし、瑩徹玲瓏として萬年一念なり。初は縱ひ未だ抵死に全からざれども、擺撥すれば日に近づき日に親し、絲來り線去りて養ひ得て純熟しつれば、二六時一切の境の中に向つて、著々出塵の意出身の路有り、淸淨の戒を持すれども執戒の念なし、浩々として修行すれども功用を存せず、一たび往き蹤跡を留めず、自然に古來得道の士と同儔なり。是の故に耆宿・悟入・修證・得坐・披衣・向後に自ら看よと論ず。正に人の無間道中の工夫を作さんことを要す、況んや生死の事大なり。多少の人臘月三十日に腳、忙しく手亂るゝことを。大率ね平時安穩にして、一往龕浮にして塵緣に隨つて輥じ了るに在り、時節到來するに逗到して渴に臨んで井を掘らば、豈に辨ずることを做し得んや。人生れて一世早く頭を回さずんば、百劫千世等閑に蹉過す。今旣に此の段有ることを知る、只だ堅固に向前して諸の知見を損し、妄緣を撥棄して長く胷中をして、灑々落々として一塵の事無からしむるに在り。或は妄想起らば急に須らく撥置して、翛然として無住ならしむべし。本性常に明なれば明も亦取らず、凜々として吹毛の劍の如し、誰か敢て鋒に當ら

ん。一切語言道斷心行處滅す、行かんと要すれば卽ち行き、住らんと要すれば卽ち住す、聖も亦收めす、凡も亦屬せず、豈に是れ ㋐ 了事の凡夫にあらずや。所以に從上來の誨示訓導、唯だ無心を務めしむ。眞心を無するに非ず、但だ一切の淨穢依倚分別、知解執著の心を無すらくのみ。此れ發心學道、悟入修行の方便の次第なり。

㋑ 超然居士に示す　趙提刑

曹山、悟本を辭す、問ふ、「何の處に向つて去る。」云く、「不變異の處に去る。」復た徵して云く、「不變異豈に去ること有るや。」答へて云く、「去るも亦變異せず、」と、自ら實處を蹋著するに非ずんば、安んぞ能く透徹すること此くの如き、豈に語言機思を以て測量すべき所ならんや。蓋し履踐深極にして滲漏なき致に到りて、然して後羅籠すとも住せず、學道の士、志を立して形骸を外れ、死生を一にし古今を混じ、去來を絕す。上流を攀ぢて至眞諦實、淵奧圓域に造詣せんことを要須す。自己を打辨し拔白露淨にして、絲毫の意想塵緣に墮在する無し。直下に心、枯木朽株の如く、大死人の如くにして、些の氣息なし、心々知なく念々住なし、千聖出で來るとも移換すること得す、乃ち以て枯木の上に向つて花を生ず可し。大機を發し大用を起し、慈を興し悲を運ぶ、乃ち無功の功、無作の作なり、豈に得失是非に落ちんや。纔に一毫毛をも留むれば則ち生死界に ㋐ 抵捂す、自己すら未だ度する能はず、安んぞ人を度す可けん。維摩大士、㋑ 金粟の位に住せず、酒肆婬坊に入りて大解脫佛事を作す。

㋐了事凡夫。廬居士の偈に出づ、「是れ聖賢にあらず、了事凡夫云云。」と。
㋑超然。圜悟の會下、邢主趙令衿、字表之、超然と號す、多くの禪納と遊ばんとして、圜悟の甌阜に居る。
㋐抵捂。相抵觸なり。

魏學士に示す

覿面に相呈して卽時に分什し了る、若し是れ利根ならば、一言に契證するも已に早や郞當なり。何に況んや紙墨に形はれ、言詮に涉り路布を作らんをや。轉た更に懸遠なり、然も此の段の大緣、人人具足す、但だ己に向つて求めよ、它に從つて覓むること勿れ。蓋し自己の心、無相虛閑靜密にして、鎭長に六根四大を印定して、光群象を呑む。若し心境雙び寂し雙び忘ず、知見を絕し解會を離れて直下に透徹しぬれば、卽ち是れ佛心なり、此の外更に一法無し。是の故に祖師西來只だ直指人心・敎外別行・單傳正印と言ふ。文字語句を立せず、人の當下に休歇し去らんを要す。若し心を生じ念を動じ、物を認め見を認めて精魂を弄し、窠窟に著せば、卽ち沒交涉。石霜の道く、「休し去り歇し去りて、直に唇皮の上をして醭生じ去り、一條の白練の如くにし去り、一念萬年にして去り、冷湫々地にし去り、古廟裏の香爐の如くにし去らしむ。」と、但だ此の語を信じて依つて之を行せよ、放に身心をして土木の如く石塊の如くならしむ。不覺不知不變動の處に到りて、靠りて氣息を絕し籠羅を絕せしむ。一念不性にして驀地に歡喜すること、暗に燈を得るが如く、貧の寶を得るが如し。四大五蘊輕安にして重擔を去るに似て、身心豁然として明白なり。諸相

㋑金粟。維摩のこと、是れ金粟如來なりといふに因る。

を照了するに猶ほ空華の如し、了に不可得なり。此れ本來の面目現じ、本地の風光露はる。一道清虛にして便ち是れ自己の放身捨命安閑無爲快樂の地にして、千經萬論只だ此を說く。前聖後聖作用方便の妙門只だ此を指す。鑰匙を將て寶藏の鎖を開くが如く、門既に開くことを得ければ、目に觸れ緣に遇ふて萬別千差、是れ自己本分に合有底の珍奇に非ずと云ふこと無し。手に信せて拈じ來るに皆受用しつ可し。之を一得永得盡未來際と謂ふ。無得に於て得す、得も亦得に非ず、乃ち眞の得也。若し是くの如くならずんば、便ち有證有得相似の般若の中に落ちて、卻つて究竟ならす。既に豁然として此の根本に達得すること分明なれば、然して後力を起して作用し、正に好く修行す。二六時中孜々として履踐す、一法を取らず一法を捨てず、當處に圓融して處々是れ三昧、塵々是れ祖師なり。而も勝解の心を留めず、專ら無人無我平等一相の大道を行ず。奉戒・持齋・精修・三業を純淨せしめて染なく、滴水滴凍乃至六度萬行一々圓通して大機を發し大用を啓く、展轉して一切の人をして此を信じ此に參じ、此を悟らしむ。須らく行解相應して愼んで因果を撥無し、濟々蕩々たる魔邪の見解を作すこと勿るべし、纔に此を作さば卽ち般若を謗じて卻つて惡報を招き去らん。所以に佛祖敎を垂るゝを、之を淸淨の明誨と謂ふ。當に須らく此の正因に依るべし、然る後當に妙果を證すべし。所有の一生の力量、正に死生を透脫せんことを要す。若し一念圓證して念々に修行して、無修を以て修し、無作にして作し、煉磨し將ち去りて、一切の境に於て執せず著せずんば、善惡の業緣に縛せられず、大解脫を得ん。百年の後に到りて翛然として獨脫す、前程明朗なれば、劫々生々自己に迷はず、便ち是れ千了百當なり。此れ皆言詮玄妙機境に落ちざる致を顯はす。當に冥心體究して塵勞を透徹して、淸淨の妙果を證せしむべし。

嘉仲賢良に示す

全心卽佛、全佛卽人、人佛無異にして始めて道と爲すべし。此れ諦實の言なり、但だ心眞なれば則ち人佛俱に眞なり。是の故に祖師惟だ直に人心を指して、見性成佛せしむ。此の心人々具足、無始より來た、淸淨無染にして初より取著せず、寂照凝然として了に能所なし。十成圓陁々地なりと雖も、只だ自性を守らず、妄りに一念を動ずるに緣つて、遂に無邊の知見を起して諸有に漂流す。根腳下恒常に此の本光を佩びて、未だ曾て ㋐曖昧ならざれども、根塵に於て枉げて纏縛を受く。若し能く宿根を蘊むもの、諸佛祖師直截に指示する處に遇ふて便ち底を倒して、膩脂袴襖を脫卻して赤條々淨倮々直下に承當す。外より來らず內より出でず、當下に廓然として明かに此の性を證す、更に何の人佛心とか說かん。紅爐上一點の雪を著くるが如し、何の處にか更に許多の忉怛か有らん。此の故に此の宗に文字語句を立せず、惟だ最上乘の根器の飄風の如くに疾く、雷電の如くに激し、星の飛ぶが如くにして脫體契證することを許す。生死の流を截り、無明の殼を破りて了に疑惑なし、直下に頓に明かなれば二六時中一切の事緣を轉じて、皆無上の

㋐曖昧。暗き貌。

妙智と成ず。豈に喧を厭ひ靜を求め、彼を棄て此を取ることを假らんや。一眞、一切眞、一了、一切了、萬有を心源に總ぶ、權機を方外に握る。物に應じて形を現ず、法として圓ならずと云ふこと無し。何ぞ我有らんや、須らく先づ自己の落著を定めんことを要す。立處既に硬糾々地なれば、自然に風行けば草偃す。所以に王老師十八上に便ち活計を作すを解す、香林四十年乃ち一片と成す。㊁塵勞の儔を如來の種と爲す、只だ當人善く自ら風を看て帆を使ふに在り、念々相續し心々住らず、此の長生路上に向つて行履せば、卽ち佛祖と同德同體同作同證なり。況んや百里の政併手頭に在り、民を安じ物を利して卽ち是れ自安し、萬化同じく此れ一機千差、並びに此れ一照刹塵法界を盡して以て融通す可し、何に況んや人佛異なること無きをや。

方清老に示す

老達磨㊂竺乾より來る、豈に嘗て一物を持せんや。梁に游び魏を歷て少林に面壁するに及んで、人の渠を識る無し。獨り可祖、効勤して雪に立ちて臂を斷つ、始めて略ぼ慈を垂る。此の卽心に由つて若し言なしと謂はゞ何に從つてか入る。如し言有りと謂はゞ伊に向つて何とか道はん。將に知んぬ、須らく是れ箇の人にして始めて十分に領略して乃ち滲漏なし。所以に此の門に入り來らば、是れ根器猛利にして、能く疾速に從前の知見解路を棄捨して、倚次を使ひて空勞々ならしめて、毫髮を留めざらんことを要す。洞照虛凝なれば、言思路絕えて直に本源に契ひて、泯然として無際なり。自ら本有無

㊁塵勞。維摩經佛道品に出づ、「一切煩惱皆是れ佛種なり云々。」と。
㊂竺乾。天竺といふこと。

得の妙致を得るを方に信及見徹と號す。猶ほ無量無邊難測難量の大機大用の有る在り。儻し些の能所を留めば、緣塵に墮在して則ち急卒に未だ便ち相應せず。是の故に古德勸めて、直下に休し去り歇し去らしむ。此の段は譬へば快くして鷹鷂の雲を捎り日を突き、風に迷ひ㊄箭を背ひて掀騰するが如し、直截にして擬議を容れず。苟し或は躊躇せば乃ち蹉過す。其れ敎外別行たること從つて知りぬ可し。既に是に志有らば、請ふ放下著して覩體に承當して、一切成現せば、則ち初祖曾て來らず、自己亦得ること無けん。

李宜父に示す

此の道最も徑要にして一言を出です。此の言佛口の宣ぶる所に非す、諸祖の道ふ所に非す、若し卽心非心卽佛非佛と謂はゞ、則ち舟を刻み株を守り了に交涉なし。若し嘿して此の言を識らば、豈に唇吻に墮ちんや。㊆塊を趂ふ流、遂に安りに卜度して、以て瞬揚擧動と爲す、未だ夢にだも見ざる在り。殊に知らず從上來の體裁步驟、且く是れ聰明を作し知見を立し、權實照用を論ずる境界にあらざることを。抑ふれども已むことを得ず、遂に雲頭を按下して棒喝交馳す。星の如くに飛び電の如くに擊つ。俊底は聊か聞いて卽ち落處を知る。且く畢竟して是れ那一言ぞ、是れ柏樹子、須彌山、露、㊇親、瞎、普、錯、俱、知なること莫しや。是れ擔板漢、勘破了、㊈喫茶

㊄箭。圜悟錄に透背に作る。
㊆趂塊。狂狗塊を趂ひ、師千人を齩む。(會元三)
㊇親。如何が是れ雲門の一路、師の曰く、親。
㊈喫茶珍重。百丈道恒道師、衆に上る、衆纔に集る、便ち曰く、「喫茶して去れ、」或る時は衆集る、便曰く、「珍重云々。」(會元十)

去、珍重、敢保す。老兄未徹在、歇し去れ參堂し去れと云ふこと莫しや、並に是れ依草附木の精魅なり。有る底は道ふ、「是れ也た祖師佛語心を以て宗と爲し、無門を法門と爲す。」と、便ち是れ錯りて定盤星を認む、直に須らく桶底子脫せんを待つて、睡夢の覺むるが如くにして大徹大悟すべし。然る後以て此の言を承當す可きなり。

韓通判に示す

要旨を透脫することは唯だ心を歇むるに在り、此の心知見生ずれば卽ち轉た遠し、直下に歇して無心の地に到りぬれば、虛閑寂靜にして萬變千轉すと雖も、外に非ず中に非ず了に相干らず。自然に騰騰任運して照應無方なり、便ち以て十二時を使ひ得て一切の法を用ひ得べし。根本廓然として彼我愛憎得失去來を形はさず。所謂猶ほ癡兀の人の如し。他家に自ら通人の愛するに有り。

張國太に示す

此の段の大因緣、乃佛乃祖特り行じ獨り唱へて、上乘の利根明敏の士を接す。情を超え見を離れ、機關を覺えて活卓々地に透漏して、未だ擧げざるに先づ諳じ、未だ言はざるに先づ領するを要す。纔に朕兆あれば一剪に剪斷す、直下に他事を明めず、終に意根下に向つて尋思せず、須らく精神を打辨して當陽に擔負して、太虛の日輪の幽として燭さずと云ふこと無きが如くならんことを要す。所以に從上の古德、單提の處に到りて毫髮を容れず、編撥し將去りて淨裸々赤灑々として、萬法と侶たらず、千聖と鄙を同じうせず、獨脫超昇して自由自在にし去らしむ。是の故に德山、臨濟、棒喝交馳す、出沒縱擒窠臼に在らず、言語機用に至るまで一時に坐斷して、聖凡路絕え、得失情遣り大休歇の場に到る。更に何を喚んでか生死と作さん。何次等閑にして照も亦立せず、緣に遇ふて卽宗拈得出で來りて、天を蓋ひ地を蓋ふ。慈悲方便に據りて草に落ちて商量す、正に利根の人をして妄緣惡覺知見を撥去せんことを要す。空々の處に徹して空々も亦存せず。心太虛の如し、森羅萬象包含印定せずと云ふこと無し。頭々處々大解脫を得るを、乃ち了事底の人と名く、亦尙ほ未だ向上の行履を當得せず。若し向上の行履を論ぜば千聖密傳の處なり、豈に止だ壁立萬仞にして千里萬里を隔つるのみならんや。盡大地拈じ來るに、未だ一塵許も有らず、是を大用現前すと謂ふ。三十二十年長養純熟して、便乃ち契證せん。

卽心卽佛已に是れ八字に打開す、非心非佛重ねて當陽に向つて點破す。其の言を尋ねず一直に便ち透らば、方に古人の赤心片々たることを見ん。若し也た踟躕せば當面に蹉過せん。

萬法と侶たらざる底は是れ何人ぞ、儞が一口に西江水を吸盡せんを待つて、儞に向つて道はん、多少徑截省要なり、何ぞ便ち與麼に承當せざる、更に它の語言の中に入らば、則ち永く透脫せざらん。多く學者を見るに、只麼に卜度下語して合頭を求めんことを要す、此れ豈に是の生死を透る見解ならんや。生死を透らんと要せば、心地開通するを除非す、此れ箇の公案乃ち是れ心地を開く鑰匙子なり。

只だ明了して言外に旨を領じて、始めて無疑の地に到らんことを要す。

昔㊀修山主、地藏に見えんことを要し、自ら陳ぶ。「此の番來りて和尙に見ゆ、許多の山川を經涉す、極めて是れ辛苦なり。」地藏指して云く、「許多の山川汝が與めに惡からず、渠れ便ち桶底子脫し去る。此くの似きんば豈に多言を假らんや。道途の間も也た須らく保任して始めて得べし。」

㊂張子固に示す

大道無方なり、惟だ是れ利根の種性一聞千悟す、外より起るにあらず、內より得るにあらず、脫然として湯の冰を消すが如し、初より得喪なし。蓋し此の生佛未だ分れざる巳前に、廓徹明妙にして了に依倚なく、卓然として獨り存す。但だ一念、緣を逐ふて此の眞體に背く、遂に如許の不相應の事業を生ず、㊁熠々地に飄流して趣くも停息すること無し。境を取ること既に熟して、心源混濁す。習以て常となす、見聞皆聲色を出でず、只だ迷妄を以て自ら縛す。大解脫を體究せんとするに至るに及んで、渺々茫々として涯際を知ること莫し、識浪滔々として未だ嘗て趣くも住らず、故に造入するに由なし、而も復た宿昔薰炙片善有りて、喜樂諦信して其の所を求めんことを要す。乃ち是れ上善なり、伏膺參叩に逗到して卻つて黑漫々地にして它無し。只だ是れ拋離すること久しうして、純熟せざること乃ち爾り。如今直截に承當せんと要せば、但だ身心を辨著して冥然として、寂を叩き心機を喪卻して、一へに土木の如くにして、渠が時節到來を待つて、翛然として自ら桶底子脫して此の本光に契ひ、此の湛々澄々不變不動、淸淨無爲妙淨明の性を了らん。

蔕を固くし根を深うして金剛堅固の正體に到りて、全身擔荷して行ずることを得、然る後方に萬別千差悉く一致に歸す可し。動と靜と一如に、心と境と俱に合すれば、則ち一明、一切明、一了、一切了、箇の須彌山を擧げ、箇の底、前柏樹子と道ふ。一切の機境豈に他に從ひ發せんや。棒を行じ喝を下し、杈を擊げ、毬を輒ずるに至るまで、一々に印定せずと云ふこと無し。生死涅槃猶ほ昨夢の如く、自然に泰定安閑にして休歇の處を得たり、更に何をか疑はん。用ひんと要せば便ち用ひ、道はんと要せば便ち道ふ、飯に遇ふては飯を喫し、茶に遇ふては茶を喫し、平常の心に契ひて佛見法見を起さず、佛見法見すら尙ほ乃ち起さず、何に況んや造業の心を起し不善の意を發せんや、終に此の態度を作して因果を撥無せず。是に由つて得坐披衣調御降伏して無心と相應ず、乃ち是れ究竟落著の地なり。永嘉の道く、「但だ自ら懷中に垢衣を解け。」巖頭の道く、「只だ閑々地を守れ。」雲居の道く、「千萬人の中に處すとも一人も無きが如く相似たり。」曹山の道く、「蠱毒の鄉を經るが如し。」と、水も也た它の一滴に沾ふことを得ず、之を聖胎を長養すと謂ひ、之を染汚すること卽ち得ずと謂ふ。直に須らく從前解を作せし一切淨穢の二邊の像を放下卻して、行住坐臥悉心體究すべし、乃ち自著底の力なり。它人より授けらるゝに非ず、乃ち是れ從上古德の捷徑なり。

㊀修山主。傳燈廿四に出づ、龍濟山主紹修禪師、羅漢琛に嗣ぐ。

㊁張子固。張確、字は子固。(萬姓統譜三十九)

㊂熠々。楞嚴經十、猶ほ野馬の熠々淸擾たるが如し、熠々は光起閃爍生滅に喩ふる也。

元賓に示す

佛祖の大因緣は、名字語言知見解路を以て聰明を作し、思惟を起して了ずる所に非ず、懷を忘じ緣を忘じて、外諸相を空じ、內識情を脫せんことを要す。退いて淸虛安閑を守り、澄徹洞然として諸の方便を超えて、直に本來の妙心に透る。古に亙り今に亙りて湛然として動せず、萬年一念、一念萬年にして永く滲漏なき謫當の地なり。一得、永得、變異有ること無し。乃ち之を直指人心見性成佛と謂ふ。然も此の上の所說の如き、尙ほ是れ理論なり、言を以て言を遣り、理を以て理を會し、人をして漸く趣向有らしむ。從前入理の蹊徑と爲す、泥を拖き水を涉る廉纖の論なり、眞實に提撕するに至るに及んで、何ぞ是くの如くの周遮有らん。是の故に靈山、拈華すれば迦葉乃ち笑ふ、是の中、豈に毫髮も說く底の道理を容る可けんや。須らく頂に透り底に透りて、盡大千刹海一擧に便ち透り、悉く落處を知りて、方に從上來行ずる所の正令を諳悉せんことを要す。德山の棒、臨濟の喝、豈に小兒の戲ならんや。若し本分作家の手段を具せば一箭を須ひず、所以に龐老、石頭、馬祖に問ふ、「萬法と侶たらざる是れ何人ぞ。」石頭其の口を掩ふ、而して馬祖の道く、「儞が一口に西江水を吸盡せんを待つて、卽ち儞に向つて道はん」と。豈に二端ならんや、其の至趣を鞠むるに、同じく是れ泥に入り水に入る、安んぞ高下淺深す可けんや。之れ箇の裏に到りて直に須らく有ることを知るべし、既に有ることを知らば、更に須らく轉じ去りて始めて得べし。切に忌む、死語を守りて窠窟に墮することを。纔に一毫芒の能所作用玄妙理性見刺有りて人を刺さば、卒に未だ撥剔し得下さじ。作麼生か死生を透脫し、安樂無爲不動の境界を證し去らん。古人履踐一門を重す、得坐披衣向後自ら看よと云ふは是なり。切に須らく管帶して力を得せしめば乃ち善し。

古の賢達大根器を具して能く自ら證明し、又能く力めて之を行ふ、嘆んで二夫を作すと做す。長時に只だ自己の起心動念を覷て、纔に毫髮も有れば、卽ち及め淨盡せしむ。終に一種の事業を作し、談柄を資けて人に勝らんことを期して人を伏し、知見を長じ能を作し、勝を作して聲名を圖らんことを用ひず。實頭に只だ死生大事百劫千生味からず、陷墜せざらんが爲にす。

古來大いに眉毛を惜まず、人の爲に指出する處有り。雲門は ㉔ 覩體全眞と云ひ、臨濟は報化佛頭を坐斷すと云ひ、德山は心を無事にす。心に於て無事なれば、則ち虛にして靈に寂にして照なり。巖頭は只だ閑々地を守る。一切の時中無欲無依なれば自然に諸三昧を超ゆ。趙州の道く、「我れ百千箇の漢子を見るに、只だ是れ作佛を覺むる底、中間箇の無心の道人を覺むるに得難し。但だ熟く其の言を味ひて心を休めて履踐せよ、它時異日、境に逢ひ緣に遇ふて乃ち力を得ん。要すらく當に愼護して滲漏せしむること勿るべし。」と、乃ち祕訣なり。

表相國、黃檗に見えて言下に契證有り、更に爲に傳心の祕要を發揮して再三叮嚀にす、限量なき慈

㉔ 覩體全眞。他の古聖奈何ともすることなし、橫身を物と爲す、道箇體を擧げて全眞物々覩體得べからず、云々。（會元十五）

悲なり。于頔襄陽紫玉に參ず、一たび喚べば便ち頭を回らす、重ねて爲に黑風船を飄して羅刹國に墮することを指すに、方に渙然たることを得たり。古より士流此の事を肯重して、寢を廢し餐を忘れて直下に見諦する者勝げて數ふべからず。皆當人根力智見高明爽快にして、然る後能く訪尋決擇するに由る。今既に古と儻たり、尤も宜しく力め行ひて退せざるべし。深證深入を圖る、只だ口頭の語言を尙むこと勿れ、必ず心々をして物に觸れず、頭々處所無からしめて始めて得べし。

此の道は單提獨證して、祖佛向上の機と契合せんことを貴ぶ。高く心源に出で、擊石火閃電光の如く、擬議尋伺を容れず、直下に便ち透りて意根情想に落ちず。以至理を說き性を說き、機境語句の中に於て窠窟を作し、解會を立て、遞互に傳持して唯心と說き、地水火風を融し、虛空を以て量と爲して、喚んで根塵卞事を透ると作す。只だ理論を成して敎家㋒三乘五性を出でず、權に階梯を立するを返つて鈍置と成す。當に須らく未だ佛祖有らざる已前の箇の片田地、何れの處よりか來ることを了取すべし。纔に纖毫も所得有る有れば、乃ち是れ相似の般若なり、應に深く辨別すべし。塵機に墮すること勿れ、臘月三十日に到りて理地明めず、斷割し去らずんば、那時惶惶繆亂して悔ゆとも及ぶべからず。五祖老師常に學徒に示す、須らく臨命終の時の禪に參ずべし。此れ小事に非ず、設使ひ聰明辯惠にして、八達七通纖洪の理論絲の如くに來り線の如くに去るも、識學の㋓詮文を出でず、

㋒三乘五性。三乘は聲聞、緣覺、菩薩なり。五性は三乘に不定、闡提の二性を加へしもの。
㋓詮。揮言也。

正に是れ骨董と打つて究竟して截斷の處なし。所以に從上の古德大有道の宗師、利根上智奇特の士を與にす。陸亘大夫、王敬常侍、裴相國、㋔甘贊道人、陳操尙書、㋕崔群、李翺、㋖杜鴻漸、龐老、李勃于頔、本朝楊內翰大年、李附馬の諸人の如きは、頤を探り體究し、八面玲瓏にして、脚實地を蹋む處有らずと云ふこと莫し。而して能く人の作し難き所を作し、人の行じ難き所を行す、內外護と爲して大法海中に於て津濟する帳樣なり。虛しく南閻浮提に出でて一遭せず、古人既に爾り、今豈に只だ尋常を守り、以て自己死生の大事及び道妙を洪持するを至要とせざらんや。放た諸塵緣境に牽惹纏縛せられ、名言句數に籠羅せられて、出格の作向上の眼目大解脫の機無からしむ、惜しむ可しと爲す。大丈夫の漢已に能く面皮を打破して參請す、應に須らく通身是れ眼にして幻緣を照破し、金剛の寶劍を以て愛網を截斷すべし。士流に在りて宰官の身を現ずと雖も、筆頭の上に好く方便を作し、指揮する處に好く祖令を行じて、一切の聞見をして皆因果を知らしめ俱に起倒を識らしむ。便ち是れ古と儻たるなり。

末後の一句、始めて牢關に到る要津を把斷して凡聖を通ぜず。咄、只管草に落ち眼を開き夢を作す可からず、須らく頂額の上に向つて施展して始めて得べし。

曾少尹に示す

㋔甘贊。甘贊行者、南泉に嗣ぐ、傳燈十。
㋕崔群。崔相國なり。（類聚二）
㋖杜鴻漸。漸初め巴蜀を按撫し、無住禪師を請ひ、城に入りて法を問ふ云々。（佛法金湯編）

佛祖の妙道は唯だ各人根本の上に在り、實に本淨妙明無爲無事の心を出でず、久しく誠を存すと雖も未だ能く諦實ならざることは、蓋し無始の聰利智性多く作爲して之を汨らせばなり。但だ此の心をして虛閑寂靜ならしめて、悠久に湛々如々にして不變不易ならば、必ず大安穩快樂の期有らん。患ふる所は休歇することを得ずして、外に向つて覓めて聰明を作すなり。殊に知らず、本有の性金剛の堅固なるが如く鎭長に只だ在り、未だ曾て斯須くも間斷せず。若し消歇すること久しければ、驀地に桶底子の脫するが如く自然に安樂なり。若し善知識を求めて廣く持論せんと要せば、則ち轉た遠し。惟だ是れ猛利の根性猛く、自ら割斷し猛く、自ら棄捨して當に證入有りて自ら之を知るべし。既に之を知りて後知も亦立せず、始めて眞淨の境界に造る。公道契の外を以ての故に强ひて之を言ふ、之を區域の表に照す可し。

蔣待制に示す

此の段の事、天人群生より佛祖に至るまで皆威力を承く。但だ惟みれば群靈此を蘊むと雖も、而も冥味して枉げて沈溺を受く。佛祖は此に達して超證す、迷悟殊なりと雖も其の不思議一なり。是の故に佛祖開示直指して、一切を含靈して各々獨り自己本來圓具する淸淨妙明の眞心を了せしめすと云ふこと莫し。更に如許の塵勞妄想計念知見を留めず、直に五蘊の身田に向つて回光返照すれば湛寂如々なり。廓爾として承當せば明かに此の正性を見ん。此の性卽心此の心卽性、浩々たる作爲、六根門頭に應在す、千變萬化初より搖動せず、故に常住の本源と號す。若し此の本に達すれば、力用所作透徹せずと云ふこと無し、須らく是れ流を截りて證す。若し踟躕動念せば則ち交涉沒し、唯だ是れ當人の根性、素より來かた純靜深沈なれば、最も力むることを爲し易しと爲す。只だ略ぼ返照して一たび透らば便ち證入す可し。古人此を謂つて無盡藏と爲す、亦如意珠と名け、亦金剛寶劍と號す。要すらくは深く信根を具して、此れ他に從つて得ずと云ふことを信ずべし。行住坐臥神を凝して寂照し、淨裸々地、無間無斷せば自然に諸見生せず、此の正體に契して不生不滅、有に非ず無に非ず、實無く虛無く、名を離れ相を離る、卽ち是れ當人本地の風光本來の面目なり。古德所以に揚眉瞬目槌を拈じ拂を豎て杖を行じ喝を行ず。微言妙句百千億の方便、人をして此に向つて透脫せしめずと云ふこと無し。一たび纔に透得しつれば便ち深く源に徹す、門を敲く兎子を棄卻して、丁に毫髮も情に當る無し。三十二十年中に於て履踐し、路布葛藤閑機破境を截斷して、翛然として無心なれば、乃ち安樂の歇場なり。所以に道く、「卽今休し去らば便ち休し去れ、若し丁時を覓めば丁時なし。」

摩竭に室を掩ひ毘耶に詞を杜づ、人皆以て極致と爲す、殊に未だ夢にだも渠が脚指頭を見ざるに在り。大人大見大智大用、豈に格量に拘はらんや、直に是れ痛的々地なり。恨むらくは兩手に分付せざることを。那ぞ淺深得失彼我現量を論じて、紛紜として和泥合水せんや。且く佛未だ出世せず、祖師未だ來らず、世界未だ成らず、虛空未だ現せざるが如くんば、何處に向つて捫摸せん。須らく機心を

喪卻し知見を死卻し、世智辯聰を脱去せんことを要す。放下して直に枯木朽株の如くに相似て、驀地に體得して氣息を絶する處に到りて、淡然として懐を忘し、萬年一念將養保衛し、久々純熟して子細に返觀せば、便ち摩竭淨名の來脈を諳じ得ん。

㊐趙州寂を示すに臨んで、一柄の拂子を封じて送りて鎭府大王に與へて云く、「此れは是れ老僧一生用不盡底なり。其の高識遠見を原ぬるに、豈に人をして相に滯り言に執し、葛藤に縛せしめんや。唯だ直に了證すれば則ち活鱍々として群を出づる作略有り、乃ち能く擔負して、水を水に入るが如く、金を金に博ふるに似たり。」

襄陽郡の將㊅王常侍、潙山の大圓に參じ旨を得たり。一日僧有り、潙山より來る、常侍問ふ、「山頭の老漢何の言句か有りし。」僧の云く、「人如何なるか是れ祖師西來意と問へば、潙山拂を豎起す。」常侍の云く、「山中如何んか領解する。」僧の云く、「山中商較して卽色明心、附物顯理。」侍の云く、「會せば便ち會せよ、何の死急にか著かん。汝速かに回り去れ。」と、書有り、老師に與へんことを待ちて、僧書を馳せて回る。潙山拆き見るに、一圓相を畫いて、中に於て箇の日の字を書す、潙山呵々大笑す。云く、「誰か知る、吾が千里の外に箇の知音有ることを。」仰山云く、「也た只だ未だしきこと在り。」潙山の云く、「子又た作麼生。」仰山地上に於て一圓相を畫いて箇の日の字を書いて、脚を以て之を抹して去る。他の得底の人の步驟趣向を看るに、豈

㊐趙州示寂。會元四に出でたり。
㊅王常侍。類聚七に出でたり。

に窠窟を守らんや。則ち箇の裏に若し善く其の變を見ば、則ち能く其の心を原ぬん。既に能く其の㊀心を原ねば則ち自由の分有らん。既に自由の分有らば則ち他に隨つて去らじ、既に他に隨つて去らんば何くに往くとしてか自得せざらんや。士大夫を接する毎に多く塵事縈絆して未だ此を及むるに暇あらず。稍や撥剔し了るを待つて、然る後心を存して體究せんと言ふ。此れ誠實の言なりと雖も、然も一往久しく塵事の中に在りて、只だ塵勞を以て務と爲して、頭出頭沒爛骨董地に熟し了る。只だ喚んで塵事と作す、更に塵緣を撥卻するを待つて、方に趣入す可くんば、其の所謂終日行ずれども未だ嘗て行せず、終日用て未だ嘗て用ひず、豈に是れ塵勞の外別に此の一段の大因緣有らんや。殊に知らず、大寶聚の上に大寶光を放つて、天を輝し地を焯すことを。自ら省悟承當せずして、更に去りて外に求めば、轉た辛勤を益さん、豈に至要と爲んや。若し大根器を具せば必ずしも古人の言句公案を看ざれ、但只だ朝に起るより念を正卻し心を正卻せよ。凡そ指呼する所作爲する一番、作爲一番にして再び更に提起審詳して看よ、何の處より起る、是れ箇の何物か作爲し得たる。許多當塵緣中一透するが如きは、一切の諸緣皆是ならずと云ふこと靡し、何ぞ撥剔することを待たん。此に卽いて便ち宗を超え格を越えば、㊆三界火宅の中に於て、便ち化して淸淨無爲淸凉の大道場を成す。法華に云く、「佛子此の地に住す、卽ち是れ佛受用經行及び坐臥常に其の中に在り。」と。

㊀原心。本原を推論することを謂ふ。
㊆三界火宅。三界は安きことなし、猶ほ火宅の如し。（法華經譬喩品）

寧禪人に示す

㋑死生の變亦大なるかな、衲僧家報化佛頭を坐斷して纖毫の知見を立せず、直下に透脫して、萬年一念、一念萬年、死々生々、生々死々、一片に打成して、毫末の起滅輪轉を見ざらんことを要す。所以に道く、「任ひ是れ千聖出頭し來るも、終に是れ渠が影中に向つて現せん。」試に問ふ、「渠が正體何の形段をか作す。」須らく知るべし、空劫已前も他に由つて建立す、華藏浮幢王刹盡未來際を窮むるに至るまで、亦他に因つて成就することを。若し是れ上根利智は無始劫來、虛妄染汚聖凡情量を脫卻して腳根下に向つて猛省して、直に透りて一切の依倚聞見、覺知色聲、味觸を棄捨して、紅爐上に點雪を著くるが如し。灑然淨盡す、無量の珍寶中に於て運出し、無邊の勝相中に於て顯現す。亦本心に於て初より彼我是非、勝負欣厭なし。便ち本來と無二無別なり、更に何を喚んでか生死と作し、何を喚んでか小大と作さん。冥然岑寂にして大安穩を得、始めて知んぬ從來曾て喪失せず、亦缺少せざることを。豈に見ずや石頭藥山に問ふ、「汝此に在りて何をか作す。」山云く、「一物を爲さず。」頭云く、「恁麼ならば卽ち閑坐し去る也。」山云く、「閑坐せば卽ち爲す也。」頭云く、「汝爲さずと道ふ、爲さざるは箇の何ぞ。」山云く、「千聖も亦識らず。」石頭乃ち頌有り、「從來共に住して名を知らず、任運に相將て只麼に行く、古自り上賢尤も識らず、造次の凡流豈に明む可けんや。」と、渠が師資踐履趣向、此くの如くなるを看るに、是れ本分の事にあらざる可んや。既に參問を圖る、宜しく追慕して古風をして墮らざらしむべし。乃ち自己行腳の事辨せんなり。

㋑死生。仲尼曰く、「死生も亦大なる矣。」と、吾宗に「生死事大」と。

勝上人に示す

大道體寬にして無易無難なり、小見狐疑轉た急なれば轉た遲し。若し大道體寬きに達せば廓然大虛空に同じ。懷を放ち曠蕩す、觸處皆眞なり、限量に拘らず何の難易か有らん。手に信せて拈じ來りて天を蓋ひ地を蓋ふ、十虛を含育して相を作らず。若し纔に毫毛の知見解礙を作せば、則ち知見に墮して究徹し及ばず、返つて狐疑を生ず。所以に此の道は大根利器の直下に承當せんことを務む、脫然として惺悟すれば便ち休す、更に限量知見を作せず。萬別千差一劍に截斷して等閑に勝負を立せず、惟だ退藏を務む。兀に似て癡の如く、孤運獨照し融通㋺溶合して、密々綿々佛眼も亦覷れども見えず、況んや魔外をや。長養成就して自然に心に入り髓に入るの功あり、便ち根塵違順死生に於て、亦咬得斷じて終に疑著せず、此れ乃ち無心無爲、無事大解脫の境界なり。既に然も此の勝流に預らんことを圖欲す、當に須らく切々孜々として身心を放下して、體究すべし。一句一機一境の上に發明悟入しぬれば、無量無數の作用、公案一時に穿透す、纔に拈得し來れば更に放過せず、便ち與めに截斷せば、豈に快ならざらんや。

㋺溶合。合口也。

琛上人に示す

僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」と、妨げず省力なることを。

如今參問の士、性識昏昧にして只管語言の上に去りて咬む、了に柰何ともせざるに至りて、下梢㋣合殺無くして、遂に滿肚に疑を懷く。多く異見異解を作して本分の事を蹉卻す。殊に知らず、言語の上に在らず、又事物の邊に在らざることを。擊石火、閃電光の如し、略ぼ風規を露す。纔に承當せんと擬せば、早く二三に落つ。若し直截に要せば應に須らく步を退いて、己に就いて狂心を歇卻し知見解碍をして、都盧て淨盡せしむべし。時節緣熟せば瞥然明證せんこと、亦難しとせじ。恁くの似きの說話早く葛藤にし了れり。且く㋬死馬鑒の會を作す、當に趣入の處有るべし。但だ一則の公案の上、頂に透り底に透りて信得及して、無疑の地に到りぬれば、㋭餉間に千種萬端、頭を改め面を換へて、長句短句、多句少句、有句無句、一時に透脫す、豈に兩種有らんや。所謂直指人心、見性成佛、一得永得、自ら寶藏に據り、自家の財を運ぶ、受用豈に窮極有らんや。見ずや德山龍潭に在りて紙燭を吹いて豁然として瞥地なり。便ち道く、「今日より去りて天下の老和尙の舌頭を疑はず」と。後來住山風に打ち雨に打つ、妨げず㋮性懆なることを。但だ恁麼に參じ、但だ恁麼に證し、恁麼に用ひ、肯心を辨取せば必ずしも相賺らじ。

英上人に示す

道妙は至簡至易なりと。誠なるかな此の言、未だ其の源に達せざる者は以謂へらく、至淵至奧にして空劫以前、混沌未だ分れず、天地未だ成立せざるに在りて、杳冥㋯恍惚窮むべからず、究むべからず、詰るべからず。唯だ聖人のみ能く證して能く知ると。是の故に其の言を誠として其の歸趣を識らず、安んぞ以て此の事を語る可けんや。殊に知らず、人人根腳下に圓成して、只だ日用の中淨裸々地一切の機に被らしめ、一切の處に徧くして幽として燭さざるなく、時として用ひざる無きことを。但だ背馳すること既に久しうして、强ひて枝節を生ずるを以て肯て自ら信せず、一向に外に覓む。所以に轉た覓むれば轉た遠し。是の故に達磨西來して唯だ直指人心と言ふのみ。此の心卽ち平常無事の心なり。天機自ら張りて拘無く執無く、住靡く著靡し、天地と德を齊しうし日月と明を合し、鬼神と吉凶を同じうす、毫髮の見刺を立すべき無し。唯だ蕩然として大きに通じ、無心無爲無事に契合す。若し纖芥の能所彼我を立せば、卽ち隔礙して永く通透せじ。所謂無明の實性卽佛性、幻化の空身卽法身なり。若し能く無明殼子裏に實性を證得せば、餉間に無明の全體一時に發揮し、幻化の空身の窠窟の中に法身を見ば、餉間に空身の全體都盧て瑩徹せん。第だ恐らくは無明空身の中に於て、作爲して見を立せんことを、則ら沒交涉なり。既に此の正體に透りぬれば無明空身、別の發明なし。則ち一切の萬有・大地・山河・明暗・色空・四聖六凡、皆外物に非ず、眞實に諦當すれば則ち二六時中大方外なし。何の處か自己の身心を放下する處ならざらん。豈に見ずや、古者の道く、「塵勞の儔、如來の種と爲す、身の實相を觀るが如く佛を觀るも亦然り。」と、然

㋣合殺。俗話にて、了畢の義なり。
㋬死馬鑒。沒相手、やくにたゝぬの義。
㋭餉間。猶ほ食頃と言ふが如し。
㋮性懆。性怏といふ義。
㋯恍惚。微妙不測の貌。

る後世法佛法一片に打成す、等閑に喫飯著衣卽ち是れ大機大用なり。則ち棒を行じ、喝を行ず、百千の作爲機境、豈に更に疑著せんや。若し此に達せば自らの腳跟下、至簡至易の道妙なり。無量の法門一時に開現して生死を透脫し、勝妙の果を成さんこと、豈に難きこと有らんや。

圓上人に示す

古來有志の士、既に頂相を圓にして卽ち方を超えて道を訪ふ。誠に一身を以て虛しく閻浮提に來りて打一遭せず。所以に意を刻して心を息めて、眞正頂門の宗眼を具する知識を擇んで、複子を放下して靠取成辨す。其の跂步を觀るに、眞の龍象なり。今旣に大因緣に趣向する志を蘊む、要すらくは當に形壽を盡して專一堅確にして、餐を忘じ寢を廢して辛勤を憚らず、勞に効ひ苦を忍ぶべし。若し體究すること攸久なれば自ら信入の處有る耳。況んや此の一段の因緣、自己の分上、元本より圓成して未だ嘗て缺闕せず、佛祖と殊なること無し。但だ知を起し見を作すを以て、强ひて節目を生じて、情執虛僞直下に實證すること能はず。若し宿植の根性、敏利にして一念不生なれば、頓に二十五有を超えて、自己本有如々の妙性を圓證して、更に毫髮許の能所彼我を生せず、廓然として大に達しぬれば、凡聖平等にして彼我如々たり。是れ佛なれば更に佛を覓めず、心に於て初より心を求めず、佛心無二至る所に現成す。二六時中更に虛僞に落ちず、便乃ち腳實地を蹋んで自己の庫藏を打開し、自己の家財を運出す。所に隨ひ機を發して、悉く宗格を超えて透得して眞實活潑々地なり。德山、臨濟雲門、玄沙、難測難量の妙機を施すに遇ふと雖も、一箭を消せず、所謂虛の多からんよりは實の少きには如かず、但だ最初發心猛利ならしめて移らず、相續徹頭の處に到りて、自己道業の辨せざるを憂へず、大丈夫の兒は須らく向上の大機大用を了卻せば、安穩快樂にして始めて是れ泊頭の時なるべし、切に少了すること勿れ、切に宜しく久遠に業々兢々として自然に得べし、豈に解脫し去らざらんや。

照禪人に示す

石霜三十年、一張の弓、兩隻の箭を以て只だ半箇の人を射得たり。何としてか全く去らざる、蓋し是の中豈に此くの如くなることを容す可けん。何が故ぞ、道ふことを見ずや、向上の一路千聖不傳と。若し不傳の意を體得せば則ち底裏を盡すべし。直に此の事を言はゞ儞が心機を用ふる處なく、儞が湊泊、存坐の處なし。是の故に從上來唯だ是れ特唱直指して、人の格外に玄悟して泥水を拖かず、塵緣に墮せざることを要す。所以に道く、他の上流は聊か擧著するを聞いて剔起して便ち行く、萬機も他を收め著ず、千聖も他を籠羅し住めず。是くの如く參究證入することを要すべし、是くの如く提撥擧唱せんことを要すべし、豈に懵底を論せんや。箇々須らく眼流星に似て、人を殺すに眼を眨せずして、始めて相應することを得つべし。若し踟躕凝佇せば則ち蹉卻すること千萬にして了る。此の一至寶の地有り、乃ち以て萬差を建立す可し。儻し眞實恁くの如くの處に到らば、終に揑恠して相を作し樣を畫き摸を起さず、只だ閑々を守る、尙ほ不可得なり。己を立して透脫し、物の爲に黏を解き縛を去るに

至りて、皆是れ踞地の時節にあらざること無し。臨濟の道く、「山僧が見處、諸人共に知らんことを要す、直下に報化佛頭を坐斷す。」と、此の垂示に據らば既に報化佛に坐す、向上に更に箇の何か有らん、豈に是れ世間麁想の度る所ならん。須らく從前の妄想・計較・執着・情塵・勝劣・見解を打拆して、明かに性理を辨ぜんことを要す。終に本分に非ず、一刀に截卻して直に得たり、脫然として自得することを。毫末許の如きも盡十方界の塵、包攝せざること無し。全作用是れ佛祖、全佛祖是れ作用なり。一棒一喝一句一機並に窠窟なし。一切實證を以て之を印するに、靈藥を鐵に點じて金と成すが如し、皆我に從つて轉せずと云ふこと無し。既に久しく參問すとも、多く知見解路を作して、只だ多聞を益す、終に實事に非ず。須らく一喝一切喝、一了一切了にして、此の本來の面目を見、此の本地の風光に達すべし。然る後作爲すれば一切成現す。心力を假らず、風の草を偃すが如し。山林城市と雖も亦二種なきを喚んで、把得住作得主と作す。含生の命脈を權衡して、自らの手中に在りて心意に隨ふ、何の判斷をか作さん。便ち之を無用の道と謂ふ、豈に至要至妙、安穩大解脫に非ずや。

鑑上人に示す

祖師、門下本分の提綱、一句、流を截つて萬機寢削するも、已に是れ廉纖に涉り了る。何に況んや言上に言を生じ、機上に機を生じ、許多の一堆擔の葛藤を窮考して心田を汙卻せんをや、何の了期か有らん。此の事若し言句機境の上に在らば、盡く聰明解會浮根虛識の者に事業を學ふが如くに一般にして違將し去られ了る、豈に更に發悟見性を論ぜんや。釋迦佛、一周無窮の奇特勝妙を出現す、尙ほ只だ曲げて時緣の爲にすと道ふ、末梢に至りて始めて此の印を密付す。達磨老師少林に冷坐す、獨り可祖のみ有りて承當し得たり。故に之を敎外別行單傳心印と謂ふ。只だ此の印の如きは、且く如何か傳へん。是れ揚眉瞬目すること莫しや、是れ拂を擧げ床を敲くこと莫しや、是れ摠て言說なく、只だ行住動用を以てすること莫しや、是れ摠て不與麽に便ち承當すること莫しや、是れ向上向下面前背後、別に奇特有る莫しや、是れ道理を以て性を論じ、深く淵源に入ること莫しや。此に似て正に棒を掉げて月を打たんとするが如し、何の交涉か有らん。將に知んぬ、世間の龜浮、淺識の料る所に非ざることを。須らく龍象の蹴躡の如く、直拔超昇、大徹大證して始めて得ることを要す。一等に參請して須らく透り去らしむべし。只だ窠窟を守住すること莫れ、唯だ自ら賺るのみにあらず、亦乃ち人を累す。所以に從上來作家の宗師、此の一段を仰重して輕しく分付せず、輕しく印可せず。見すや、永嘉道く、「骨を粉にし、身を碎くも、未だ酬ゆるに足らず。」と、一句了然として百億を超ゆ。

祕魔巖生只だ一木杈を持して、人を見て便ち道ふ、「何の魔魅か儞をして出家せしむ、何の魔魅か儞をして行脚せしむ、道ひ得るも杈下に死せしめん、道ひ得ざるも杈下に死せしめん。」と、其の一場を原ぬるに豈に是れ虛設ならんや。蓋し草に入りて人を求むるのみ。若し是れ有ることを知る底は、豈に多端有らんや、縱に紛紜に涉れば卽ち千里萬里なり。金剛圈を跳得し、栗棘蓬を呑得し、自然に落

處を知らん。

此の宗の省要は唯だ是れ意を休し、心を休して直に枯木朽株の如く、冷湫々地ならしむ。根塵偶ならず、動靜對を絶す、根腳下空勞々として它を安排存坐する處なし、脫然として虛凝なり。所謂人無心にして道に合ひ、道無心にして人に合ふ、物に應じ緣に隨ふに至りて、異見を生ぜず、只だ現定の一機一境に據りて悉く是れ坐斷す、更に何の棒喝照用權實とか說かん。一擬便ち透りて唯だ我れ能く知る、更に餘事なし、長時に此くの如く履踐せば、何ぞ本分の事、辨せざることを憂へんや。

祖上人に示す

如祖上人、德山より來る、久しく此の段を以て務と爲す。蔣山の佛果に見ゆ、何ぞ曾て兩種の佛法有らん、若し擔帶し來らば是れ敗闕を納る、擔帶し來らずんば須らく轉身の處を知りて始めて得べし。如今時の衲子到る處の叢林に宗匠有り、咨參せずと云ふこと莫し。然も一實證して本分の田地に到りて、大休大歇、安穩の場を得るを求むるに、實に其の人を難しとす。大丈夫兒已に能く是れ鄉を拋ち井を離れて、本分尊宿の身邊に在りて、又能く効勤して力を ㋐戮せて種種の緣を作す、皆分外に非ず、亦以て行腳を昧さゞるに足れり。然も諦實なるに至りては從上來の事有ることを知ることを要須す。且く從上來列祖相承して、德山臨濟に至るまで棒を行じ喝を行じ、千萬種の方便を作すに、至竟して人の何を爲すことを要する、應に順らく香象の河を渡るに似て、流を截つて過ぎ、了に疑礙無かるべし。尙ほ從上來の事に稱はず、道人家相逢ひて拈出せず、石人頭を ㋐棒打し、卷子の上に向つて東を指し西を畫き去る可からず、只だ此れ已に是れ漏逗了れり。德山に歸りて堂頭に擧似して、看よ它如何が儞が爲めに證據せん。

㋐戮力。戮は併力なり。

宴禪人に示す

歸宗、僧有りて來別す、宗の云く、「儞但だ去れ、束裝して行に臨んで來れ、汝が爲めに一上の佛法を說かん。」と、其の僧言の如く再び方丈に上るに至るに及んで、歸宗の云く、「時寒し、塗中善く爲せ。」と。歸宗渠に佛法を說くことを滿許す、其の僧心を虛しくして未だ聞かざる所を聞かんと欲す。而して歸宗乃ち爾り須らく知るべし、它の古德此の事に於て綿密無間なることを。若し喚んで佛法と作さば早や是れ毒藥に中る。晏師來りて別る、古人の腳迹を躡むを欲せず、亦未だ頭より起ることを免れず。

㋐棒打。大慧普說に出づ。

從大師に示す（筠州黃檗山に住す）

衲僧家具眼の行腳、順らく本宗向上の鉗鎚あることを知るべし。頂に透り底に透りて淨倮々階梯を立せず、直截超昇して纖毫の隔礙なし。大解脫金剛王の印を以て、萬機盤錯し、千聖交羅して百億の端緖撥すとも、開かざる處に向つて遂に受用せしむ。著々出身の要有り、頭々絕塵の迹を脫せしむ。通身是れ眼なる底、徧界羅籠すれども住らざる底、把斷放行毫髮も漏さゞる底、龍の如くに馳せ

虎の如くに驟き、電の如くに轉じ、風の如くに旋る底をして、摸索すること著ざらしむ。等閑に蕩々地に兀に似て癡の如し、豈に更に禪を會し面背を做して、到る處に機關を釘鬪し語句を詮注し、肉に貼き骨に著き、向上向下有事無事を論量して宗風を埋沒せんや。所以に道ふ、「他の得底の人は只だ閑々地を守る。」と、且く道へ、他箇の何の道理をか得る。若し針鋒許り有無得失我見我解あらば、則ち命根を刺卻せん。須らく知るべし猛火聚の如し。之に近けば則ち面門を燎卻す。金剛劍の如し、之を擬すれば則ち喪身失命す。列祖出興して只だ箇の一段を提持す、壁立萬仞なり、既に大根器を具せば人の瞞を受けず、直下に向來の依倚明暗の兩岐を脫卻して、放得下信得及、活鱍々として窠臼なし。廓然として淨盡することを得るに及んで、從上來佛祖共に證する底を承當擔荷し得ば、生死を脫透し、塵を破し的を破るに於て豈に難事と爲んや。乃ち之を眞正本分の衲子と謂つ可し。既に是に志有らば宜しく悉かに之を圖るべし。

祖禪人に示す

世尊の拈花、迦葉の微笑、二祖の禮拜、達磨の傳心、豈に他有らんや。箭鋒相拄ふ、其の神契ひ理御するに當りて、言思して測る所に非ず、唯だ向上の宗風有ることを知る者之を證す。千萬億載と雖も猶ほ且莫のごとし。是の故に乃佛乃祖之を求むること初より草々ならず、是れ純剛打就する利根上智を要す。然る後其の要を提げ其の節を擊つ、膠を漆に投ずるが如し、舉一明三、阿耨々地、窠窟なく滲漏を絕する底、始めて首肯す可し。更に應に淘汰煉り、盤錯交加して人の窮詰辨別すること能はざるの處に到りて、綽々然として餘り有るべし。受用の時に當つて ㊂浸淫として手段を露す。宗を超え格を越えて師旨に傍はざること有りて、獨り胷襟を出で壁立千仞、群を驚し勝に敵して方に付授する に堪へたり。法既に輕からず、道も亦尊嚴なり、所謂源深流長なり。從上の古德動もすれば平生を盡して或は三二十載、箇の入處に靠つて徹頭徹尾にして去らんことを期す。志既に立すること有れば用心堅確なり。是を以て成就得來りて ㊁地に擲すれば金の聲あり、大丈夫の兒、上を攀げて景仰す、然らざることを得ず。彼れ既に能く爾り、我れ豈に能はざらんや。況んや死生を透脫し、未來際を窮め、一得永得せんをや。當に根本を深固にす、根本既に固うすれば枝葉鬱茂ならざることを得ず。但だ一切の時に於て常に在らしめて走作せしむること勿れ。湛々澄々として群象を呑燦すれば、四大六根皆家具のみ、況んや知見語言解會をや。一時に底に到り放下して至實平常大安穩の處に到れば、了に纖芥の得べき無し。只恁の如く處に隨つて輕安なるは、眞の無心の道人なり。此の無心を保任しつれば究竟して佛も亦存せず、何を喚んでか衆生とか作ん。菩提も亦立せず、甚を喚んでか煩惱とか作ん。翛然として永く脫す、時に應じて祐を納る、飯に遇ふては飯を喫し、茶に遇ふては茶を喫す。縱ひ闤闠に處するも山林の如く、初より二

㊂浸淫。漸染の意。
㊁鄉地金聲。孫綽嘗て天台賦を作り、友人の范榮期に示して曰く、「卿試みに地に擲て、當に金聲作るべきなりと、榮期曰く、恐らく此れは金石にあらざるか、中宮商に非ず。」云々と。（晉書孫綽傳）

種の見無し。假使之を蓮花上に致せども亦忻びを生せず、之を㋛九泉の下に抑ふとも亦厭ふことを起さず。處に隨つて建立又是れ贏得邊の事なり、何ぞ我有らんや。大迦葉の云く、「法法本來法法無く、非法無し、何ぞ一法の中に於て法有り、不法有らん。」と。

古人旨を得て後多く深く藏めて人の知ることを欲せず、事を生せんことを恐るれば也。己を抑ふれども得ず、人に捉り出されて亦牢く讓らざることは、蓋し無心なればなり。慈を垂れ方便を示すに至りて、亦只だ家の豐儉に隨ふ。俱胝は一指、打地は唯だ地を打ち、祕魔は杈を擎げ、無業は莫妄想、㋜降魔は笏を舞するが如し。初より格轍勝負の見に拘はらず、人の各歸を知り、休歇し、見刺を起して、鬼窟裏に向つて精魂を弄せざらんことを務む。卓々叮嚀にして脫體安穩の地に到らば、乃ち妙旨なり。

靈利の漢は腳跟須らく地に點することを知るべし。背梁硬きこと鐵に似んことを要す。人間世に游んで萬緣を幻視して、把住・作主・人情に徇はず、人我を截斷し知解を脫去して、直下に見性成佛直指妙心を以て階梯と爲す。作用應緣に至るに及んで窠臼に落ちず、一片長久に寂淡の身心を守りて、塵勞に於て透脫し去らんことを辨せば、乃ち善之又善なる者なり。

㋛九泉。黃泉なり。
㋜降魔。降魔藏禪師、神秀に嗣ぐ。（傳燈廿九）

諸上人に示す

道本言無し、法本無生なり、無言の言を以て不生の法を顯す、更に第二頭無し。纔に追捕せんと擬せば、已に蹉過す。是の故に祖師西來して特に此の事を唱ふ、只だ言外に體取し、機外に薦取せんことを貴ぶ。上々の機器に非ずんば何ぞ能く驀地に便ち承當し得ん。然も是に志有る者豈に程限を計らん。要須す、立處孤危にして一刀兩段する猛利の身心を辨得して、複子を放下して箇の猪狗の咬むに似たる、惡手段底に靠著して、情を盡して從前の學解路布黏皮貼肉の知見を將て、一倒に打疊卻して胷次をして空勞々地ならしめんことを。己私露れず、一物爲ざるに便ち能く底に徹して契證して從上來と毫髮許をも移易せず、直に此くの如きことを得るも、更に向上超師の作略有ることを知りて始めて得べし。所以に古者佛向上を問はゞ非佛と答ふ、又㋝方便に呼んで佛と爲すと答ふ。則ち見性成佛乃ち筌罤のみ、是の中云何んか東を指し西を畫せん。直に須らく密契して自ら能く將護して、方に灑々落々なることを得ば、更に何の涅槃を證し、生死に契ふとか說かん、皆增語なり。然りと雖も只だ小僧恁麼に道ふ、「也た未だ取りて極則と爲す可からず、始めて佛病祖病を免れん、大丈夫の漢、心を圖りて參せんことを要す、」と、豈に限劑を立す可けんや。但だ深信を辨卻して一往向前せば、未だ腳實地を蹋まざる者有らず、日に新、日に新にして日日新、日に損し日に損して日日損す。步を退いて底に到らば便ち是なり、至り了れば是も亦立せず、此れ正に是れ工夫を作す處なり。

㋝方便。傳燈廿四、清涼文益の條に曰く、章問ふ「如何なるか是れ佛向上の人、」師曰く、「方便呼んで佛と爲す。」と。

楊州僧正淨慧大師に示す

箇の事は唯だ作者に憑つて通ず、千里を論せず自ら風を同じうす。名を聞いて十載今相遇ふ、金圈栗棘蓬を拈起す。維楊の前の僧正淨慧大師宗公、得々として江を渡りて鍾阜より㊀迂く訪ふ。誠を標して自己大因緣の爲に專ら小參を請ふ、因つて此の偈を說いて其の誠意を塞ぐ。蓋し淨慧生平修持すること甚だ淸潔なり、其の宿福緣集むる所、佛在世の時、㊁須菩提室中に寶藏充溢するが如し、根性敏明にして殊に繫著なし、得失皆㋐儻々來る物なりと了ずるのみ。心を操りて唯だ此の一段を究めんことを務む。相見は蹇爾なりと雖も堅確にして深く至れり、矻々孜々として因つて所期に副ふ、爲めに其の蘊を發す。祖師諸佛の單傳顯示、人人脚跟下本有の性を出でず、唯だ聖凡器界根塵の正體歷劫より以來、曾て未だ間斷せず、但だ各人人妄想緣塵を以て翳障す。若し本根の大力量を發起して勇猛に操持し、一念生せず前後際斷せば、直下に明に此の心を信じ、明に此の體を見、寬なること大虛の若く、明なること杲日の如し。能所を分たず、限量を作らず、頂に透り底に透りて、直下に徹證して便ち透得すれば、卽心卽佛、無別有心是れ佛、別に佛有ること無し、淨裸々虛妙明通して全く依倚無し。人の無盡寶藏を打開すれば其の中の所有、皆是れ自己の珍財にあらずと云ふこと無きが如し。日用の中徧界藏せず、併に無念無心、休歇の境界に入る、所謂一句了然として百億を超ゆ。餉間も千般萬種千句萬句、豈に更に差別あらんや。如今省力を要せば、但だ妄緣を息卻して疑情淨盡する處を知れ、便ち是れ自己生死を透る處なり。只だ此れ便ち是れ金圈栗棘なり、應に須らく直下に領取すべし。

㊀迂。遠なり。
㊁須菩提。佛十大弟子の一、舍衞國の長者の子なり、善吉、空生、善業と譯す、解空第一と稱せらる。
㋐儻來。適然にして來るを云ふ。

覺禪人に示す

佛祖の宗乘は唯だ直截を務む。香象の河を渡る勢の如くに、須らく底に徹すべし。若し稍や踟躕せば則ち千里萬里交涉沒す。是の故に從上の古德、棒を行じ喝を行じ、機境の處に參せしむ。擊石火閃電光の如し、略ぼ風規を露す。已に是れ泥を拖き水を帶び草に落ち了る、豈に更に淺深得失、偏圓事理解會を論量せんや。明かに知んぬ是れ土上に泥を加ふることを。所以に俊流は最上乘の印を佩び、千日の並照して幽として燭さずと云ふこと無きに似たり。門に入るを見て未だ目を擧げ唇を搖さざるに、已に先づ心肝五臟を覷透す。蓋し本分の手段初より造作無し、只だ快く自ら承當して剔起して便ち行はんことを貴ぶ。以て古今を籠罩し、十方を坐斷して萬世千劫絲毫許をも移易せざる可し。儻し未だ是くの如く頓超するこ：能はずんば、亦須らく先づ自ら根塵妄緣、以至淨妙殊勝の理道を擺脫すべし。空豁々地にして桶の底の脫するが如く、胷次蕩然として疑情盡く去り、勝解俱に忘るるを待つて自然に根本洞明なれば、從上來と同得同證して曾て間隔なし。乃ち是れ入理の門、悟中の則なり、終に獨體前に向つて神を見鬼を見、影を認め光を認めず、窠窟に墮在せば出處を求むとも得じ。只だ古人の如き卽心卽佛と道ひ、又非心非佛と道ひ、又不是心不是佛不是物と道ひ、又麻三斤と道ひ、又

㋑鋸解秤鎚と道ひ、萬別千差す。若し直下に領略せば豈に二致有らんや。所以に一了一切了一明一切明、只だ這の明了も也た須らく斬りて三段と作して始めて得べし。方に無事無爲履踐諦當の處に入るのみ。

自禪人に示す

初發心の人、性識勇猛にして餐を忘れ寢を廢して、專誠堅確なるを喜ぶ可しと爲す。況んや春秋㋺鼎盛にして鄕井の溫㋻煥を戀はず、淸高の雅衆に依つて此の一段の大因緣を體究せんをや。是れ誠に宿に大根器有り、然して更に宜しく日に一日を愼み、業々兢々として直下に脫灑して、滴水滴凍、規を蹈み矩に循ふべし。既に道の爲にするの心を以て衆に代りて盂を持す、不好の事業と爲さず、須らく三家村裏に居ても亦稠人廣衆の如きことを要す。所謂自ら一叢林を作すなり。㋼蹠を袖にし㋽刺を投じて、人に見えて節を折りて恭謹す。日用の中に於て當に自ら參取すべし。萬境萬緣皆自己の入路たり、一塵中に透脫すれば徧界皆是れ大寶藏なり。此の蘊奧を發すれば八萬の塵勞皆八萬の波羅密なり。物を轉じて己に歸れば處に隨つて心を了ず、並に工夫を作す處爲り。是の故に古德の道く、「山僧汝が爲に機を發す、卻つて限有り、他の山河大地一切の音聲及び自己心念の起る所、乃ち文殊普賢觀世音の妙門なるには如かず。」と、豈に見ずや㋾寶壽緣化を作すとき、鬧市に於て二人の相爭ふを見て、傍人解勸して、儞恁くの如く面目無きことを得と云ふ。渠れ便ち桶底脫し去る、後來出世して風を打し雨を打す、但だ專ら初心の如く專一にして移らず。將來自己、七通八達して無疑の地に到らん、自ら佛に超え祖に越ゆ可し。生死を透脫するも乃ち餘事のみ。

㋺鋸解秤鎚。大愚芝禪師に僧問ふ、如何なるか是れ佛、師曰く、「鋸解秤鎚。解不得」、會不得は雖解等の意なり。
㋻鼎。方也。
㋼煥。換に作るべし、煥なり。
㋽蹠。化條疏なり。
㋾刺。名刺なり。
㋿寶壽。會元十一に出でたり。

有禪人に示す

至道無難唯嫌揀擇と、誠なるかな是の言、纔に揀擇有れば卽ち心を生ず、心既に生ずれば卽ち彼我愛憎順違取捨㋿樅然として作る、其の至道に趣く亦遠からずや。至道の要唯だ息心に在り、心既に息めば則ち萬緣休罷す。廓として太虛に同じ、了然として寄ること無し、是れ眞の解脫なり、豈に難きこと有らんや。是の故に古德利根の種智を蘊む者、聊か擧著するを聞いて、剔起して便ち行く、快く自ら擔當して更に回互なし。大梅の卽心卽佛、㋿龍牙の洞水の逆流、鳥窠布毛を吹き、俱胝一指を豎つが如きは、皆是れ直に根源を截つて更に依倚なし。知見解礙を脫卻して淨穢の二邊に拘はらず、無上の眞宗を超證して無爲無作を履踐す。今時の學道既に志性有り、當に宜しく旃を勉めて古と儔と爲して、心に證徹を期す。腳實地を蹋む處に到れば、動用全く本際に歸す、千聖も籠羅す可からず、解會併せ亡す、得失俱に脫す。乃ち是れ無欲無依、眞正の自在自由の道人なり。此に到りて豈に更に難と易とを論せんや、則ち無難無易も亦了に不可得

㋿樅然。隆起の貌。
㋿龍牙。會元十三に出でたり。

なり。衲僧家句裏に身を出す、蓋し向上の機を提持して無句の中に於て句を出し、無身の中に於て身を現ず。言語道斷心行處絶す、等閑に蕩々地放曠として寛閑なり、纔に機緣有れば卽ち天を蓋ひ地を蓋ふ。所謂密々綿々として間なく隔なし。是れ强ひて爲すにあらず、任運として此くの如し。是を以て諸天花を捧ぐるに路なく、魔外潛に覷ふも見えず、直に恁麼に行履することを得ば、自然に㋐諸の三昧を超えん。

古人無爲無事を以て極致と爲す、蓋し其の心源澄淨にして虛融灑落なり。眞實踐履して此の境界に到りぬれば、然も亦終に此に住滯せず、直に得たり、盤の珠に走るが如く、珠の盤に走るが如くなることを。豈に是れ死煞頓住し得る底ならんや。所以に道く、「是れ死蛇なりと雖も弄することを解すれば也た活す」と。

長慶、道く、「道伴に撞著して肩を交へて一生を過さば參學の事畢へん。㋑酌然として若し獨脫するに非ずんば安んぞ能く此の段有ることを知らん。信に知んぬ須らく是れ恁麼の人恁麼の事有ることを知るべし。」僧、曹山に問ふ、「地に因つて倒るゝものは地に因つて起く、如何なるか是れ倒。」山の云く、「肯へば卽ち是。」「如何なるか是れ起。」山の云く、「起や明眼の人、透見して更に別に求めず、只だ這の片田地妨げず嶮峻の時は直に嶮峻、平坦の時は直に平坦なることを。立地にも也た明め得可からず、坐地にも也た明め得可からず。」

㋐諸三昧。大論四十七に百八三昧を說く。
㋑酌。灼に作るべし。

古人得意の後、深巖僻洞茅茨石室に向つて、大休大歇懷を放ちて履踐し、名を忘じ利を棄てゝ世と相關涉せず、自己の成辨を作して然る後緣に隨ふ。出でざれば則ち已む、一たび出づるに至るに及んで必ず群を驚し衆を伏す。蓋し源深く流長ければなり。今旣に未だ深山窮谷に入ること能はず、但だ只だ本分に依つて淡靜を守りて箇の百不知百不會底の人の如く、處に隨つて守見して安穩を成じ得ば、亦乃ち機を忘ずることの本なり。

月禪人に示す

昔曹山悟本を別る、問ふ、「何の處に向つてか去る。」山の云く、「不變異の處に去る。」本云く、「不變異の處豈に去ること有らんや。」山の云く、「去るも亦變異せず。」悟本之を領ず。蓋し其の透得すること綿密にして間隔なし。大安穩を得て通せざる所無し。是の故に機路灑落として千人萬人籠羅すとも住らず、言を發するに至りて直截して了に凝滯なし。若し胷次稍や解會有りて處に隨つて執著せば、則ち豈に能く句下に便ち恁くの如くに剪斷せんや。善く此の意を體せば眞の不變異なり、千生萬劫と雖も亦只だ如々なり。頭㋒緒紛然一一當陽に皆變異なし、豈に空際の如く大定を得るに非ずや。所以に道く、㋓「妙體本來處所なし、通身那ぞ更に縱由有らん、則ち去るも亦不變異の旨明かなり。」

釋迦老子道く、「我れ今汝が爲に此の事を保任して終に虛しからず。」將に知んぬ佛知見の淵源に徹し

㋒緒。絲端なり。
㋓妙體。傳燈錄二十九に出でたり。

て皆實ならずと云ふこと無きことを。履踐實處に到れば、凡そ擧止する所悉く虛に落ちず、一一に頂に透り底に透りて、古に過ぎ今に超ゆ、其の形相を求むるに毫末も了に不可得なり。其の諦當を極むれば則ち喫飯著衣四威儀の中全體成現す。須らく保任鄭重して至寶を獲るが如く、將護長養して便ち大力量を得んことを要す。之を以て世を度し物を利するに堪へざる所なく、方に佛子と爲して釋迦老子の苦口に辜かず。之を恩を知りて恩を報ずと謂ふなり。

本禪人に示す

常に獨り行き常に獨り歩む、達者は同じく涅槃の路に游ぶ、此れ蓋し萬法と侶たらざるの大旨なり。況んや自己本有の根腳、聖凡を生育し十虛を含吐す、一法として他の力を承けずと云ふこと無く、一事として他より出でずと云ふこと無し。豈に外物の障をなし隔をなす有らんや。但だ恐らくは自ら信不及にして便ち把不住にして去ることを。若し洞明透脫すれば只だ一心生ぜず、何の處にか更に如許多有らん。所以に道ふ、㋐靈光獨り耀いて迥かに根塵を脫す。須らく直下に從本以來自有底の活卓々の妙體を承當せんことを要す。然る後一切時一切處に於て、渠に逢はずと云ふこと無く、融攝せずと云ふこと無し。喫飯著衣、凡百の作爲、世出世間皆外より得るに非ず、既に此に達しぬれば、只だ平常を守りて諸見を生ぜず、什麼の一口に西江水を吸盡すとか說かん。設使ひ百千の諸佛無量の祖師、無邊の恠異神變を顯現すとも、一箭を消せず、

㋐靈光獨耀。傳燈錄九に出でたり。

但だ恁麼に信及見徹せば、行腳の事豈に辨せざらんや。

達禪人に示す

大道の正體混沌未分、及び杳冥恍惚の處に在らず、亦是れ故らに深邃隱蔽を作して、人をして窮むべからず、測量す可らざらしむるにあらず。蓋し至明、明に非ず、至妙、妙に非ず、直下に簡易なり。若し是れ宿根純靜なれば聊か擧著を聞いて、便ち落處を知る。更に外に向つて馳求せず、根腳下に向つて千了百當して全體現成して、乃至境に觸れ緣に遇ふて悉皆頂に透り底に透り、坐得斷把得住作得主して、終に他人の舌頭路布及び古今言敎機境公案を取りて將て極則と爲さず。是の故に從上の作家唯だ此の段を提持して、人の自ら承當擔荷せんことを要す。豈に曾て更に堦梯、地位漸次、如之、若彼を立し來らんや。今時の兄弟他全く用心せずとは道はず、要すらくは是れ省力を得て、大根大器大機大用を具し、一聞千悟して骨に徹し髓に徹して、痛く領し將ち去らず、纔に一たび毫髮をも蹉卻すれば便ち解會理路言詮意識根塵の中に入り去る。所以に他の藥網を脫け出でず、未だ免れず漠々として疑を懷くことを。便ち更に鈍工を下し、十年五載すれども終に能く果決すること莫し。尋常每に兄弟に勸む、須らく猛利の心を奮ひ、從前の學路得失窠臼を棄卻して、萬仞懸崖に向つて手を撒して、性命を㋐拌捨するに似たるべし、從他氣息一點も也た無くして大死底の人の如くなることを。餉間に甦醒し起き來らば、儞を謾ずること得

㋐拌。音潘。棄つるの義也。

す、卻つて已に脚實地を蹋む處に到るが爲なり。寛きこと太虛の若く、明かなること杲日の如し、更に造化を消せず。一切自ら圓成、二六時中先聖と交參して俱に殊勝奇特を爲す、脫灑して口に信せて開き脚に信せて行く、更に箇の何をか疑はん。豈に見ずや、古宿人に指す、㊐道は悟達に由り法は見聞を離る。若し也た眞的に悟り去らば、更に何の佛の語を解せざることをか憂へん。切に須らく日用の中に向つて異見を起さず、放ちて胸中をして灑々落々ならしめて、精神を打辨して自ら覷見すべし。之を久しうして須らく信入の處有るべし、若し只だ閑を守りて眉を閉ぢ、眼を合して露柱燈籠に參せんことを要せば、也た須らく佛種性有ることを知る底なるべし。終に死水裏に向つて折倒せじ、但だ肯心を辨せば必ずしも相嫌らず。

菩提言說を離る、從來得る人無し、㊑摩醯の正眼を具する靈利の衲子、聊か擧著を聞いて卽便ち覷透す。終に限量を作して解脫深坑の中に墮在せず、有般の底は路布有ることを容して、卽ち言說を離る、眞の言說なり。無得の人乃ち實證の人なりと謂へり、當面に蹉卻して葛藤に纏倒せらる、終に從上來の事を明め得ず。是の故に此の宗は冥契密付を務むと雖も、既に諸佛の㊒苗裔を作しては、應に須らく門風を紹續して正印を全提する深機を明めて、生死塵勞惡作執縛を脫すべし。永嘉乃ち云く、「大丈夫慧劍を秉る、般若の鋒兮金剛の焰なり、豈に擬議を其の間に容れんや。」と。

㊐道由。香嚴閑禪師が上堂の語なり。

㊑摩醯。摩醯首羅、此には大自在と云ふ、八臂三眼、白牛に騎る云々と、名義集に出ず。

㊒苗裔。苗は草の莖葉根の生ずる所、裔は衣裾の末、衣の餘也、故に遠末子孫の稱と爲す。

生死を大事と爲す、眞に透脫し去らば、以て大なりと爲さじ。何が故ぞ怖畏無きを以てなり。諦了實證して如々不動、萬有の起滅中外に根株を覩るに、洞然として明白なり。始末齊平にして初より得喪なし、而も常に此の大明を執りて普く照すこと日月を揭げて行くが若し。師子王の游戲自在なるが如し、百千劫を促めて一念と爲し、一念を衍べて百千劫と爲す、須彌を芥子の中に納れ、大千を方外に擲ぐ、皆我心の常分なり。何ぞ淨穢去來の里礙を爲し、生死得喪の繫累を爲す有らんや。古德の云く、㊓「生は猶ほ衫を著るが如く、死は還つて袴を脫ぐに同じ」と。生死を以て大變と爲さゞること知る可し。

印禪人に示す

參問の要は、當人曉夕を論せずして以て事と爲して、長く玆を念ふこと玆に在らしめて、自ら覷捕せば、驀然として情識を絕し思量を忘じて、一旦桶底子脫す。心上に更に心を具す、佛の上に豈に作佛を假らん。大休歇の場を得て、虛閑寂靜、無相無爲無執無住なり。祖師の言敎更に別事を明めず、所謂身心本性空なりと了得せば、斯の人佛と何ぞ殊別ならん。但だ自ら體究して終に箇の入處有らば、卻り來りて證據せん。乃ち是れ了事の人なり、子細に之を看よ。

初機晩學乍爾ちに參せんことを要す、摸捫する處なし、先德慈を垂れて古人の公案を看せしむ。蓋

㊓生は猶ほ衫。傳燈三十に出づ、蘇溪和尙牧護歌の句也。

し法を設けて其の狂思横計を繫住して、識慮を沉めて專一の地に到らしむ。驀然として心を發明すれば外より得るに非す、向來の公案乃ち門を敲く瓦子なり。只だ龐居士の馬大師に問ふが如くんば、「萬法と侶たらざる底是れ何人ぞ。」馬の云く、「汝が一口に西江水を吸盡せんを待つて卽ち汝に向つて道はん。」と。但だ靜默沉審して然して後擧げて看よ、攸久の間に須らく落處を知り去るべし。若し語言を詮注せば、只だ多知を益す、此れ箇の法門解脫の境界に入得するに緣無し、諦信せよ諦信せよ、悟を以て則と爲し、遲晩を嫌ふこと勿れ。」

疾苦身に在らば、宜しく善く心を攝して外境の爲に搖されざるべし、中心亦念を起さずして、常に生死事大無常迅速を以て意と爲して、斯須くも恣縱にす可らず。唯だ嗔の一法、三業に於て大過患たり。儻し順違有らば切に生せしむること勿れ。常に己を虛しうし心を正して外より來り觸るゝを觀て盧舟瓢瓦の如くせば、則ち物我俱に寂にして不動の地に到らんのみ。之を思へ諦かに之を思へ。

妙覺大師に示す

學道は師を擇ぶことを先とす、既に眞正に頂門の眼を具する善知識を得ば、其に依つて死生大事を決擇せよ。須らく猛勇に身心を放下し情を忘れ體究すべし。當に悟入に資つて從本より以來、獨脫の滯礙なき本分の事を發明すべし。日に損し日々損して、履踐して無疑至實大休歇の場に到る、此れ所謂具眼の參學なり。勝負有り、窠臼を存せば一往有ることを知らず。誠を存せず道を學せず、出離を求めざる者に超勝すと雖も、然も此の宗に於て未だ深造を得ず、猶ほ半塗に在り、亦憫む可しと爲す。大凡そ出家離俗は聖道を洪いにせんことを要す。一切の人を度すとも、而も度人得道の迹なし。方に向上の人の行履の處に超詣す可し。且く向上の人肯て自ら佛法を會し、能く妙果を證し、佛に越え祖に超ゆと謂はんやいなや。酌然として的に是の理なし、蓋し只だ箇の毫髮許りの能所解悟證入を覓むるに、亦了に不可得なり、豈に況んや熾然として見刺を生ずるをや。是の故に古德の道く、「他の得る底の人只だ閑々を守る。」王老師は只だ ㊂癡鈍にして去ることを要す。豈に見ずや、渠れ每每に垂示す、三世の諸佛有ることを知らず、㊁狸奴白牯卻つて有ることを知る。直饒ひ渾て狸奴白牯を脫し去ることを得るとも、未だ裏に向つて存坐すべからざること在り、須らく恁麼恁麼更に恁麼、手を撒して那邊に向つて去りて、始めて得んことを要す。夾山の道く、「任儞、碧潭清ふして鏡に似るも、終に明月をして下り來らしむること難し。」と、將に知んぬ、纔に及不盡なれば並に是れ影響なり。棒をもて石人の頭を打つがごとし、曝曝として實事を論じ去りて究竟して看よ。著衣喫飯是れ別人ならずと雖も、且く要すらくは貼肉の衫子を脫し、卽ち留滯すること得ざればなり。既に貼肉の衫子を脫卻せば、是れ一員無爲無事出塵の人を管取せんや。

仁書記に示す

㊂癡鈍。古尊宿錄十二に出でたり。
㊁狸奴。傳燈錄十に出でたり。

雪峰人の爲にす、金翅鳥の海を擘いて直に龍を取りて呑むが如し、豈に唯だ雪峰のみならんや。從上の大有道の士、㋺兼利並べ照す、老作家の手段を蘊む者皆然らずと云ふこと莫し。蓋し直截の力を盡さず、銀山鐵壁の峭拔なるが如くならざれば、則ち鈍置し去る。是の故に臨濟德山棒を行じ喝を行じて、毒手腳を下すこと正に大心大器大根の者、向上に承當せんことを欲す。人をして只だ目前の光影口頭の聲色を認めしむ。所以に道く、「向上の一路千聖も不傳。」と、若し是れ箇の漢ならば聊か擧著するを聞いて便ち透徹し去らん。終に他の窠臼を守り、他の死語を取らじ、且く棒を行じ喝を行ずる何の處にか落在する。若し直に龍を取りて呑む意を明め得ざれば、則ち又紛々紜々として去る也。大丈夫の漢、己靈猶ほ重せず、何に況んや他人の路布を取りて自己の胸襟と爲さんや。直に須らく人の瞞を受けず、昂藏特立して從來の依倚を截卻し、理性玄妙動用作略を擺撥して、本分の事を體むべし、既に體得して本分の處に到れば、只だ肱を曲げて枕とす、亦是れ箇の大快活の人なり。若し了せずんば泯然冥然迢然として恁麼に去る。纔に頭を回して覷捕せんに、纖毫の疑問有らば則ち關涉沒し。豈に見すや臨濟の道く、「元來黃檗の佛法多子無し。」と。參せよ。

㋺兼利並照。二利並に二照を兼ぬる意。

㋻貫。貫飾なり、山下有火、貫と曰ふ。

怡然道人に答ふ

宿し小參に光㋻貫すと承るに、此の道を以て懷と爲す。況んや利根上智廓然として自得して、清淨の本源を極むるを以て、能く玲瓏として徹透鑒覺す。戶庭を出でず、已に諸方を驗過す、老僧淺陋にして乃ち知照に㋼沐す、許して擊揚せしむ。既に風を同じて密契す、自ら疎外ならざるに因つて、此の事に於て底裏を盡して羅列す。一句一言一機一境、皆絕唱の深致なり。心性玄妙、語默關涉、葛藤路布に非ず、直に是れ頂に透り底に透り、色を蓋ひ聲に騎る。報化佛頭を坐斷して、是非得失に落ちず、唯だ根源に徹する淸淨の正眼思念、寂滅すと雖も、明惠籠羅を脫去して、超然として頂額上の一著を獨り證す、此の時豈に纖毫の道理有らんや。亦空劫已前威音已後を立せず、箇の裏に到りぬれば諸天花を捧ぐるに路なく、外道潛かに覷くとも見えず、淨裸々赤灑々として仍ち本地の風光本來の面目なり。直に佛覷くとも見ざることを得たり、之を向上の一路千聖不傳と謂ふ。其の中の人を除非して、則ち一擧に便ち落處を知る。

㋼沐。蒙る也。

黃通判に答ふ

別紙に承はる、踐履是れ誠にして實諦に意有り、徒に談柄の淨根を資け、口語の淺學を倘ばず、況んや此の段の大緣は人人の根本なり、洞然として融通す。群有を包括して滅せず生せず、今に亙り古に亙りて常に日用の中に在り、而も無始の妄習の翳障を以て、强ひて知解を作して獨脫すること能はざるのみ。明公今既に心を息し力を絕して體究す、諸の妄緣を離れ、如々の性を了じて諸相の相に非ずといふことを見んと要す。若し確然專一にして些しく攸久の工夫を下さば、定めて須らく契證する

所有るべし。佛の所謂若し諸相、相に非ずと見ば、卽ち如來を見んと云ふが如し。此れ直に諸相の當體了に不可得なり、全く是れ自心なり、及び非相たり。則ち如々にして來り、如々にして去るに於て無二無別なり。脫體全眞にして妙明の眞心に契ふ本來の淸淨なり、只だ自己本來の面目是れなり。因に人をして諸相を撥ふて非相と爲して、外に向つて馳求せしめず、然も此の心本來澄湛にして物我一如なり、境と心と初より兩種なし。心冥境寂して然る後證入する所有らんことを要す。證入の後に至るに及んで證も亦證に非ず、入も亦入に非ず、翛然として通透す。桶底子の脫するが如し、始めて無生無爲閑々たる妙道の正體に契はん。今念を息し慮を澄しむる工夫を作す、乃ち是れ入道の門徑、但だ此の心を辨せば、當に深證あべるきのみ。

⑦古德の道く、「若し安禪息定せずんば、這裏に到りて總ち須らく茫然として去るべし。透得して徹頭の處に到るに、逗至しぬれば玄も亦立せず、佛祖も亦立せず、乃ち向上の大機大用なり。其の中の人行履の處又且く更に有ることを知りて始めて得べし。」と。

此の事は言句の中に在らず。雲門の云く、「若し言句の中に在らば、一大藏敎豈に是れ言無からんや。」と、何ぞ祖師西來を假らん、將に知んぬ、祖師の來ること、唯だ直指人心を論じて文字語句を立せず、但だ懷を忘じて體究して澄湛綿密ならしむ。一念不生に到りて、向來の知解・作略・機境・計較・道理を脫卻して、心を忘じて直證し、然る後日用の中に於て、此の正印を以て印定すれば、一切の諸相則ち異相に非ず、則ち築著磕著、眞淨明妙、大解脫の境界に非ずと云ふこと無し。然も旣に此を了じて、卻つて尋常諸佛諸祖、垂示する所の正因正果に依つて、世間の雜染害道の諸の不善業を將て、脫然として打摒して怙々地に修行す。玆を念ふこと玆に在り、三十二年此の心を枯淡にすれば、此の身卽ち堅固の法身を成就す。切に恐らくは因果を撥無して豁達の空を作し、無礙見解を作すことを。此れ毒刺なり、切に望むらくは體究して深く證することを圖らんのみ。

⑦古德道く。大珠和尙の語なり。

禪人に示す

大凡そ生死の流を截り、無爲の岸を濟る、他の奇特なし、只だ當人の根器猛利にして、自らの胸襟を揭げて一切の有爲有漏虛空華の如く、元より實性無しと了せんことを貴ぶ。照了の心を以て返つて自ら觀省し、翻覆して覩捕して審諦す、諦審すること久しうして當に趣入の證有るべし。蓋し此の段並に他物に非ず、亦他人の能く力を著けて自己をして省發せしむるに非ず、人の千斤の擔子を負ふが如し、己が如許の力量有るに由つて方に能く堪可すべし。若し氣小に力弱ければ則ち他に壓倒せられ去る。所以に道く、「大人大見を具し、大智大用を得」と。大丈夫の漢、精彩を打辨す、豈に山鬼窟子の裏に向つて活計を作す可けんや、何の出徹の期か有らん。應に須らく不可測、不可量に大事を荷負して、情を超え見を離れて卓絕穎邁の志を發すべし。直下に透脫して、無始以來の妄想・輪廻・彼我・得失・是非・榮辱・穢濁の心を擺撥して、淨穢の兩道をして都て依怙せざらしむ。翛然として獨脫

すれば一物に依倚せず、千聖未だ消息あらざる時、生佛世間出世間、曾て顯露せざる處に向つて、一念不生前後際斷すれば、本地の風光を蹋著して、明かに本來の面目を見て承當し得て、直下に牢固にして毫髮の見刺なく、內外融通して蕩々然として大安穩を得ん。乃ち身を轉じ氣を吐いて這邊に於て來る、自然に日用の中凡百の施爲の際、一一に朝宗して本に返る、豈に是れ分外の事ならんや。喫飯著衣、世間の法を修すと雖も、如々ならずと云ふこと無く、通透せずと云ふこと無し。所證の正體と相應せずと云ふこと無し。更に何の高低向背をか論せん、纔に見刺を生ずれば卽ち命根を刺卻するのみ。祖師及び古の宿德、棒を行じ喝を行じ、作用百千億種他の志なし、元只だ人をして自透脫し自休歇して大死人の如くならしむ、豈に只だ自己を了じ世を度りて便ち休するのみならん。勉むること餘り有れば乃ち悲願を忘れず、此を推して以て未悟を發く、人間世に居して汎然として繫がざる舟の如くなるを嘆んで無心の道人と爲す。今既に未だ頓了頓明すること能はず、且く放ちて若しくは身若しくは心、空勞々地ならしめよ。虛寂なること既に久しければ、驀地に漆桶を打破す、桶底子脫する處に到ること也た難からず。況んや自ら猛利の根性を具して、佛事を荷負せんをや。殊特奇勝の緣を作爲す、此れ豈に別人の力を借らんや。是の故に古者の道く、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち拌す。」

韶副寺に示す

昔雪山童子㉔半偈の爲に全軀を捨つ、可祖は臂を斷ち、雪に立ちて膝を沒して一句子を求め、老盧は八箇月負舂し、象骨は飯頭して桶杓を擔いで、巖頭と同じく園を事とす。欽山補紐して九たび洞山に上り、三たび投子に到る。只だ此の段を究めんが爲なり。其の餘効し勤めて力を㋑勤せ、雪に臥し霜に眠り、攻苦食淡すること、蓋し勝げて數ふ可らず。其の趣向を鞠むるに、初より名聞の爲にし、利養を苟めず、並に死生の大事を以て懷と爲し、佛祖の種草を紹隆するを務と作す。是の故に光を雪林に埋めて、聲迹人間に到らずと雖も、往々に老を終へ死に至りて脫然として、獨り得て鳥の籠を出づるが如くなること有り。了然として明かに證して萬世移らず、傳記に載する所の如きに至りては、㋺太山の毫芒十が一なり、百千萬に於て特に少分ならくのみ。其の高く隱れ深く遁るゝ爲、溝壑に流轉して、長く往いて顯みざるもの豈に涯量有らんや。是の故に諸佛世に垂れ、祖師西來する大意全機情識を超え、㈧詮表を越え影迹を逾え聖量を出づ、豈に細事ならんや。唯だ大いに志有るの士、宿薰種勝して根力群ならず、然る後能く此の任に堪へたり。㈡頭目髓腦と雖も自ら愛惜せず、況んや小小の艱勤をや。往時大達の士、旨を得て後深く關し牢く藏る、順違の方便を起して故意に害を作して怒罵鞭叱を現すこと百種千端にして、學人を試驗せんことを要す。其の苦楚を經て心を動ざらんを待ちて、乃ち一挨一拶を與へ、片言纖

㉔半偈。涅槃經北本十五、南本十三に出でたり。
㋑勤。音六、併力也。
㋺太山毫芒。文選の說。
㈧詮表。鄆嚴宗鑑六に出でたり。
㈡頭目髓腦。法華經提婆品に出でたり。

機を垂る。大飢困の人の食を得たるが如く、醍醐甘露を灌注するが如し。珍重忻快㋐拳々として失せず、大法器を成就し、向上人の道徑を踐履す。猶ほ爛骨董地に熟せんを須ちて始めて委付す可し。讓祖の曹溪に於てせしが如し、八年にして始めて箇の説似、一物卽不中と道ひ得たり。稜師、雪嶺に至りて十五載、七箇の薄團を坐破す。靈雲三十年、㋑涌泉四十祀、德山、臨濟皆師門に依ること歲月甚だ久し。蓋し此の道は廼ち千聖不傳の妙なり、豈に輕心慢心を以て趣入す可けんや。永嘉の云く、「粉骨碎身も未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ゆ、」と。霜華の諸道者、大潙に在りて執務す、一日庫前にして自ら米を篩る、大圓過ぎ、遺ちたる一粒の米を拾ひて謂つて云く、「道者此の粒を輕すること勿れ、百千粒も此の粒より生ず。」諸廼ち返徵す、「百千粒既に此の粒より生ず、和尙且く道へ、這の一粒何の處より生ずる。」大圓袖を拂ひて去る。晚に小參、衆に謂つて云く、「大衆米裏に蟲有り。」と、趙州桐城に到る。路に㋒投子一の油瓶を挈ぐるに逢ふ、遂に云く、「久しく投子と嚮く、只だ賣油翁を見る。」投子云く、「公且く投子を識らず、」州云く、「如何なるか是れ投子。」投子油瓶を提起して云く、「油々米裏の蟲何ぞ油裏の蟲に似たる、若し投子に參得せば卽ち石霜を見ん。」と、何故ぞ、豈に道ふことを見すや、衆裏に人有り㋓禪僧家、第一に須らく㋔金剛の眼を具することを得べし、第二に須らく金剛寶劍を得べし、第三に須らく拄杖子を得べし、第四に須らく禪僧の巴鼻を得べし。直饒ひ一一に透し得るも、更に須らく末後の句有ることを知りて始めて得べし。

㋐拳々。來持の貌、拳々服膺と中庸に出づ。
㋑涌泉。會元六に出づ、台州涌泉景欣禪師、石霜諸に嗣ぐ。
㋒投子。舒州投子山大同禪師。（傳燈十五）
㋓金剛眼。禪林類聚六に出でたり。

燈上人に示す

直截透脫を要せば、須らく先づ深く自己根腳下に此の一段有ることを信すべし。今古に輝騰して迥かに知見を絕す。淨裸々として依倚沒し、常に目前に在りて毫髮の相なし、寬にして太虛に同じく、明にして杲日に逾えたり。天地萬物成壞有りとも、此れは箇れ變なく移なし。古人之を萬法と侶たらざる底の人と謂ふ。亦如來㋖正偏知覺と號す。但だ諦實承當して一念をして生せざらしめば本來に徹透す。元より動搖せず、長時無間なり。若しくは行、若しくは住、百種の作爲初より妨礙せず、歷々孤明なり。一機一境一句一言皆法界を含み本眞如に稱ふ、情想計度起滅の處なし。此の正印を以て一印印定すれば、自然に方に隨つて圓を逐ひて悉く一種に非ず、他古より明かに佛性を見る。得道の士、運用作爲未だ嘗て塵緣境界を觀るに塵緣の得可き無く、鞠めて一眞實際に歸するに在らずんばあらず。此くの如く步を退けば、一日の功徒ら一坊に㋗拓る。是の故に南泉の道く、「王老師㋘十八上、便ち活計を作すことを會す。」是れ揭げ搦へ强ひて爲すにあらず、

㋖正偏覺。維摩經に出づ。法差なきが故に正と言ひ、智周かちざるなきが故に偏と言ひ、生死夢を出づるが故に覺と言ふ。
㋗拓。當る也。
㋘十八上。南泉上堂して曰く、「諸子、老僧十八上、解作活計、解作活計有るものは出來す、鬪と共に商量す、是れ住山の人始めて得るなり。」と。（傳燈廿八）

蓋し任運騰々寛通自在なり。天龍鬼神他の起心の行處を覓むるに得ず、此れ無心の人行履直下に深嚴なり。若し能く知見解礙を休歇し將ち來らば、便ち徹證の分有らん、亦活計を作し去ることを解す、須らく志を揭げて勉强せんことを要す。然る後行くとして閒ならざる無く、曹溪路上に於て無閒の力用を得ん。

禪人に示す

利根種智は聊か擧著を聞いて、底に徹り頂に透り、直下に承當す、了に別法なし。手を撒して便ち行く、豈に復た更に遲凝すること有らん。正に利劍を秉つて門に當るが如し、阿誰か敢て近かん。箇裏に到りて、凛々たる神威、佛祖も能く近傍すること莫し。群靈を呑噬す、豈に是れ大解脫を得るにあらずや、更に向上向下を立せず、超然として獨り證す。是の故に從上の人一機を立て一言を垂る、之を鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣ると謂ふ。箇裏に到りて如之若何を論せず、箭鋒相拄へて一擊に便ち過ぐることを要す、縱に擬議に涉れば則ち千里萬里去るなり。只だ達磨の如くんば少林に面壁すること九年、唯だ可祖有りて默契す、如今立地に明め得んと要すること難からず、但だ撥卻することを辨じて從前の解を作す、種々の機智毫末を立せず、胷中をして淨倮々ならしめ、聖凡存せず、彼我拘らず、一念生せず、單刀直入せば更に何の佛をか覓めん。高く ❼ 毗盧頂を步み釋迦文に禀けず、的を破り機を破り宗を超え格を出づ、頭を方外に引いて看よ、誰か是れ我般人始めて種草と作る可し。然る後千人萬人羅籠すとも、住らざる處に向つて一條の線をも辱さず、硬糾々地に壁立千仞等閑に一毫芒を拈れば、便ち十虛を逼塞することを見る。拈示するに風を同じうし、德を同じくして期せざるに自ら會し、言はざるに知りて互に主賓と作りて、宗を建て旨を立し、相去ること遠く河沙を隔つと雖も、長に目擊の如くにして、向上の機を透り、生死の事を了じ、恩を報じ法を立す可し。群靈をして一一是くの如くならしむ。方に箇の大丈夫奇特の緣を作し、殊勝の事を了ずと稱す。昔し裴相と黃檗と、李習之と藥山と、楊大年と廣慧と、李都尉と慈照と、此を以て機を投ぜざる無し。既已に機を投ぜば、復た此に資つて以て履踐して、外諸見を空じ內心智を絕し、徹底平常騰々、任運內外護の爲に大法を流通す。所謂恁麼の事を知らんと要せば、須らく是れ恁麼の人なるべし、若し是れ恁麼の人ならば始めて恁麼の事を解すべし。

❼ 毗盧。問ふ如何んが是れ主中の主、師座して毗盧頂を斷ち、釋迦文を禀けず。（汾陽錄上）

魯叟に示す

佛法は大海の如し、萬有包含す、形器數量を以て能く測度せらる可からず、一一に俱に邊際なし。若し造入せんと欲せば、須らく箇の沒量の大智見を辨じて、法界を窮め虛空に等しく、未來を盡して退轉せず。跂步超越して合に鐵石の堅固なるが如くなるべし。然る後頂門の正眼を廓いにして、愼んで眞實本分作家の手段を具する大宗師を擇んで、心を息めて依附すべし。死生の大事を將て之に託り

て、透脫超證すること無くんば已まず、第一先づ窠窟に落ちざるを得べし。而も能く直截して明かに本來の面目を見、本地の風光を躍著して、根を深ふし蔕を固ふして信得及了得徹して、虛寂靈明にして不動不變なるを基址と爲す。情念計較俱に生せず、直に空豁々地を得て前後際斷して、諸聖と絲毫許をも移易せず、自己を諦了せよ。其の次は展轉退歩して一切留めず、而して能く毛端に於て刹海を現し、須彌を芥中に納れ、向上の機を拈起し、祖佛の令を提持す、此に到りて正に好く力を著けて、今時の玄妙理性妙句奇言掀天の作略を及め去り、擺撥し盡して方に始めて那邊の意旨を體得すべし。幾く時か更に肯へて我れ佛法を會し、能く活脫にして機用を逞しうすと道ふ、若し履踐し得て攸久ならば、分明に無事安樂の人なり。將に知る、聖賢身を橫へて此が爲にすることを、事に臨んで功能を立し、我見を逞しうするが爲ならず、意人人をして無疑無爲無事にし去らしむるに在り。今春秋に富み貴富に居すと雖も、夙昔の願力を以て高識遠見なり。此の道を學ばんことを要して、身意を潔清にし、世緣を捨てずして乃ち淨行を修す、初段に早く已に眞正なり、長久不退の心を辨せんことを要す。縱ひ一切の違緣に逢ふとも、之に處して餳密を食するが如く、養ひ得て純熟しぬれば、便ち是れ大解脫の人なり、佛法と世諦と豈に二種有らんや。此を推して直に前めば何くに往くとしてか利あらざらん。古人の道く、「千里風を同じうす、」と。蓋し言はずして照し、面かずして知る、豈に繁詞を假らんや、是の故に毗耶大士の一默、文殊善しと贊す、病を瘥すに驢駝の藥を假らず、意鉤頭に在り、應に須らく領取すべし。獨り行き獨り歩する處に向つて、實に靠つて考究して看よ。何くよりしてか起り、何く自り來る、縛を去け黏を解することと眞ならずんば何をか待たん。無業は只だ箇の莫妄想と說き、俱胝は只だ一指を豎つ、天皇の胡餅、趙州の喫茶、雪峰の輥毬、禾山の打鼓、別事なし。參せよ。

禪者に示す

達磨祖師、此の土に大乘の根器有るを觀る。是に由つて天竺より西來して敎外の旨を傳ふ。直に人心を指して文字語句を立せず、蓋し文字語句は乃ち末事なり、恐らくは之を執泥せば、卽ち超證すること能はず。所以に執著を破し、玄妙を去け、聞見を離れ意表に出づ。擊石火閃電光の如し。一念生せず、直下に根塵を透卻して、各々根脚下に向つて此の一段の大因緣を承當領覽す。翛然として獨り脫して一物を依倚せず、十虛を含吐して、湛然澄寂にして本來の妙心を契悟す。此の心能く一切世間及び出世法を生ず、唯だ宿薰の種性あるも、略ぼ提取するを聞いて卽ち落處を知る、更に別處より流出せず、全心卽佛、全佛卽人、人佛無二にして一道淸虛なり、豈に得失是非違順好惡長短有り來らんや。有爲有漏幻の如く夢の如し、了に一塵も長久なる無し、是の故に才智を蘊み、力量有る底卽ち能く一念眞正の菩提心を發して、諸緣の爲めに牽かれ、富貴に拘はらず、動もすれば是れ歲月を歷て不退不轉にして、頭を埋めて向前して玆を念ふこと玆に在り、回光返照して從上來威音那邊

萬緣の根本を諦了す。纔に覷得透れば、卽ち身心泰然として二六時中更に放舍せず、直に徹證せんを俟つて乃ち能事畢る。況んや當人合下に情靜純一慈善にして、如許の惡覺惡知無うして、而も復た相續綿々として體究せば豈に善ならずや。古人の道く、「百草頭邊に薦取す。」只だ朝より暮に至るが如きは、是れ箇の何ぞ但だ念々覷捕し、心々無住にして攸久純熟して、只だ光輝を見る、一切の法を觀るに空にして曾て實有らず、唯だ此の一心今に亘り古に亘りて、以て死生を透脫す可し。此の道を學する者、其の門を得ざるは、只だ情解の上に在りて途に觸れて滯を成すが爲なり、若し一切情を盡して打疊し、胸中に纖微を存せざれば、自然に七通八達なり。但だ長時無間に消遣し將ち去りて、淨念聖解尙ほ生ぜざらしむ。何に況んや情に觸れて動じて衆の不善を作さんや、善知識に親近して、只だ提誘して己が興めに增上緣と作さんことを貴ぶ。世尊記し玉ふ、當來一牛吼ゆる地に善知識有りて、遞に相擊勸し、相與に行持して此の妙道を體めん。㋐鏡淸の云く、「汝等十二時中須らく管帶して始めて得べし。」趙州の云く、「我れ十二時を使ひ得たり。」佛言く、「若し能く物を轉ずれば卽ち如來に同じ。」と、旣已に久しく誠を存す、唯だ務めて向前して不退轉を得べし、等閑に要すらく當に心中一物を留めず、直下に箇の無心底の人に似て、癡兀の如く勝解を生ぜざるべし。養ひ來り養ひ去り、生死を觀るに甚譬如閑、便ち趙州、南泉、德山、臨濟と同じく一見なり。切に自ら保任し、此の無生無爲大安樂の地に端居せば、乃ち甚だ善きをや。

㋐鏡淸。越州鏡淸寺道怤禪師。（會元七）

禪人に示す

西方の大聖人㋑迦維羅を出でて無邊量の妙用を作し、刹塵莫數難思議殊特の正因を顯發して、以て群靈を啓迪す。其の方便順逆開遮の餘言遺典寶藏に盈溢す。下梢に至るに及んで始めて一の消息を露はす、之を敎外別行單傳心印と謂ふ。金色の老子より已來的々綿々として、只だ直指人心、見性成佛を論ず、階梯を立せず、知見を生ぜず、利根上智は無明窟子の裏に向つて瞥破し、煩惱根株の中に活脫す、時に應じて超證して大解脫を得。是の故に竺乾の四七、東土の二三、皆龍象の蹴蹋なり。師勝れ資强うして、機境言句動用語默上、上乘の根器有りて、格外に領略し、當下に業障、冰の如くに消えて直截に承荷す。餘時に於て自ら能く管帶して打つて一片と作す。世を度し流を絕して頓に佛地に契ふ。尙ほ肯て死水の裏に向つて浸卻せず、玄妙を透り佛祖を越え、機緣を削去し、路布を剗斷せんことを唱出す。㋒太阿を按ずるが如し、凜々たる神威阿誰か敢て近かん。作家の漢確實に論量す、纔に向上向下、勝妙理性作用纖毫も有れば、卽ち之を叱す。是れ從來の種草にあらず、直下に十成に煆煉して熟することを得。踐履して實を得て始めて與めに略ぼ放過す。猶ほ恐らくは異時に草に落ちて人を負累し、正法眼を瞎卻せんことを。嗟むらくは一流の拍盲野狐の種族を見るに、自ら曾て夢にだも祖師を見ず、卻つて妄に達磨㋓胎息を以て人に傳ふ、之を傳法救迷情と謂ふと傳ふ。以

㋑迦維羅。佛出生の地なり。
㋒太阿。名劍なり。
㋓胎息。胸朴子に曰く、「胎息とは能く鼻口を以て噓吸せず、胎中に在るが如し云々。」と。

至、從上最も年高き宗師、㋒安國師㋓趙州の類の如きを引いて、皆此の氣を行ずと云ふ、初祖の隻履普化空棺に誇るに及んで皆此の術驗有りと謂ふ、遂に渾身脱去するに至りて之を形神俱に妙なりと謂ふ、人間厚く此を愛する者、臘月三十日、惶惶せんことを怕れて競ひて㋔歸眞の法を傳ふ、除夜に影を望んで、主人翁と喚んで以て日月を卜ひ、樓鼓を聽き㋕玉池を驗み、眼光を覘んで以て生死を脱する法と爲す、眞に閭閻を㋖誑誒して、僞を揑り棄を造りて高人の嗤鄙を貽す、復た一種初祖の胎息說、趙州十二時の別歌龐居士の轉㋗河車の頭に假託して、遞互に指授し、密傳行持して以て長年及び全身脱去せんことを圖り、或は三五百壽を希ふ有り。殊に知らず、此れ眞の妄想愛見なることを、本是れ善因なれども、覺えず荒草に墮在することを、而して豪傑俊穎の士、高談大辯あつて祖師を下視する者往々に之を信ず、豈に故步を失ひ虎を畫いて狸と成して、有識大達明眼の覷破するに遺はんことを知らんや、居常の衆中に惟だ默觀憫憐す、豈に釋迦文列祖との體裁止だ是くの如くならんや、曾て自ら始末を回照せざることを、則ち㋙居然として知んぬ可し。海内に此を學する者、稻麻竹葦の如し、其の高識遠見自ら因循ならず、恐らくは乍ちに意を發して未だ圖奥に入らずんば、志を揭ぐること專なりと雖も、㋚跂步遠しと雖も、㋛增上慢の此の邪見の

㋒安國師。一百二十八歲にして化す、會元二に出づ。
㋓趙州。一百二十歲。（傳燈十）
㋔歸眞。精神形を離れ、各其の眞に歸するが故に、之を鬼に歸すと謂ふなり、其の眞宅に歸するなり。（列子天瑞篇）
㋕玉池。王流口也、黃庭經に曰く、玉池清水靈根に灌ぐ云々。
㋖誑誒。欺也。
㋗河車。書言故事に出でたり。
㋙居然。安然なり。
㋚增上慢。一名卑劣慢と云ふ。

林に導き入るゝに遇はんことを。末上に一たび錯れば、永く回轉すること沒し、其の流浸や廣し、之を能く遏むること莫し。因つて此の顯言を出す、庶はくは大解脱㋘大摠持に志願あるもの、以て之を辨ず可し。而して同じく無生㋙大薩婆若海に入りて、小舟を汎べて群品を濟接して、正直の妙道をして、無窮に流へば豈に快ならずや。

遠獻奉議に示す

從上徑截の一路、直拔超昇なること、直指人心見性成佛に出でたるは無し。但だ此の心淵奥にして聖凡の階級を脱去す、只だ利根上智の無明具縛窠窟の中に於て纖毫を動せず、直下に頓に契ひ廓徹靈明にして、有情無情有性無性と同體にして大法と相應じ、作用を發起して古に透り今に超え、聲に騎り色を蓋ひ、虛にして靈に寂にして照なり。無量無礙不思議大解脱、一一に七穿八穴にして、了に回互無くして便ち落著を識らんことを。所以に乃佛乃祖之を單傳密付と謂ふ。印を空に印するが如く、印を泥に印するが如く、印を水に印するが如し。萬德昭然として十方坐斷す、獨り證し獨り超ゆ、初より依倚なし、若し見を起し相を作さば則ち交涉沒し。今時大いに種性を具するの士、始末を能くし、幻緣幻境を覷破し、猛勇に志を奮つて箇の邊に向ひ來る有り、亦久しく誠を存し蹟を探る者有り、然も患ふらくは方便力を缺いて、止だ知見解會を以て明め了ると爲す、殊に知らず。全坐子但だ是れ識心なることを。縱ひ解して佛邊に到り、窮めて

㋘大摠持。大陀羅尼也。
㋙大薩婆若海。一切智也、

修證盡頭の處に到るも、指蹤を出でざること在り、是の故に古來作家の宗師、人の解會を作すことを貴ばず、唯だ人の知見を舍てゝ胸中毫髮許を留めず、蕩然として太虛空に同じくして、攸久に養ひ得て成熟することを許す、此れ卽ち本地の風光、本來の面目なり。此の古に亙り今に亙るの地に到りて、生死を脫離せんこと何の難きことか有らんや。裴相國、龐居士が樣の如くんば、信得及を以て、便ち力を得て受用自在なり、塵緣夢境豈に別處より生ぜんや。若し脚下諦實なれば二六時中更に一切の物を轉じて能相なし、等閑に空勞々地にして心を生じ念を動ぜず、自らの天眞に隨つて平懷常實なり。便ち是れ㋐宦游㋑幹㋒幹より悉く皆照透す、阿誰か恩力をか承けたる。既に渠を識得すれば則ち水を下る船の如くに相似て、略ぼ左右照顧して扶持し將ち去れば、自然に速疾に般若に於て相應す。此れ禪流の所謂自ら工夫を做す處に觸れて、虛しく棄つる底の時節有ること無し。綿々長久に不退轉の心を辨せば、必ずしも盡く世間の有漏有爲を棄て、然る後無爲無事に入るにあらず、當に知るべし、元より兩種に非ざることを。若し去取を懷かば則ち打つて兩橛と作る、一切の時、一切の處唯だ此を以て實と爲す。力めて之を行ふに在り、當に衆流を截斷して大安樂を得べし。

㋐宦。官也。
㋑幹。能事也。
㋒幹。施なり、運なり、又轄と同じ。

嚴殊二道人に示す

參は須らく實參なるべし、見は須らく實見なるべし、用は須らく實用なるべし。若し纖毫も實ならざれば卽ち虛に落つ。此の實地は乃ち三世諸佛の證する所、歷代の祖師の傳ふる所なり。惟だ此れ一實なり、之を腳實地を蹋むと謂ふ、初より則ち須らく大悟すべし。若し只だ門頭戶底を認めて窠窟を作し、路布を說き機境照用取捨解會を立せば則ち徹せじ、此れ生死を透る要徑なり。臘月三十日に到りて一千二百斤の擔子、須らく此れ自ら力量有りて荷負し得、行いて方に可く翛然として獨脫す。是の故に無業國師垂示す、「臨終の際に若し一毫の凡聖情量未だ盡きず、纖毫の思慮未だ忘ぜざれば、便乃ち五陰に輕重せられ去る。」と、古人生死事大を以てす、是を以て道を訪ひ師を尋ねて決擇す、豈に只だ語言を學し、古人の公案を理會し、三五百轉の好語を下し得て、便ち當得す可けんや。將に知んぬ聰明黠惠は、皆障道の本たり、須らく冥然として寂を扣いて、放ちて身心をして怕れざる土木瓦礫の如くならしむるを要す。驀然として業根の種子を翻卻すれば、便乃ち非を知る。佛を學し法を學するを見るに、毒藥に中るが如くに相似たり。然る後佛法を透出して、乃ち本分事を體得す。此れ小緣に非す、分に就いて是れ久參の士なり、尤も宜しく放下して禪道を擔著せざるべし。上流を輕毀せず、愈愈透徹すれば愈々低細に、愈々高明なれば愈々韜晦す。箇の百不知百不會、無用處底の人と作りて、行は塵を動せず、言は衆を驚かさず、澹然安閑にして常に恭敬を行じて、始めて保任するに堪へたり。一切違順の境界に於て心動搖せず、志改易なし。達磨之を一相三昧とも一行三昧とも謂ふ。切に宜しく履踐純熟すべし、以て古今作用機緣に至るまで便ち七達八通にして、亦何次に留在せず。等閑に

蕩々地觸著すれば便ち轉じ、捺著すれば便ち動ず、拘牽惹絆することを得ず、千人萬人の中に居ると
も一人無きが如く相似たり。是れ强ひて爲すにあらず、任運に此くの如し、更に須らく末後の一語を
知りて始めて得べし。參せよ。

道明に示す

此の道至つて玄妙深邃なり、是を以て佛祖擬議を容れず、直截承當して見聞色聲の表に超出して、
單に契ひ密に領せんことを要す、之を敎外別行と謂ふ。然も之を得ること奥く、之を用ひること徹す、
理障を脫去して烹煅淨盡して極則の地に到り、須らく大達の善く決擇する
の士に遇ふて、剔撥して猛しく綫索を咬斷して、始めて能く佛もなく祖も
なき窠窟を出づべし。只だ平白汎々地、日用の間に於て、頂に透り底に透りて擔荷す、一法の情に當
るなく、一念の得べきなし、等閑に作爲して一切境界の中に向つて圓融無際なり、亦圓の融す可きな
く、亦融の圓すべきなし、始めて無間道の中に行いて功動を絕する處に游歷す。喚んで平常心と作す
得べからず、此くの似く腳實地を蹋めば虛に落つる底の工夫なし、綿々密々便ち田を掃ひ地を掠ひ、
筯を拈じ匙を把る、種々の作爲皆㋐場屋に入る。是の故に地藏、僧を呵して云く、「南方に禪を說く、
浩々地なり。便ち道く、爭でか我が箇裏に如かん、田に種ゑて飯を博へて喫するには、」と。此に准じて推
するに、忍苦㋑捍勞して大用を繁興せば、龕淺の中と雖も皆至實たり。惟だ心易移せず、一往に直前し

㋐場屋。對策及第の場也。
㋑捍。抵也。

て履踐し將ち去らんことを貴ぶ、生死も我を奈何せじ、何に況んや餘事をや。永嘉道く、「上士は一決
一切了す」と。信なるかな。

侍者法榮に示す

學道の人、能く矻々孜々として、生死の事を以て懷に居いて、晝三夜三勞苦を憚らず、善知識に事
へて一言半語の發藥を求む。呵斥種々の惡境に遭ふと雖も、而も力めて向前す。宿昔より自然の種智
を薰成するに非ずんば、必ず且く猶豫し、或は則ち退悔せん。能く此に於て㋐恬然として初より其の
志願を動搖すること無き、亦頗る得難し。然も此の本有の性は、現定の見聞覺知なり。父母の緣も生
ず可らず、境界の緣も奪ふ可らず、若し向來知解に隨はゞ卽ち業識に墮す。
若し猛しく擺撥して、一邊に棄著して只だ虛靜を守り、一念不生の地に到
りて解路を掀翻し、機緣に落ちず直下に了々として毫髮の疑問無ければ、便ち截徑承當して第二頭な
し、則ち玄妙理性尙ほ自ら脫去す。況んや世間の事物に隨つて轉せられんや。是の故に古人卽心卽佛
に大力量を得、上上佛祖を立せず、紅爐猛燄の處に向つて透徹す、但だ把得住作得住して便ち住山し
去る。此れ須らく十年の工夫一色に專注して、便ち趣向入す可し。趙州の云く、「儞衣單下に向つて坐
すること十年せんに、若し禪を會せずんば老僧が頭を截取し去れ。」と、斷定して言句機境の上に在ら
ず、只だ心休し意歇せんことを要す。便ち底に徹りて安樂ならん。

㋐恬。靜也。

道人に示す

當人脚跟下一段の事、本來圓滿にして曾て動搖せず、威音王佛の前より直に如今に至るまで廓徹靈明にして如々平等なり。只だ見を起し心を生じ分別執著するが爲めに、便ち情塵煩惱擾攘有り。若し利根勇猛の身心を以て直下に頓に休して、一念不生の處に到れば、卽ち是れ本來の面目なり。所以に古人の道く、「一念生せざれば全體現ず」と。此の體乃ち金剛不壞の正體なり、六根縱に動ずれば雲に遮らる。此の動乃ち妄想知見なり。多く聰明の人を見るに、妄心了々するを以て此の妄心を放て下さず、歇して不動の處に至るに、逗到して肯て自ら本性を承當せず、便ち喚んで空豁々地と作す。卻つて有を棄て空に著けんと擬す、是れ大病なり。若し心有りて一邊を棄て、一邊に著せば、便ち是れ知解なり。底に徹して性を見ること能はず、此の性は有に非ず棄つべからず、此の性は空に非ず著すべからず。要らず當に棄著有無を離卻して、直下に怙々地、圓湛虛凝翛然安穩にして、便ち能く此の眞淨妙心を自信すべし。餉間も世緣に牽き拖かるれば、便ち能く覺得して他に隨ひ去らじ。覺すれば便ち把得住、覺せざれば卽ち他に隨ひ去る。直に須らく長時虛閑にして自ら工夫を做し、諸妄を消遣して、箇の自家省悟の處有らしめて始めて得べし。昔人の云く、「當處を離れず、常に湛然覺むれば、卽ち知んぬ君が見る可らざることを。」と。

仲宣維那に示す

嶺外の祖師曹溪は乃ち佛種なり、迹を㊀新城に發し、法を番禺に開く。日世を照すが如く、麟鳳の祥を呈するが如し、海內宗仰せずと云ふこと莫し。厥の後揭揚するに、大巔、三平のごとき龍象間々出で、昌黎見刺を拔く、世の明炬たり。是に知んぬ彼に人有ることを。蓋し俗を絕し倫を離る、眞の克家の種草なり、其の跂步志業天の高きが如し。那ぞ肯て碌々行に循ひ隊を逐はんや。昔し興化、克賓に謂へり、「彌久しからずして唱導の師たらん。」云く、「我れ者の㊁保社に入らじ。」化微して云く、「會し了りて入らるざるか、會し了らずして入らざるか。」賓云く、「沒交涉。」と、乃ち令を行じて罰錢して出院す。多少の人、常情に墮在す、然らざれば奇特の機關と作す、豈に他家通霄の正路を知らん。只管風に望んで摸摸す、是れ箇の中の人にして、方に曹溪、大巔、三平、興化、克賓、羽毛相似たる可きを要須す。且く作麼生か是れ箇の中の人。鳳凰直に烟霄の外に入る、誰か怕れん林間の野雀兒を。

㊀新城。六祖新州襲新人なり。
㊁保社。保伍同社を謂ふ。

中竦知藏に示す

巖頭の道く、「大凡そ宗を扶け敎を唱ふる、意未だ屑せざる時、一たび覷いて便ち透るに在り、縱然ひ理論すとも亦痕迹なし」と。良なるかな眞の作家の手段なり。明眼の漢纔に門に入り來れば、已に深淺を辨ず、更に兩片皮を皷して泥團を弄するを待たば、豈に了期有らんや。雪峯、投子に問ふ、「一槌に便ち成ずる時如何ん。」云く、「是れ性燥の漢にあらず。」「一槌を假らざる時如何ん。」云く、「不快漆